

---

# 沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)

---

一本島周辺離島及び那覇市編一

---

2004年(平成16年)3月  
沖縄県立埋蔵文化財センター

---

## 序

本報告書は文化庁から国庫補助を受けた沖縄県戦争遺跡詳細分布調査のうち、平成14～15年度に実施した本島周辺離島地区及び那覇市における調査成果をまとめたものであります。

本県は去る沖縄戦において、多くの一般住民を巻き込んだ激しい戦闘が展開され多数の尊い命や財産が失われました。沖縄諸島及び宮古・八重山諸島の島々にはこの沖縄戦によって残された、多くの構造物や遺構などが残されています。

平成10年度より開始された戦争遺跡詳細分布調査のなかで、本報告書は「南部編」、「中部編」、「北部編」の続編であり、本報告書をもって沖縄本島及び周辺離島地区を網羅するものであります。

全県的な詳細分布調査の成果は、戦争遺跡を文化財として保存検討するための資料として、また、諸開発事業との協議調整や歴史・平和教育としての活用に資するための基礎資料として役立つものと考えています。

本報告書が文化財保護思想の普及啓発や地域文化財への関心、並びに沖縄県の歴史に対する理解と認識を深めるために、多方面にご活用いただければ幸いに存じます。

末尾になりましたが現地調査並びに報告書作成にあたり、多大なるご指導ご協力を賜りました文化庁をはじめ、関係市町村教育委員会などの各位に対し深く感謝申し上げます。

2004年（平成16）3月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所 長 安里嗣淳





真鼻毛の擬装砲台跡（粟国村）



喜久村家の防空壕（久米島町）



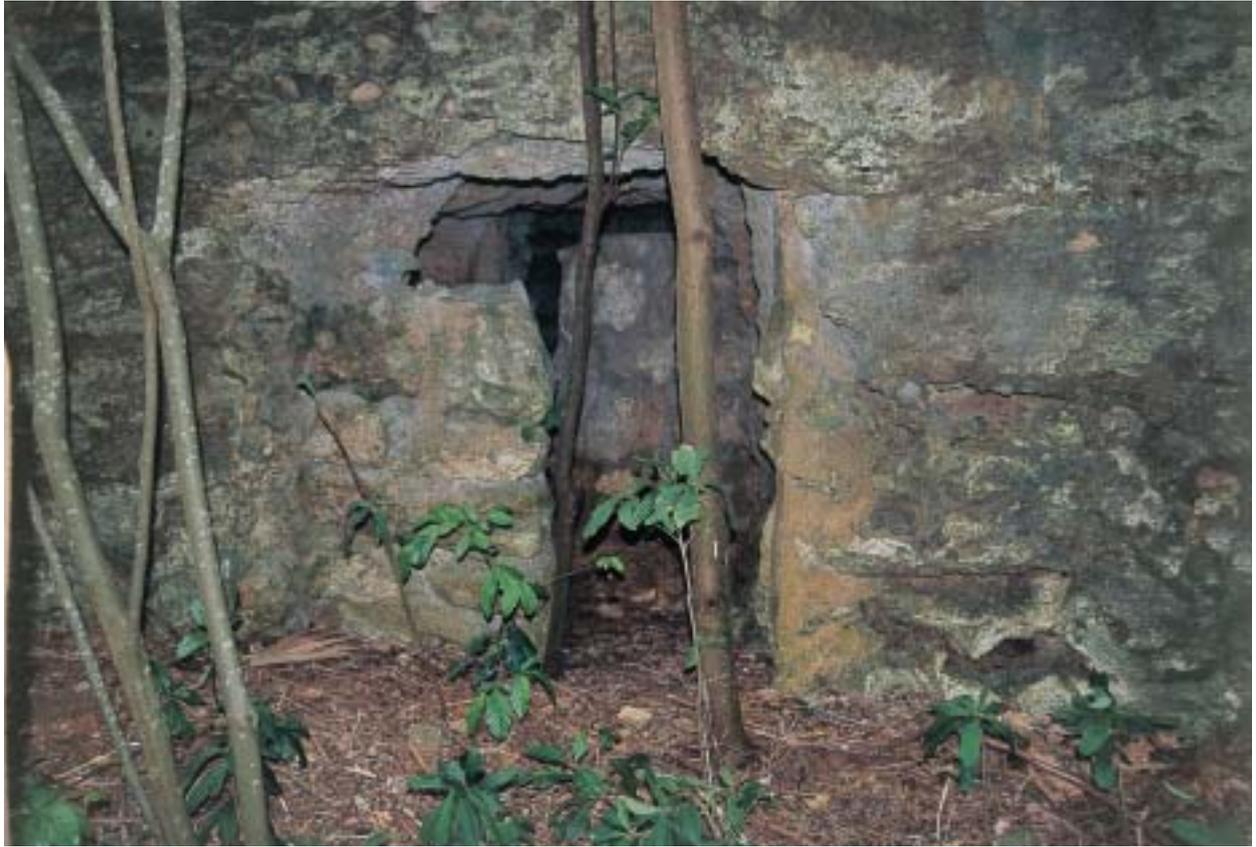


北山「にしやま」の陣地壕（渡嘉敷村）



大和馬の壕（座間味村）





黄金山の陸軍本部壕（北大東村）

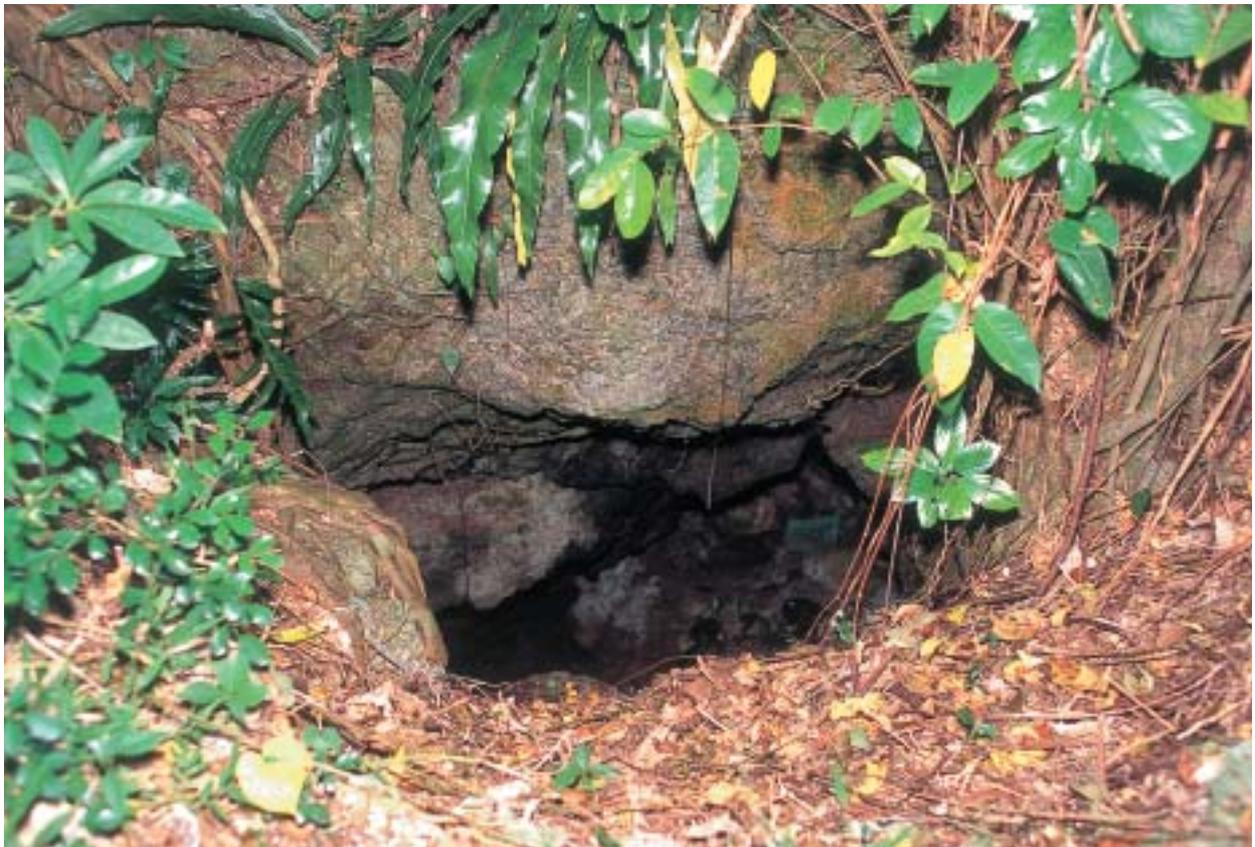


塩屋の銃眼（南大東村）





第32軍司令部壕第5坑口（那覇市）



新壕「ミーゴ」(那覇市)



## 例 言

- 1 本報告書は、平成14～15年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（本島周辺離島地区及び那覇市）の成果を収録したものである。
- 2 本事業は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が行ったものである。調査は県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。
- 3 執筆者は次のとおりである。また、編集作業は川元哲哉を中心に矢沢秀雄・又吉純子の協力を得て行った。

川元 哲哉 第1章、第2章、第3章1節、2節、3節、4節、6節、7節b、8節、  
9節、10節j～l、第4章  
矢沢 秀雄 第3章5節、7節a、10節a～i

- 4 本報告書に使用した地形図は、国土地理院（平成9年5月1日）発行の25,000分1を複製、使用した。
- 5 附図（遺跡分布図）には、踏査で確認されている戦争に関連する戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてプロットした。
- 6 本調査において、本島周辺離島地区各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。特に記して感謝申し上げます。
- 7 本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 本報告書第3章の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難、陣地、政治・行政、記念碑等、交通関係、不明、その他  
形態：自然壕、人工壕、建造物、構築物、不明、その他

※本報告書では、主として軍事目的に建築または土木工事をを行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

### 別紙戦争遺跡分布図凡例

- 1 使用した地形図は国土地理院（平成9年5月1日）発行の25,000分の1を複製、転用した。
- 2 遺跡一覧表の番号は、各市町村とも概ね北の字から南の字及び東の字から西の字へと番号を並べており、分布図と一覧表の番号は対応している。
- 3 遺跡所在地について、本文表記の番地は遺跡の中心部と思われる位置を示しているもので、所在地を限定したものではない。分布地図上に示した範囲についても同様の意図である。
- 4 遺跡の名称については、各市町村において差異があるので、ここでは、地元住民の呼称や、使用していた部隊名が判るものはそれを使用した。
- 5 一覧表の名称は方言名が多いためにカタカナ表記が多い。そのため地元の発音と異なるものが多々あると思われる。
- 6 一覧表中の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。  
種別：住民避難、陣地、政治・行政、記念碑等、交通関係、不明、その他  
形態：自然壕、人工壕、建造物、構築物、不明、その他  
※本附図では、主として軍事目的に建築または土木工事をを行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。
- 7 遺跡のほとんどが、試掘調査、発掘調査によって範囲等が変わる場合があるので、近辺での開発工事については当該市町村教育委員会との連絡調整が必要である。

# 目 次

序  
卷頭図版  
例 言

第1章 調査の概要	1
第1節 調査体制	1
第2節 調査経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7
第3章 各市町村における戦争遺跡	
第1節 伊平屋村	11
a. 田名神社の交通壕	11
b. くまや洞窟の弾薬倉庫跡	13
第2節 伊是名村	14
伊是名村の住民避難地域	14
第3節 栗国村	16
a. 栗国のテラ	16
b. 真鼻毛の擬装砲台跡	17
第4節 渡名喜村	19
弾痕のある建造物群	19
第5節 久米島町	21
a. 喜久村家の防空壕	21
b. 比嘉一本松の住民避難壕	24
c. 上田森の監視所跡	26
第6節 渡嘉敷村	29
a. 北山（にしやま）の陣地壕群	29
b. 渡嘉志久の特攻艇秘匿壕	30
第7節 座間味村	32
a. 大和馬の壕と貯水用コンクリート壁	32
b. 恩名ガーラの御真影奉護壕	34
第8節 北大東村	35
a. 黄金山陸軍本部壕	35
b. 掲揚台の監視所跡と待避壕	37
第9節 南大東村	39
a. 電波探知壕	39
b. 監視所（軍）	41
c. 連隊本部壕（具志堅洞）	42
第10節 那覇市	43
a. 第32軍司令部壕と周辺遺跡	43
b. 真嘉比川沿いの壕	45
c. 弁ヶ嶽のトーチカ	47
d. 新壕（ミーゴ）	48
e. 識名宮ヌガマ（お宮のガマ）	50
f. シッポウジヌガマ	51
g. てんぷら坂の壕	52
h. 楚辺1丁目の壕（城岳の壕）	54
i. ことぶき山壕	56
j. 「らくだ山」の海軍陣地壕①	57
k. 海軍砲台跡	60
l. 高射砲部隊の壕	61
第4章 結 語	64

## 目 次

第1図	沖縄本島の位置	5
第2図	調査地区の位置	6
第3図	田名神社の交通壕平面図及び断面図	12
第4図	真鼻毛の擬装砲台跡	18
第5図	弾痕のある建造物群（南向き）	20
第6図	喜久村家の防空壕遺構図	22
第7図	比嘉一本松の住民避難壕	25
第8図	上田森の監視所跡遺構図	27
第9図	渡嘉志久の特攻艇秘匿壕遺構図	31
第10図	大和馬の壕遺構図	33
第11図	黄金山の陸軍本部壕（平面図）	36
第12図	電波探知壕遺構図	40
第13図	第32軍司令部壕位置平面図及び断面図	44
第14図	真嘉比川沿いの壕平面略図	46
第15図	新壕（ミーゴ）略図	49
第16図	てんぷら坂の壕（平面略図）	53
第17図	楚辺1丁目の壕（城岳の壕）概略図	55
第18図	「らくだ山」の海軍陣地壕①の遺構図	58
第19図	「らくだ山」の海軍陣地壕①の位置	59
第20図	高射砲部隊の壕遺構図	62

## 表 目 次

第1表	本島周辺離島地区町村及び那覇市の人口・世帯・面積	4
-----	--------------------------	---

## 図版目次

巻頭図版1	上：真鼻毛の擬装砲台跡（栗国村） 下：喜久村家の防空壕（久米島町）
巻頭図版2	上：北山「にしやま」の陣地壕（渡嘉敷村） 下：大和馬の壕（座間味村）
巻頭図版3	上：黄金山の陸軍本部壕（北大東村） 下：塩屋の銃眼（南大東村）
巻頭図版4	上：第32軍指令部壕第5坑口（那覇市） 下：新壕「ミーゴ」（那覇市）

図版1	田名神社の交通壕	11
図版2	くまや洞窟の弾薬倉庫跡	13
図版3	伊是名村の住民避難地域	15
図版4	栗国のテラ	16
図版5	真鼻毛の擬装砲台跡	17
図版6	弾痕のある建造物群①	19
図版7	弾痕のある建造物群②	20
図版8	喜久村家の防空壕①	21
図版9	喜久村家の防空壕②	23
図版10	比嘉一本松の住民避難壕	24
図版11	上田森の監視所跡①	26
図版12	上田森の監視所跡②	28
図版13	北山（にしやま）の陣地壕群	29

図版14	渡嘉志久の特攻艇秘匿壕	30
図版15	大和馬の壕と貯水用コンクリート壁	32
図版16	恩名ガーラの御真影奉護壕	34
図版17	黄金山陸軍本部壕	35
図版18	掲揚台の監視所跡と待避壕①	37
図版19	掲揚台の監視所跡と待避壕②	38
図版20	電波探知壕	39
図版21	監視所（軍）	41
図版22	連隊本部壕（具志堅洞）	42
図版23	第32軍司令部壕と周辺遺跡	44
図版24	真嘉比川沿いの壕	46
図版25	弁ヶ嶽のトーチカ	47
図版26	新壕（ミーゴ）	49
図版27	識名宮ヌガマ（お宮のガマ）	50
図版28	シッポウジヌガマ	51
図版29	てんぷら坂の壕	52
図版30	楚辺1丁目の壕（城岳の壕）	54
図版31	ことぶき山壕	56
図版32	「らくだ山」の海軍陣地壕①	57
図版33	「らくだ山」の海軍陣地壕②	59
図版34	海軍砲台跡	60
図版35	高射砲部隊の壕①	61
図版36	高射砲部隊の壕②	63
図版37	伊平屋村 田名神社の交通壕 上：全景 下：壁面部	67
図版38	伊平屋村 くまや洞窟入口全景	68
図版39	粟国村 上：真鼻毛の擬装砲台跡 下：内嶺家の防空壕	69
図版40	渡名喜村 上：弾痕のある建造物群 下：アマンザキの住民避難壕	70
図版41	久米島町 上：大田の住民避難壕 下：ヤジャーガマ	71
図版42	渡嘉敷村 北山（にしやま）の陣地壕群 上：壁面に残る煙道 下：煙道近景	72
図版43	座間味村 大和馬の壕貯水用コンクリート壁 上：前面 下：坑木跡	73
図版44	座間味村 上：恩納ガーラの御真影奉護壕 下：シンジュの壕	74
図版45	座間味村 上：特攻艇秘匿壕（阿嘉島） 下：特攻艇秘匿壕（慶留間島）	75
図版46	北大東村 黄金山の陸軍本部壕 上：爆風除けのある壕口 下：御真影奉護棚	76
図版47	南大東村 上：電波探知壕内部 下：弾薬庫	77
図版48	那覇市 上：首里末吉の山陣地 下：ムラグッヌガマ	78
図版49	那覇市 上：旭ヶ丘公園の陣地跡 下：垣花台地の陣地跡	79
図版50	那覇市 上：希望丘公園陣地跡 下：緑丘公園陣地跡	80

# 第1章 調査の概要

## 第1節. 調査体制

現地調査（平成14～15年度）から資料整理及び報告書の刊行（平成15年度）まで、下記の体制で実施した。また、本島周辺離島・那覇地区市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者からの協力を随時得ることができた。

### a 平成14年度の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会

教育長	津嘉山朝祥
県教育庁文化課 課長	日越国昭
〃 課長補佐	長堂嘉一郎・大城 慧
〃 記念物係長	島袋 洋
〃 主任専門員	岸本義彦

調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 安里嗣淳

調査事務

副所長兼庶務課課長	安富祖英紀
〃 主任	西江幸枝
〃 主事	城間千賀

調査総括

調査課課長 盛本 勲

調査員

調査課主事 川元哲哉

調査補助員

文化財調査嘱託員 矢沢秀雄・地主園亮  
調査作業員 吉川由紀・砂辺枝里子

### b 平成15年度の調査体制

事業主体・・・沖縄県教育委員会

教育長	山内 彰
県教育庁文化課 課長	日越国昭
〃 課長補佐	上地泰順・大城 慧
〃 記念物係長	島袋 洋
〃 専門員	中山 晋

調査主体・・・沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 安里嗣淳

調査事務

副所長兼庶務課課長	安富祖英紀
〃 主査	比嘉美佐子
〃 主任	西江幸枝

## 調査総括

調査課課長	盛本 勲
調査員	
主事	川元哲哉
専門員	山本正昭
調査補助員	
文化財調査嘱託員	矢沢秀雄
調査作業員	佐藤明美

### c 委嘱調査員

調査員として以下の方々を委嘱し調査を実施した。

県立南部農林高等学校	教諭	吉浜 忍	(平成14年度～平成15年度)
琉球大学法文学部	教授	池田榮史	〃
沖縄職業能力開発大学校	助教授	村上有慶	(平成14年度)
沖縄市経済文化部文化振興課	副主幹	恩河 尚	〃

### d 調査指導及び調査協力

調査指導として以下の文化庁文化財部記念物課の調査官に指導を仰いだ。

坂井 秀弥 主任文化財調査官  
加藤 真二 文化財調査官

調査協力として以下の方々のご助言をいただいた。

真栄平房敬・星野正子・内間伸・与座立善・新垣進松・吉嶺全一・志堅原良明・知念堅亀・伊礼孝進  
小嶺幸信・小嶺隆良・西浜良修・久手堅憲俊・崎山トミ子

資料整理の際、以下の方々のご協力をいただいた。

又吉純子・比嘉登美子・平良貴子・比嘉孝子・金城敬子・新垣利津代・譜久村泰子・久保田由美  
萩堂さやか

(敬称略)

## 第2節. 調査経過

今回の分布調査は、平成10年度から開始された本事業のうち、本島周辺離島（島尻郡に属する9町村－伊平屋村・伊是名村・粟国村・渡名喜村・久米島町・渡嘉敷村・座間味村・北大東村・南大東村）地区及び那覇地区を調査対象にしたものである。

本島周辺離島地区については平成14年度に遺跡の分布状況やその範囲確認を行うため、表面踏査を主体に実測調査、聞き取り調査などを行い、平成15年度にその資料整理を実施した。

また、那覇地区については、平成11年度に現地調査を完了する予定であったが、想定されていた調査対象遺跡数の増加や、他調査地区の調査報告書を先に刊行する必要があるため、他調査地区と並行して平成12年度～平成14年度にかけて、随時現地調査を行うこととなった。平成15年度にその資料整理を実施した。年度ごとの概要は以下のとおりである。

—平成14年度—

戦争遺跡詳細分布調査要項に基づき、4人の調査員を委嘱し、座間味村の現地調査及び4回にわたる調査員会議を開催した。

これまで本島周辺離島地区については、体系的な戦争遺跡数についての把握がなされていなかったことから、市町村教育委員会を經由して各（字）自治会に戦争遺跡に関するアンケートを送付した。

それらの回答及び事前に当センターが把握していた遺跡情報をもとに、戦争遺跡の所在確認、遺構図作成、聞き取り調査を実施し、本島周辺離島地区において72ヶ所の戦争遺跡を確認することができた。

那覇地区においては、「沖縄県史」と「那覇市史」で戦争体験記録集が刊行されている。かつ、那覇市教育委員会文化財課で那覇市戦争遺跡の調査票を保有していた。この調査票を基礎資料として、県立図書館蔵沖縄戦関連図書及び沖縄県公文書収蔵米軍関係撮影写真資料の内容をふまえ、戦争遺跡の所在確認・聞き取り調査・遺構図作成を実施した。この調査過程において、戦争遺跡に関連する行政資料を活用し、戦争遺跡の情報の補填を行った。利用した行政資料は以下のとおりである。

「都市内防空壕等実態調査票」 昭和54年度資料 県土木部都市街路課

「未収骨埋没壕等一覧表」 平成8年度資料 県生活福祉部援護課

「第32軍司令部壕保存・公開計画」 平成9年度資料 県総務部平和推進課

「那覇市戦争遺跡」 平成11年度資料 那覇市教育委員会文化財課

「那覇市の戦跡マップ」 平成12年度資料 那覇市教育委員会文化財課

これらの行政諸資料を収集・整理をして現地踏査を実施し、那覇市内で63ヶ所の戦争遺跡の調査を行った。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節. 地理的環境

(本島周辺離島地区)

本報告書における調査対象地域である本島周辺離島地区とは、島尻郡に属する9町村（伊平屋村・伊是名村・粟国村・渡名喜村・久米島町・渡嘉敷村・座間味村・北大東村・南大東村）を指すものである。現行の行政区域において括ったひとつの調査対象地域であるが、各島により地理的環境が異なるため、ここでは町村ごとに、戦争遺跡の分布状況が確認できる島についての概要を述べることにする。

伊平屋島は沖縄島本部半島より約50kmにある伊是名・伊平屋諸島中最大の島で、北西－南西方向に山地が走る細長い島である。地質は古生代本部層のチャートや中生代の砂岩・頁岩などで、それらを主とする山間地域が多い。

伊是名島は伊平屋島の南端より約6km南に位置する、周囲約17kmの楕円形の島である。地質は島中央部に砂岩、島北側と南側には上述したチャートが見られる。台地状の山地が北西－南東方向に走り、その北東側と南西側に集落が立地している。

粟国島は沖縄島那覇の北西約60kmに位置し、周囲約12kmの規模をもつ。主として琉球石灰岩からなる島であるが、霧島火山帯に属しているため、西側には火山岩もみられる。島の南側から中央部にかけて数段の海岸段丘があり、そこに集落が所在している。

渡名喜島は沖縄島那覇の西方約58kmに位置し周囲約12kmの島である。粟国と同じく霧島火山帯に属するため島北部に火成岩が多い。また、島南部は堆積岩・変成岩からなる山岳地帯を形成し、中央部の低地に集落が立地している。

久米島は沖縄島那覇の西方約100kmに位置し、周囲約53kmをはかり、本調査地域の島嶼の中で最も面積の大きい島である。島北側に300m程の高度を有する山地があり、それから南に向かって台地が発達している。台地は土地改良事業によりサトウキビ栽培を行っている畑作地が多い。

渡嘉敷島は沖縄島那覇の西方約30kmに所在し、慶良間諸島中最大の島である。周囲約29kmをはかる、おもに中生代の千枚岩や砂岩片岩からなる山地状の島である。中央部から北よりの東岸の低地に渡嘉敷、南よりの西岸の低地に阿波連の集落がある。

座間味島は慶良間諸島中の一島で、沖縄島那覇の西方約44kmに位置する。周囲約24kmをはかり、島の東半分は中生代の砂岩、西半分は中生代の千枚岩からなり、それらを主とする山間地域が多い。座間味・阿真・阿佐の3集落が島の南側に位置する。

座間味村域の有人島として他に、阿嘉・慶留間島がある。座間味島と同様に山間地域が多く、国指定天然記念物ケラマジカが生息することでも知られている。これら慶良間諸島は、近年ダイビングスポットやホエールウォッチングなど、マリンレジャー観光が隆盛している。

北大東島は沖縄島東方約385kmの洋上に位置する。周囲約12km、東西に楕円をなす隆起環礁によってできた島である。島中央部は古いラグーンで盆地状になっている。明治期に八丈島出身の玉置半右衛門によって、サトウキビ作地及び燐鉱石の採掘地として開拓される以前は、無人島であったとされている。

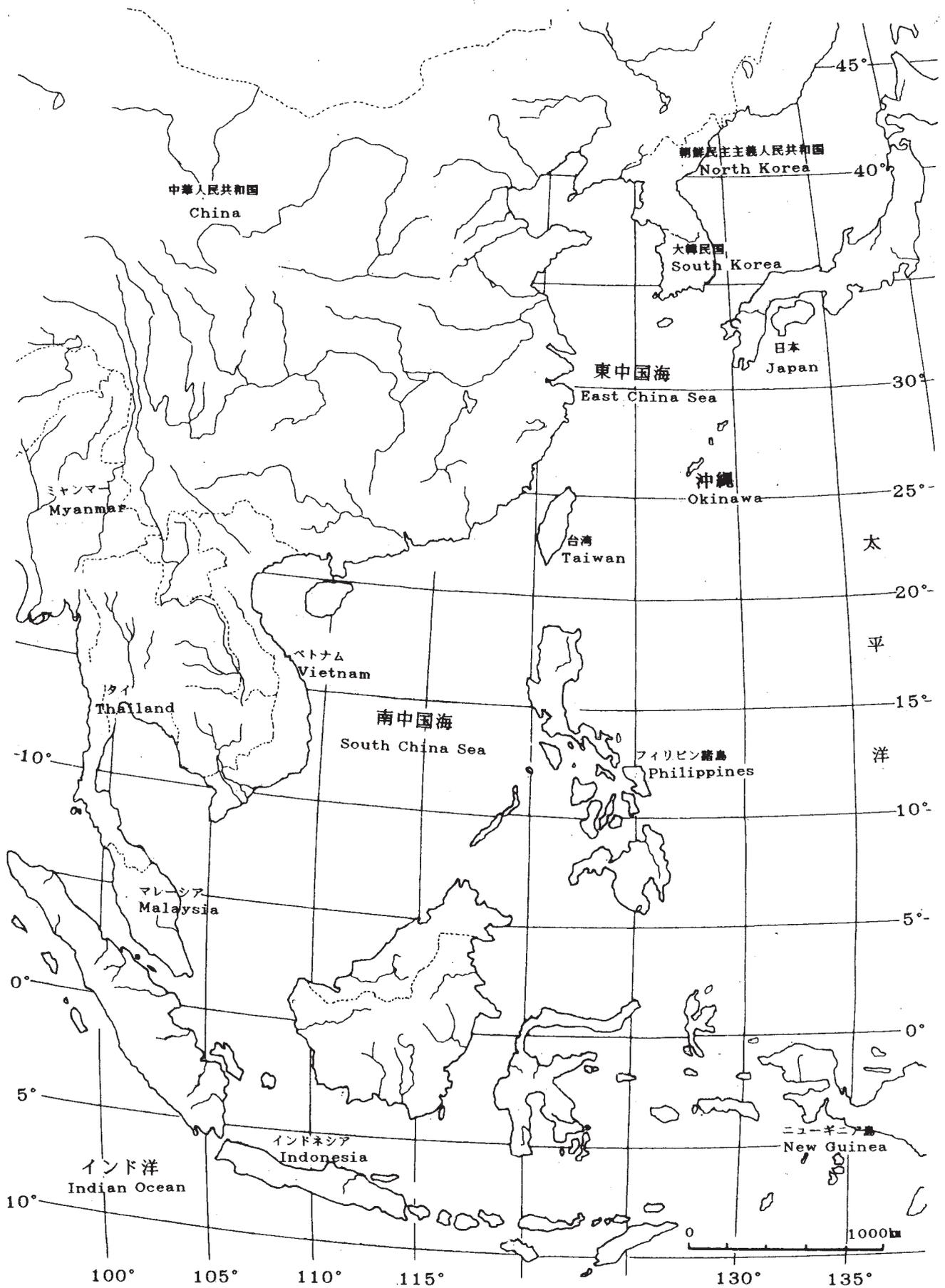
南大東島は沖縄島東方約370kmの洋上に位置する。周囲約21kmで北大東島の南南東約8kmに所在する。典型的な隆起環礁からなる島で、島中央部が窪んだドーナツ状を呈し、湿地帯を形成して

第1表 本島周辺離島地区町村及び那覇市の人口・世帯数・面積

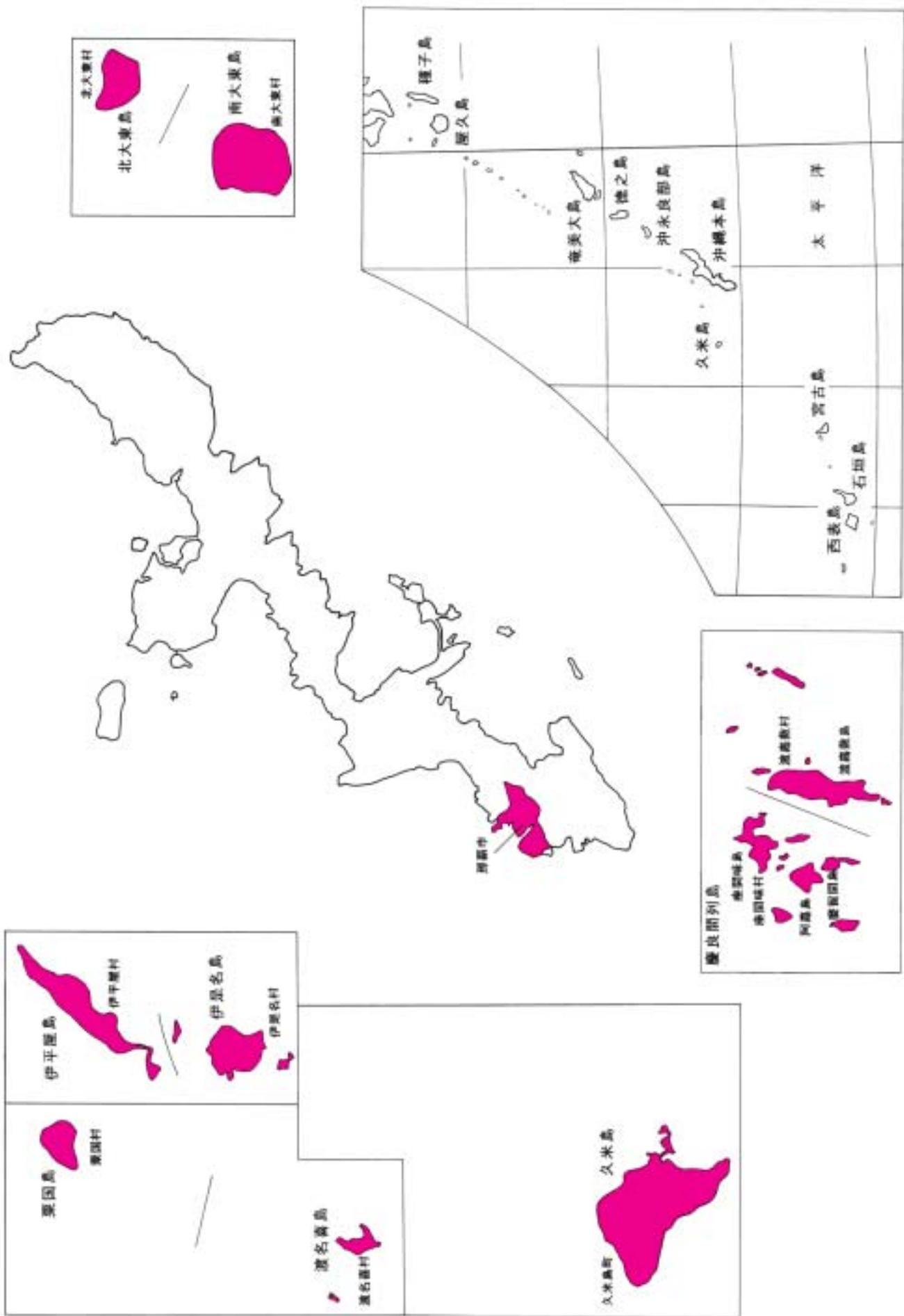
町村名	人口(人)	世帯数(世帯)	面積(km <sup>2</sup> )
伊平屋村	1,610	621	21.72
伊是名村	1,948	778	15.42
粟国村	986	504	7.63
渡名喜村	536	265	3.74
久米島町	9,230	3,308	63.50
渡嘉敷村	764	394	19.18
座間味村	1,034	524	16.74
北大東島	689	353	13.10
南大東島	1,459	730	30.57
周辺離島地区計	18,256	7,477	191.60
那覇市	305,173	116,655	38.99

(注1) 人口及び世帯数については、県企画開発部統計課「沖縄県人口移動報告」による

(注2) 面積については、国土交通省国土地理院「平成14年全国都道府県市区町村別面積調」による。但し、那覇市については一部境界未定のため、平成13年10月1日現在の推計面積を掲載



第1図 沖縄本島の位置



第2図 調査地区の位置

いる。北大東より先に玉置半右衛門によってサトウキビ作地として開拓された。

大東諸島には他に南大東島の南方約150kmの洋上に沖大東島が所在する。周囲約4kmの小島で、戦前は燐鉱石の採掘がされた。戦時中は陸軍の島守備隊が駐屯していたが、現在は米海軍の射爆撃場で無人島になっている。

#### (那覇地区)

那覇市は沖縄島南部西海岸に位置する。県下最大の都市で、県庁所在地である。北は浦添市、東は西原町、南東は南風原町、南は豊見城市と接している。北から北東にかけて天久・末吉・首里・弁ヶ岳の丘陵地、南は小禄の丘陵地が取巻く。地質は第3紀泥岩の丘陵・低地とそれを覆うように琉球石灰岩の台地、海浜堆積層からなる海岸低地及び埋立地により形成されている。特に小禄地区は基盤の第3紀泥岩のほか、第3紀砂岩(ニービ)が広く分布し、それぞれ丘陵・低地を形成している。

交通面では、市内西側を国道58号線、中央部を国道330号線がそれぞれ南北にはしり、小禄ー那覇を結ぶ国道331号線など多くの幹線道路が結ばれている。平成15年8月には、沖縄都市モノレール(ゆいレール)が開通し、県内で戦後初の鉄軌道交通体系として、観光の利便化や交通渋滞の解消を期待されている。

#### (参考文献)

河名俊夫『琉球列島の地形』新星図書出版 1988年

平凡社『日本歴史地名体系第48巻 沖縄県の地名』平凡社 2002年

## 第2節. 歴史的環境

### (本島周辺離島地区)

調査対象地域の各島により歴史的環境が異なるため、第1節と同様に町村ごとに戦争遺跡の分布状況が確認できる島について、特に近世から沖縄戦にかけて述べることにする。

伊平屋諸島と称される現伊平屋村・伊是名村に属する島々は、近世以前より1907年まで、「伊平屋島」の名で一体の間切に準ずる行政単位として扱われていた。近代においても、1908年に沖縄県及島嶼町村制施行、伊平屋村として同一の行政単位とされた。伊是名・伊平屋の両村に分村したのは1939年で、両村とも地理的には国頭郡に近いが島尻郡に含まれる。両村とも沖縄戦中には組織的な日本軍の駐屯はなかったが、無防備離島の残置工作者として、陸軍中野学校出身者を国民学校訓導・青年学校指導員の名目で諜報員が派遣されていた。一般に特務教員と呼ばれるこれらの者は、伊是名・伊平屋・粟国・久米・多良間・黒島・波照間・西表・与那国の各島で任務に就いている。

粟国島・渡名喜島は近世時において、間切に準じる「島」として把握されていた。また、久米島には具志川間切・仲里間切が置かれ近世では久米方に所属されていた。これらの島は慶良間諸島とともに王国時代の進貢船の経路にあたり、渡閩航路図(県立博物館蔵)には那覇港ー中国福建省間の航路上に三島(粟国島・渡名喜島・久米島)の位置と島影が描かれている。久米島の兼城泊(兼城港)・真謝泊(真謝港)は進貢船往復路の寄港地として今に知られている。沖縄戦中には、粟国・渡名喜の両島に組織的な日本軍は駐屯しなかったが、久米島には通信部隊を主とする三十数人の海軍部隊が配備されていた。

渡嘉敷村・座間味村からなる慶良間諸島は、本島那覇からよく眺望できることもあり、「慶良間は見えても睫は見えない」など「灯台もと暗し」と同じ例えで語られてきた。これらの島々は、近世時において慶良間島と称された。特定の島を指すものではなく、渡嘉敷間切と座間味間切を含めた行政単位としての扱いであった。1944年、沖縄に第32軍が創設されるに伴い慶良間諸島には日本軍の基地が建設されることになった。米上陸船団に特別攻撃を行うための海上挺進隊が、座間味島に第1戦隊、阿嘉・慶留間島に第2戦隊、渡嘉敷島に第3戦隊が配備された。しかし、1945年3月に米軍は慶良間諸島に激しい艦砲射撃を浴びせ、上陸の準備を見せると、渡嘉敷島では「企図秘匿上適当ならず」として特攻艇を隊員自ら破壊し、その役割は放棄された。米軍はまず阿嘉島に上陸、座間味村の各島を抑えたあと、渡嘉敷島への上陸を開始した。米軍の上陸とともに島民の中には、鎌や鍬、棒切れ等で家族・親戚等が殺し合ういわゆる「集団自決」をおこした者もあった。恐怖や絶望など様々な要素により集団的なパニックが起きたといわれている。

南北大東島は近世琉球王国期よりウファガリジマ（大東島）として知られていた。「イギリス海軍水路誌」では南北大東島をボロジノ島、沖大東島をラサ島としている。日本政府は1885年に南北大東島を、1900年に沖大東島を領土に編入した。1944年、第32軍創設に伴い、各島には陸海軍からなる島守備隊が配備され、各島守備隊を統括する連隊本部は南大東島に置かれた。このため大東諸島では、米軍による空襲や艦砲射撃があり、特に南大東では島の基幹産業施設である製糖工場が破壊される大規模な被害があった。

#### （那覇地区）

琉球王府は1609年薩摩藩島津氏の進攻を受け、同藩に従属させられ幕藩体制に取込まれて、近世的世界への変容を余儀なくされる一方、首里城を中心に王朝文化が発展していくことになった。17世紀中頃、首里・那覇などは旧来の間切から行政的に分離され、町方として首里三平等、那覇四町、泊村・久米村が成立した。特に首里三平等は王国の政治中枢である首里城を中心に御殿・寺社が建ち並ぶ王国随一の都市になった。

近代に入ると、沖縄県内では数度の行政区域の変更が行われた。時期により区割りの変更に差違があるが、1921年に首里市・那覇市が誕生し、これに真和志村・小禄村を加えると、概ね現在の那覇市域にあてはまることになる。

1944年南西諸島に第32軍が新設されると、那覇市域にも部隊の増強配備と陣地構築が進められた。1945年米軍の沖縄進攻が迫るなか、第32軍は首里城の地下30mに総延長千数百mの司令部壕を構築した。4月1日本島中部西海岸に米軍が上陸、本島での地上戦が始まった。南部に進撃する米軍と、防衛する日本軍の間で、天久高地では熾烈な戦いが繰り広げられた。米軍は5月中頃には天久高地南側まで制圧し、その後那覇市街地に入ったが、市街地は空襲や艦砲射撃ですでに廃墟と化していた。

司令部壕のあった首里は集中攻撃を受け5月末に陥落。首里城をはじめとする琉球王国時代の文化遺産の大半が破壊されることとなった。

#### （参考文献）

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲出版社1968年

県教育庁文化課『沖縄県歴史の道調査報告書—国頭・中頭方西海道』県教育委員会1986年

県教育庁文化課『沖縄県歴史の道調査報告書—久米島及び周辺諸島の道』県教育委員会1992年

（財）県文化振興会公文書管理部史料編集室『概説沖縄の歴史と文化』県教育委員会2000年

# 第 3 章



## 第1節. 伊平屋村

### a. 田名神社の交通壕

所在地：伊平屋村字田名

立地（標高）：丘陵（約35m）

形態：構築物

種別：住民避難

現状：交通壕内に一部土砂流入がみられるが比較的良好

保存状況：田名神社北側の丘陵に現状維持

築造者：田名青年会

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：空襲時の避難用とした。

主な遺構：交通壕

#### 概要

田名集落北側の丘陵地で、田名神社の北約20mの丘陵中腹に所在する。この丘陵部山頂には、田名グスクと呼ばれる山頂一帯を石積みで巡らせたグスクがあることが知られている。

交通壕は、塹壕や散兵壕と同様に天井部を被わない比較的構築が簡易な壕であるといえる。よって、壕内に入ると左右の平面な動きには不自由をしないが、空襲や機銃掃射など空中からの攻撃を防御するにはあまり役に立たなかった。

確認された交通壕は、東西に約14mの一直線上をなす。最深部が約90cmで大人が屈むと体全体が隠れる程度の規模がある。

聞き取り調査によると、同規模の交通壕が田名神社北側の丘陵中腹から麓にかけて複数存在したと言われているが、今回は確認できなかった。1944年10月以前に字田名の青年会が中心となり、円匙（シャベル）やツルハシで構築した。

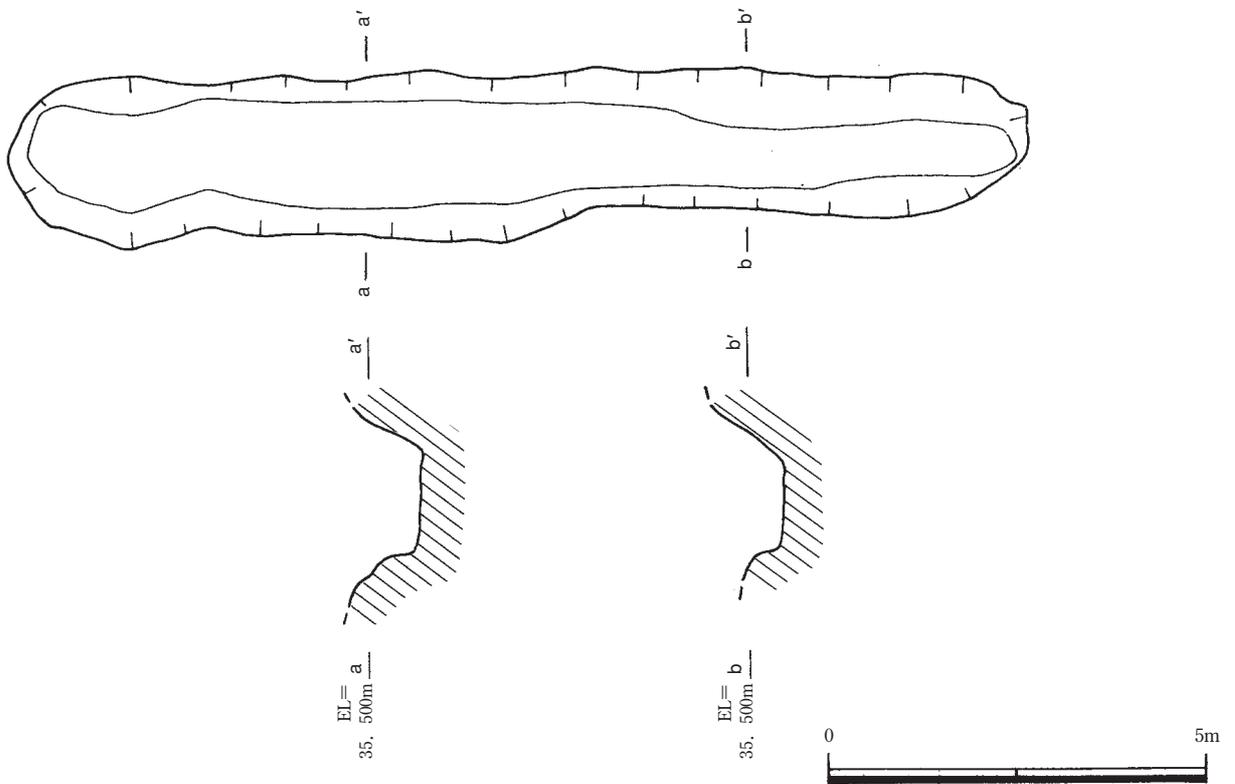
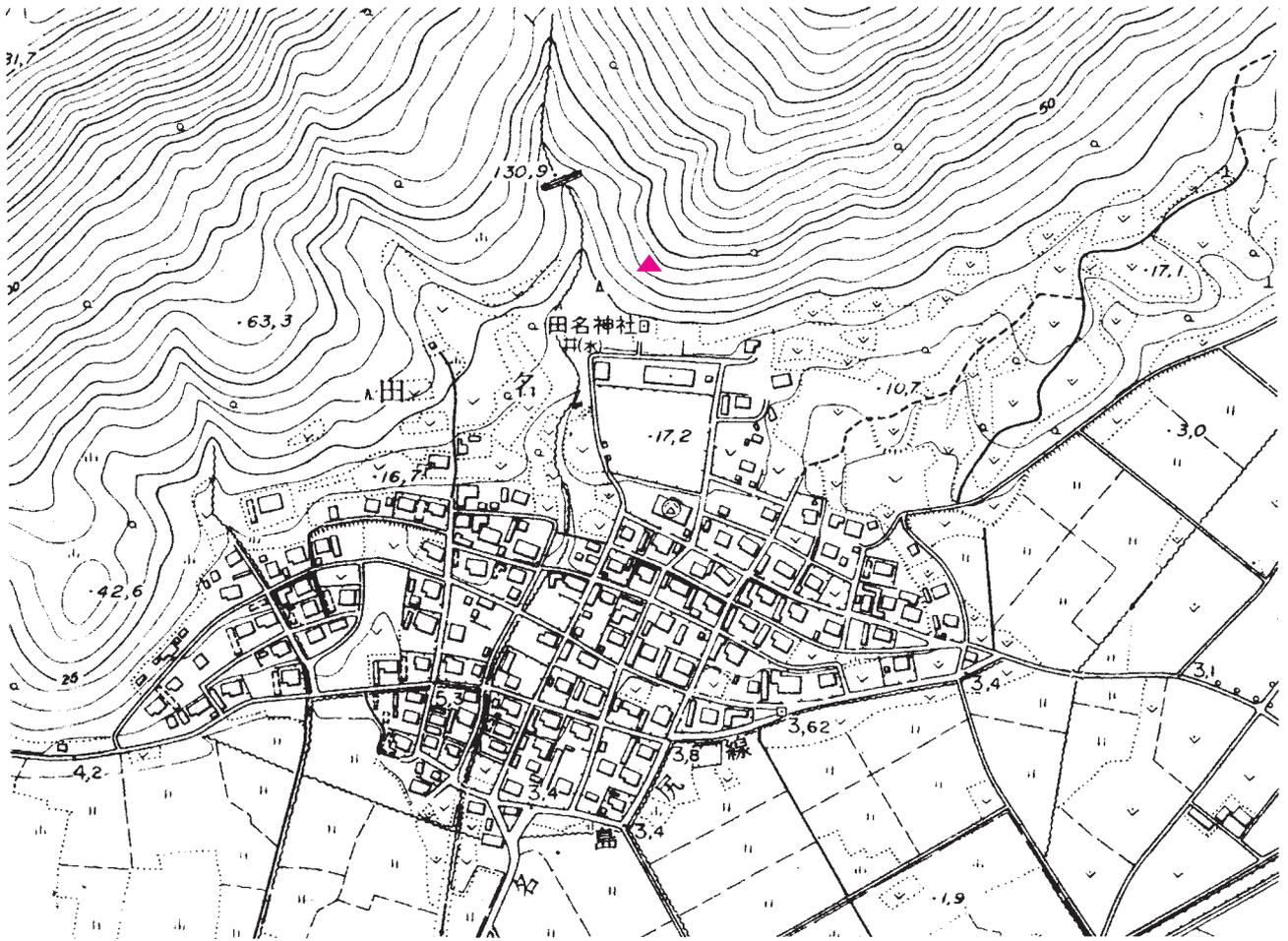
一般に崩れやすい千枚岩質の土壌なので、構築は容易であったことが想像されるが、それ故に脆く、現在は土砂流入や落ち葉などで、交通壕として外観からは判断しにくい状況である。

- (参考文献) 諸見清吉 『伊平屋村史』 伊平屋村史発刊委員会 1981年  
伊平屋村教育委員会 『伊平屋村の遺跡』 伊平屋村教育委員会 2000年  
(調査協力者) 伊礼孝進さん、金城仁太郎さん



交通壕現況

図版1 田名神社の交通壕



第3図 田名神社の交通壕平面図及び断面図

## b. くまや洞窟の弾薬倉庫跡

所在地：伊平屋村字田名

立地（標高）：山腹（約40～50m）

形態：自然壕

種別：陣地

現状：道路から洞口まで階段が敷設されている

保存状況：県指定天然記念物（1958年1月17日）

築造者：米軍

築造年月日：1945年6月～11月

戦時中の使用状況：米軍の仮設弾薬倉庫

主な遺構：コンクリート製天板

### 概要

伊平屋島の北部東海岸に所在する自然洞窟である。念頭平松公園から田名岬灯台に向かって海岸沿いに道路を走らせると左頭上に洞口が見えてくる。クマヤーガマとも表記され、また、俗称として「天の岩戸」と呼ばれるが、ここでは県指定天然記念物の名称として「くまや洞窟」を使用することにする。

地質は北側に傾斜する層状のチャートからなり、東側と南側は断崖となっている。洞口の前面には砂で表面を覆われた崖錐があり、海岸沿いの道路から洞口まで階段が敷設されている。

洞口入口は高さ約250cm、幅約70cmを測る。よって、大人が擦れ違うほどの幅を持たない。この入口の天井部に厚さ約40cmで広さ1畳分程のコンクリートが岩盤に被い流されているのが確認できる。コンクリート内には木製の角材が一部露出している。また、コンクリートの下には直径約15cmの支柱らしきものが横支えの状態で見られる。

聞き取り調査によると、島に上陸した米軍が弾薬等を一時的に保管するためにこの洞窟を利用した際に簡易な扉を作ったという話を得られたが、洞内部にそれに関連する遺物等は見られない。伊平屋村においてこれら工作物を構築した記録・資料が確認されておらず詳細は不明である。

（参考文献） 諸見清吉 『伊平屋村史』 伊平屋村史発刊委員会 1981年  
伊平屋村教育委員会 『伊平屋村の遺跡』 伊平屋村教育委員会 2000年  
伊平屋村前泊区長 『前泊字誌』 字誌編集委員会 2002年

（調査協力者） 伊礼孝進さん



コンクリート製天板及び横支柱

図版2 くまや洞窟の  
弾薬倉庫跡

## 第2節. 伊是名村

### 伊是名村の住民避難地域

山中学校跡付近の壕

所在地：伊是名村字伊是名

立地（標高）：台地（約35m）

形態：人工壕

種別：住民避難

現状：台地上の雑木地

保存状況：土地改良事業により圃場に囲まれている

築造者：字伊是名、勢理客の住民

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：教職員及び学童が避難した

主な遺構：

#### 概要

字伊是名と勢理客を結ぶ農道の西側、両集落のほぼ中間地に所在する。1941年～終戦頃まで島西部（字伊是名、勢理客）の学童が学んだ学校跡地周辺である。

両字出身の教員がボランティアで教鞭を執っていた。島東部と西部の集落の学校誘致争いが発端となった私的学校である。

学校周辺に複数避難壕があったとされるが、現状は整備された圃場に囲まれた雑木地となっている。

### 諸見サキ原避難地域

所在地：伊是名村字諸見サキ原

立地（標高）：平地（約5m）

形態：人工壕

種別：住民避難

現状：海浜沿いの墓地群

保存状況：戦後壕の一部を仮墓とした

築造者：字諸見の住民

築造年月日：1944年～1945年

戦時中の使用状況：空襲時に一時避難

主な遺構：

#### 概要

諸見集落の中心部より約500m東側の海岸沿いの墓地群に所在する。字諸見の住民が十・十空襲後に墓沿いに壕を構築した。壕は戦後埋め戻されたり、一部は墓として利用されたと思われる。諸見集落からの距離を比定すると、集落から避難するには地域としては遠く、諸見の住民が畑作業中に一時避難するような比較的簡易な壕であったことが想定できる。現状で壕と断定できる遺構は確認できなかったため、ここでは「避難地域」として報告する。

(参考文献) 中本弘芳 『伊是名村誌』 伊是名村役所 1966年  
伊是名村教育委員会 『伊是名村の遺跡』 伊是名村教育委員会 1984年  
伊是名村史編集委員会 『伊是名村史上巻（島のあゆみ）』 1989年

(調査協力者) 清村勉さん



山中学校跡遠景



山中学校跡現況



諸見サキ原避難地域

図版3 伊是名村の住民避難地域

### 第3節. 栗国村

#### a. 栗国のテラ

所在地：栗国村字西

立地（標高）：台地（35m）

形態：自然壕

種別：住民避難

現状：壕内部に階段や照明設備がある

保存状況：観光地として村が管理

築造者：

築造年月日：

戦時中の使用状況：空襲や艦砲射撃時に防空壕として使用

主な遺構：煤の付着した洞内の壁

#### 概要

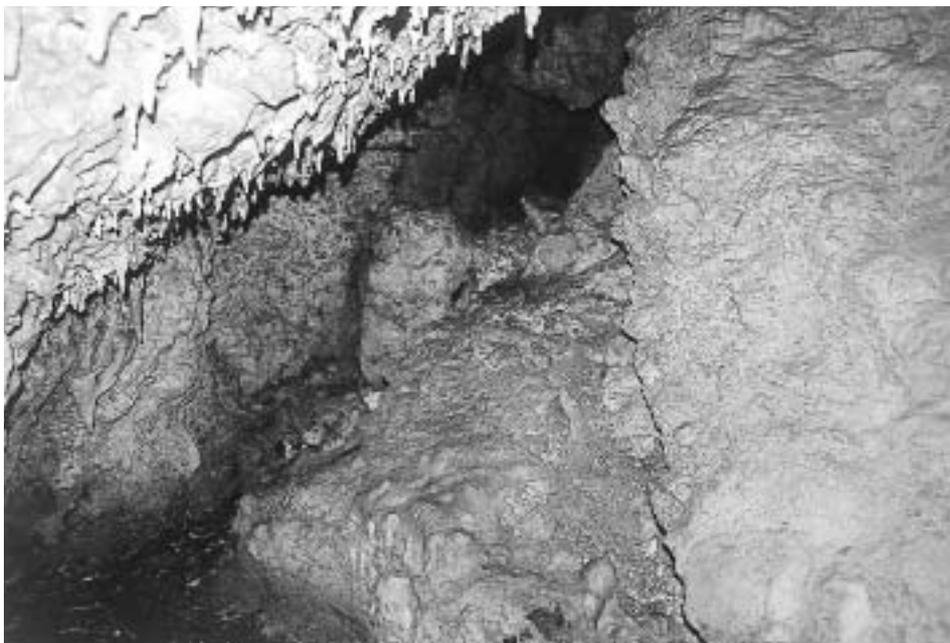
栗国島の北西海岸近くで、集落部より約1 km離れた地点に所在する。琉球石灰岩中に形成された自然洞穴である。洞内部には天井部分の一部が円形状に崩落してできた陥没ドリーネで、内部には崩落した岩盤の一部が多数確認できる。

戦時中、島で機銃掃射などの空襲が始まった1945年の3月下旬以降、島民が避難した。栗国村には西、東、浜の3集落があるが、いずれの集落からも住民が避難したといわれている。

避難中、洞内で煮炊きした痕跡としてドリーネの壁面部には煤が付着したのが見られる。また、照明としての灯り取りの煤も確認できるが、洞内のテラス状の一部に近世期に造られた石厨子が安置され拝所となっていることから、灯り取りの煤が戦時中に付着したものか判断するのは難しい。

伝承では那覇のある寺の住職だった雲水が、栗国に渡島してこの洞穴で修行したことになっており遺跡の名称（テラ）はこれに由来する。現在も洞穴門参りと称して参拝客が多いため、村では内部に階段や照明設備を設置している。

（参考文献） 栗国村誌編纂委員 『栗国村誌』 栗国村 1984年



テラ洞内部

図版4 栗国のテラ

## b. 真鼻毛の擬装砲台跡

所在地：粟国村字西

立地（標高）：台地（85m）

形態：構築物

種別：陣地

現状：岬先端部の草地

保存状況：周辺に展望台があり公園化

築造者：警防団

築造年月日：1944年～1945年

戦時中の使用状況：琉球松の丸太を砲に擬した

主な遺構：擬装砲台

### 概要

粟国島の最西端である真鼻崎（筆ん崎）を見下ろす台地に所在する。地表が草で覆われているこの台地は真鼻毛と称され、現在は展望台や駐車場が整備されている。

沖縄戦当時、粟国島では日本軍は駐屯しておらず、島民による在郷軍人会員を中心に警防団を結成していた。

この警防団の手により、島の海岸沿い数箇所に土饅頭式による砲台と島の琉球松を材料とした砲身を築き擬装砲台とした。日本軍の砲兵部隊が駐屯していたと擬装させる目的があったものと思われる。

砲台は東西に約650cm、南北に約450cmを測る。第4図の a - a' の中央部には砲身を設置したと思われる溝が見られる。溝は東から西にかけて上部に傾斜しており、擬装砲口が西に向かっていたことがわかる。現状では、砲台の表面は短い草が覆っているが、当時は土饅頭のように盛土を形成していたものと思われる。表土は遺構周辺の土と同じく黒褐色で凝灰岩質の風化土であった。

島に数箇所あった擬装砲台の内、今回の調査で所在が確認できたものはこの事例による1基だけである。

(参考文献) 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年

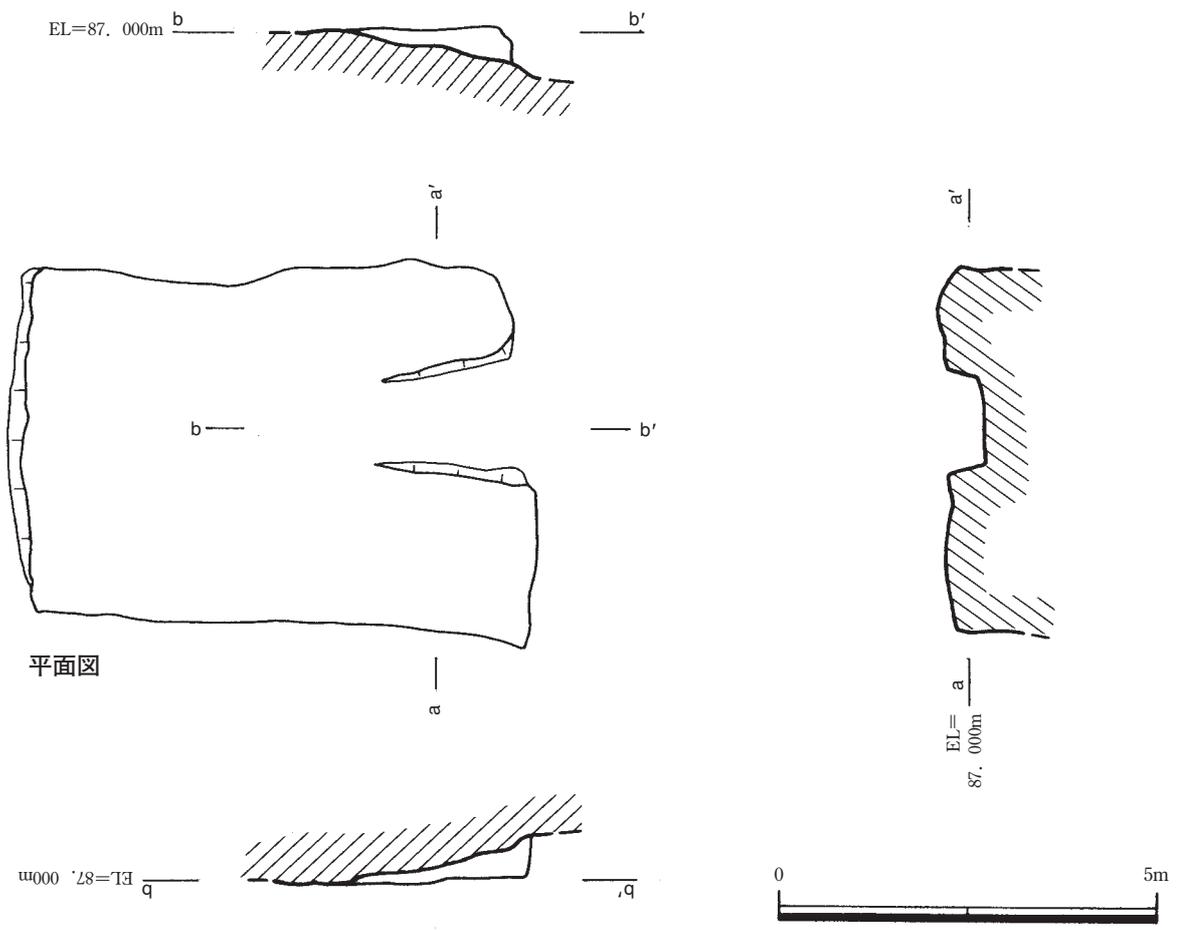
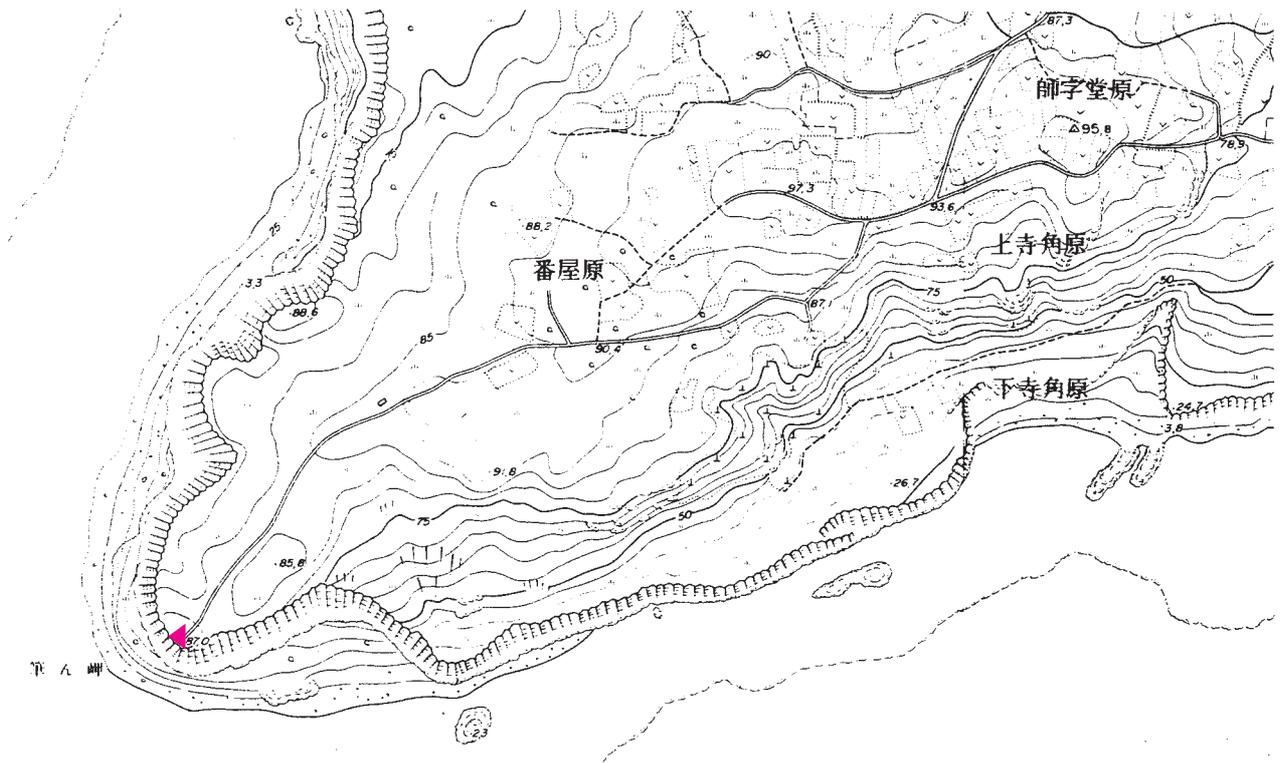
粟国村誌編纂委員 『粟国村誌』 粟国村 1984年

(調査協力者) 玉寄武一さん



擬装砲台（東側より）

図版5 真鼻毛の擬装砲台跡



第4図 真鼻毛の擬装砲台跡

## 第4節 渡名喜村

### 弾痕のある建造物群

所在地：渡名喜村字渡名喜

立地（標高）：平地（5～8m）

形態：建造物

種別：その他

現状：住居として利用

保存状況：重要伝統的建造物群保存地区（2000年5月25日）

築造者：

築造年月日：1895年～

戦時中の使用状況：

主な遺構：石垣、ヒンプン（ソーンジャキ）、附属舎

### 概要

半農半漁の生活であった渡名喜島に、近海鰹漁業が始まったのは1906年である。大正中期には最盛期を迎え、村の基幹産業となり順調な発展を見せた。その頃までに集落のほとんどの家屋が赤瓦葺きの屋根へと変わっていった。

沖縄戦当時、日本軍の守備隊が駐屯していなかったこの島には、「鉄の暴風」で形容される激しい艦砲射撃はなく、建造物への被害は専ら機銃掃射など空襲によるものであった。

集落内において、被弾した石垣、ヒンプン、附属舎は今回確認したもので3件あった。図版7左は民家の附属舎に被弾したもので、未だ実弾が残っている状況である。

弾痕は南向き及び西向きの建造物に見られ、規模の大きい弾痕は南向きである。また、今回確認できたものは全て西地区であった。機銃掃射を実施した米軍機の経路や旋回状況を把握する上で参考となる事例である。

（参考文献） 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年

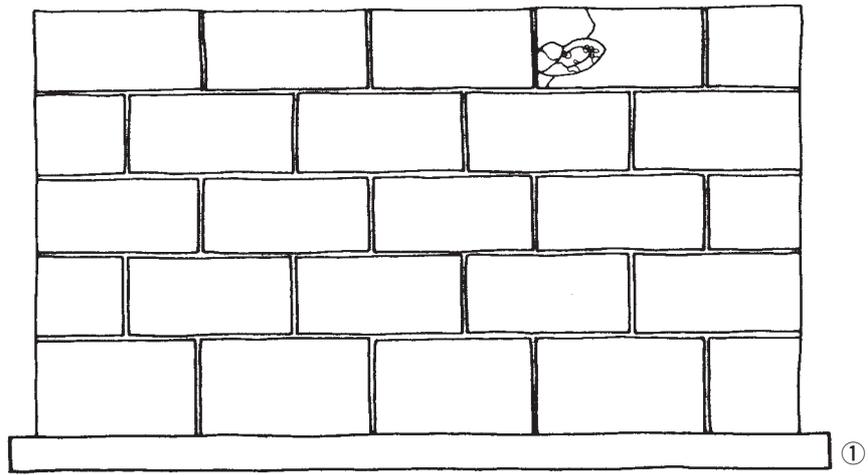
渡名喜村教育委員会 『渡名喜村 渡名喜伝統的建造物群保存対策調査』 渡名喜村教育委員会 1999年

（調査協力者） 桃原又一さん

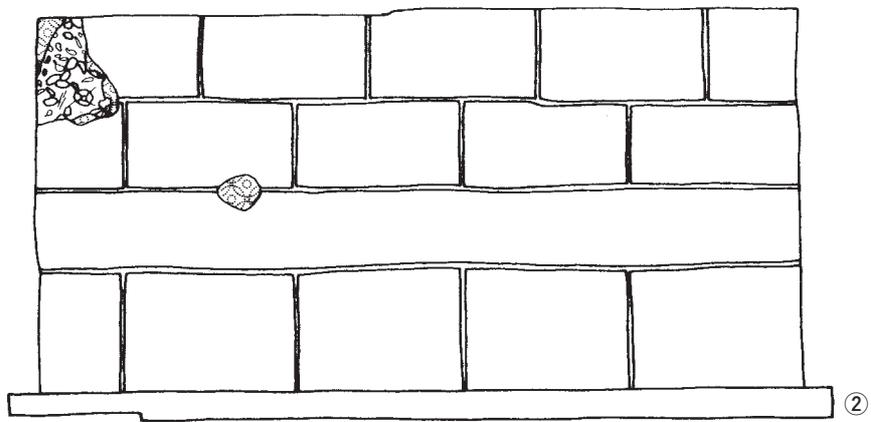


南向き被弾痕①

図版6 弾痕のある建造物群①



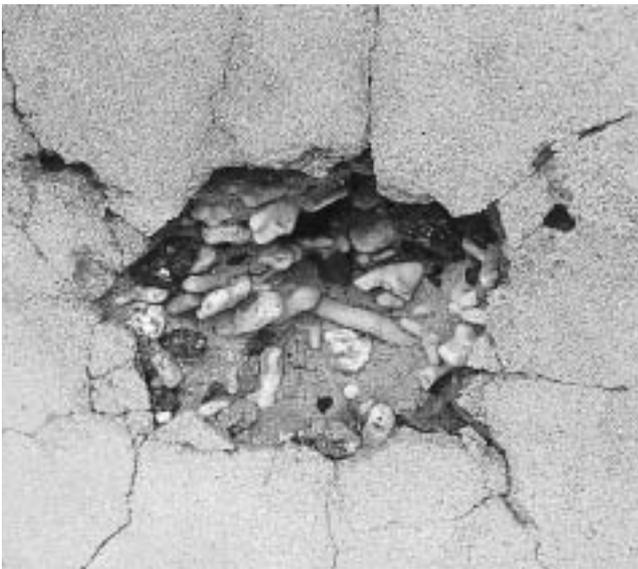
立面図



立面図



第5図 弾痕のある建造物群（南向き）



実弾の残る附属舎①



南向き被弾痕②

図版7 弾痕のある建造物群②

## 第5節. 久米島町

### a. 喜久村家の防空壕

所在地：久米島町宇根5番地

立地（標高）：丘陵（11m）

形態：人工壕

種別：住民避難

現状：完形

保存状況：喜久村家が管理

築造者：喜久村家

築造年月日：1944年4月以降

戦時中の使用状況：喜久村家と他家族

主な遺構：2部屋対の4部屋の人工壕

#### 概要

県指定天然記念物「宇根の大ソテツ」がある喜久村家の背後に防空壕がある。屋敷背後のフクギ林のニービ質の山を人力で掘り込んで作られている。

1944年4月29日（天長節）の夕方7時頃、東海上の潜水艦から艦砲射撃をされたので、当時16才であった喜久村さんらが、ツルハシやタムンワヤー（斧）を使って1ヶ月かけて構築した。

防空壕は4つの入口をもち、①と②は内部で連結し、③と④も内部で繋がれている。①②は喜久村家が避難、③④は別の家族が避難した。米軍上陸後はシラシガーラ（白瀬川）上流に逃げた。空襲で西側の小屋が焼失し、防空壕に隠しておいた軸物などは虫に喰われてしまった。

防空壕の①の入口は幅50cm、高さ100cmに作られ、入口正面の上20～30cmのところに、幅5cm、深さ2cmの帯状の掘り込みがあり、これは水はけのために作った。③から④にかけて床面に幅10cm、深さ5cmの溝を作り扉をつけられるようになっている。①、②は入口の厚み約100cmを内部に入ると奥行き約3mの部屋を作り、③は幅1mの坑道の状態で北側の壁に貫通穴を設けくぐり抜けて④の部屋に行ける。④は奥行き2m、幅2.5mの袋状の部屋になっている。③の入口東壁には5cm大の文字で「大日本」と刻字されている。

床面は風化土が砂状に堆積して当時の状況は見えない。壁は縦の亀裂と横の堆積の状況が模様のように見える。

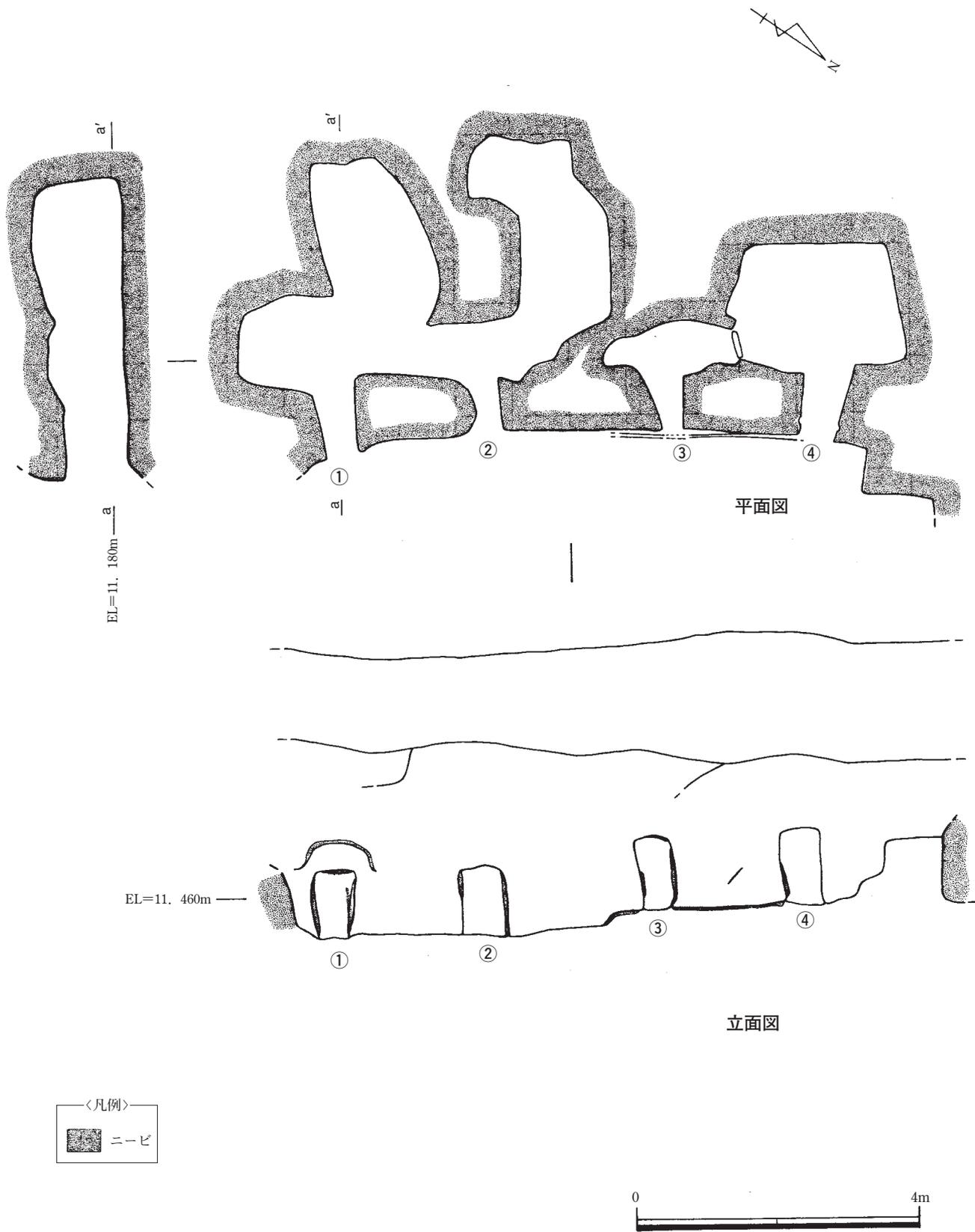
現在は地域の子供達の歴史学習の場所として利用されている。

（調査協力者） 喜久村 繁弘さん



壕前面

図版8 喜久村家の防空壕①



第6図 喜久村家の防空壕遺構図



実測状況



「大日本」の刻字



壕内連結部

図版9 喜久村家の防空壕②

## b. 比嘉一本松の住民避難壕

所在地：久米島町比嘉1213番地

立地（標高）：丘陵（20m）

形態：人工壕

種別：住民避難

現状：北側部分が完形

保存状況：墓地地帯に保存

築造者：字比嘉の住民

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：字比嘉の住民が避難した

主な遺構：坑道と3部屋の人工壕

### 概要

比嘉集落の北側背後、現在の旧仲里村役場西側500m、比嘉の一本松のあった丘に作られている。以前には畑地から山地にかけていくつかの防空壕があったが、土地改良工事の時に失われていった。この壕自体道路工事の時、南側部分が失われて北側の分が完形の形で残っている。比嘉集落の江洲良曾さんが空襲の時に避難した防空壕である。

現在は北側に面した開口部から直進して8m位まで残り、その先は崩落して塞がれている。開口部は赤茶色のニープ質の地山を幅1m、高さ1mで削り込み、外見は周辺の墓の入口と区別がつかない。坑道は幅1m、高さ1.2m天井、壁ともに円錐形の刃先と10cm幅くらいの道具で加工され、煤が付着したように黒くなっている。

坑道の西側には幅1.5m、奥行き1.5mの部屋と幅1.5m、奥行き2mの部屋があり2番目の部屋の左角は外から土砂が崩れ落ちて奥への連続をうかがわせている。坑道左東側には幅180cm奥行き3mの部屋になり壁に3寸釘らしきものと、灯り取り用の加工痕らしきものが2ヶ所ある。

当地は一本松の名勝であったので、松の再生とともに歴史学習の実習地として利用しようと比嘉の集落で考えられている。

（調査協力者） 江洲良曾さん



壕内部（北側より）

図版10 比嘉一本松の  
住民避難壕



### c. 上田森の監視所跡

所在地：久米島町字上江洲191番地

立地（標高）：丘陵頂部（100m）

形態：構築物

種別：監視哨

現状：構築物の床面

保存状況：町指定名勝の一部

築造者：久米島駐屯部隊（海軍）

築造年月日：1942年頃

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：床部分の遺構

#### 概要

町指定名勝上田森の頂部に安山岩を基礎栗石にし50cmの高さにコンクリートで平坦に作られた軍監視所の跡であると考えられている。

この森の南麓に上江洲御嶽があり、北側は戦前の忠魂碑があった場所で、そこに1975年旧具志川村の慰霊碑が建立されたことにより周辺一帯を聖域として1976年6月村指定名勝になった。

1942年頃、海軍の見張部隊が派遣され、宿舎設営のため、上田森の北側にある具志川国民学校（現大岳小学校）の児童も動員して、港から物資を運んで現在の学校プールから弁務官資金による水道タンクのあるあたりに海軍宿舎を建設した。1944年には海軍駐屯地の主陣地は大岳に移動し、1945年5月の空襲の爆撃で破壊された。

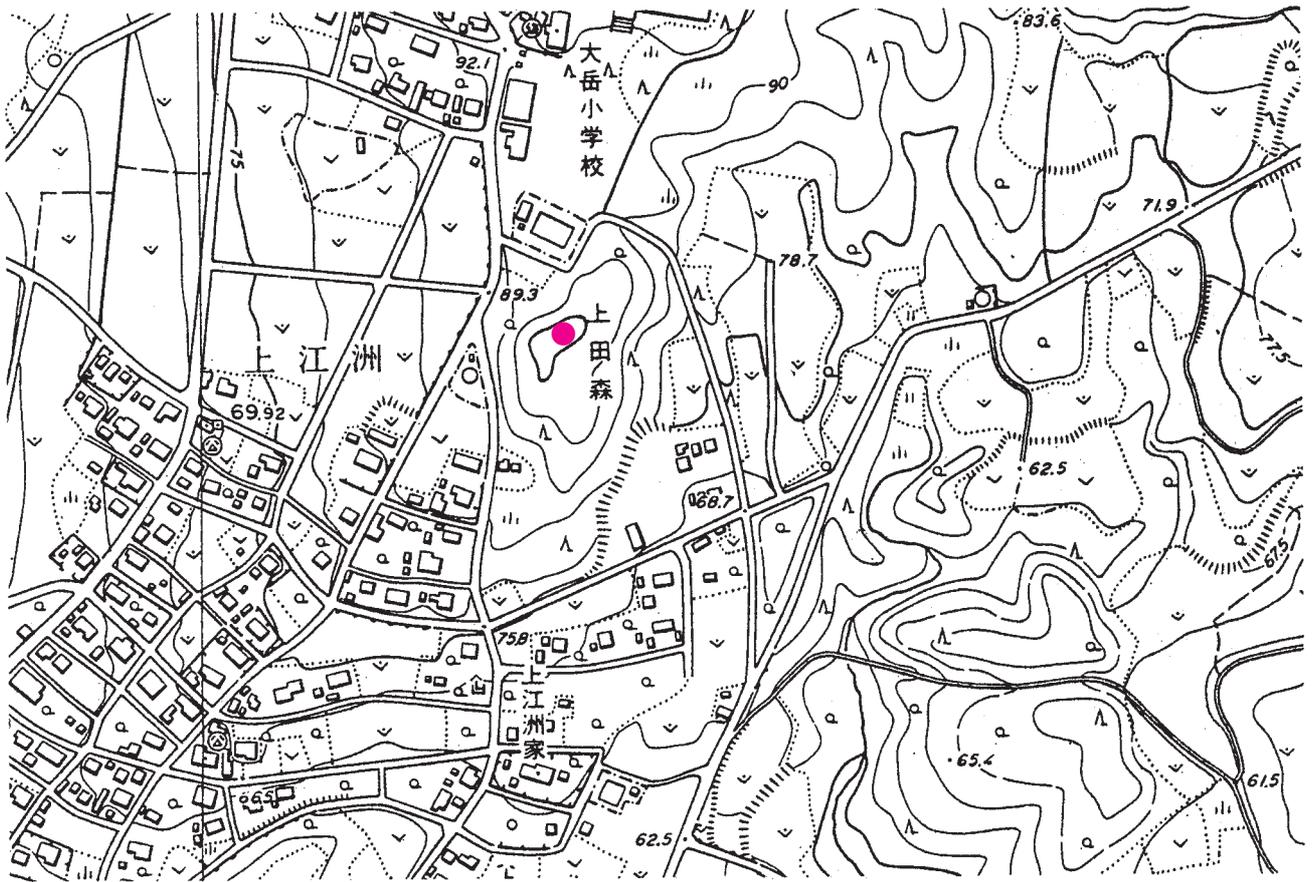
現況は人頭大（30cm）の安山岩を栗石として敷きつめ、その上面にコンクリートで固められている。床平面は雑草で覆われているが、周辺部の雑草を取り除くと、直径5m程の六角形の状態を示し、縁から50cm内側に長さ15cm、幅10cm深さ5cmのえぐり込んだ窪みがある。北側の一面にはコンクリートを使った段がある。又、西側に10m程離れた、直径2mほどの岩にも同質のコンクリートで固められた跡が残っている。現在のところこの施設の史料がなく、事実の解明待ちの状態である。

（参考文献） 具志川村教育委員会 『具志川村の文化財』 具志川村教育委員会 1983年  
仲間智秀 『具志川中学校10周年記念誌』 具志川中学校 1957年

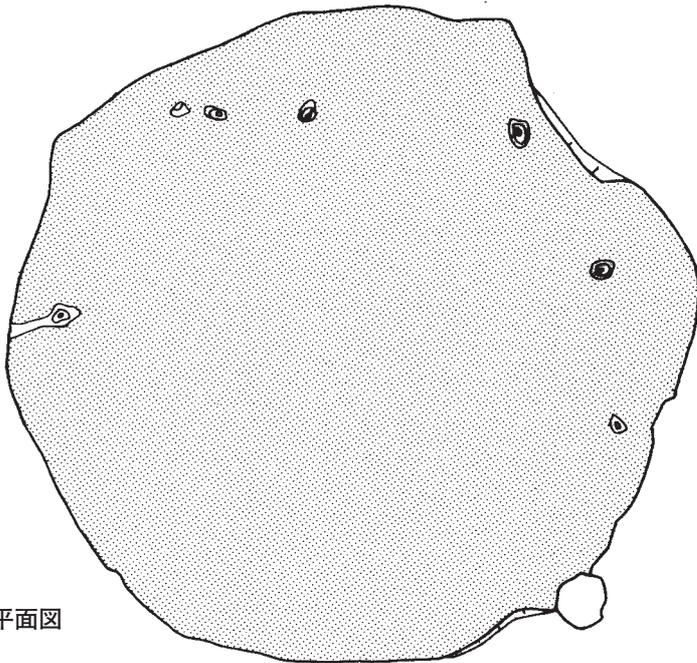
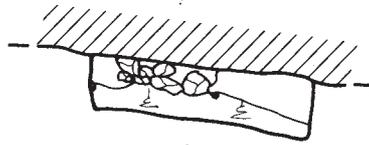


監視所遠景

図版11 上田森の監視所跡①



図面



〈凡例〉  
 ■ コンクリート

平面図

第8図 上田森の監視所跡遺構図



監視所基礎部



床面周縁部



岩に残るコンクリート

図版12 上田森の監視所跡②

## 第6節. 渡嘉敷村

### a. 北山（にしやま）の陣地壕群

所在地：渡嘉敷村字渡嘉敷

立地（標高）：山地（約180～190m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：山林に覆われた沢の兩岸

保存状況：一部天井部の崩落がある

築造者：特設水上勤務第104中隊

築造年月日：1945年

戦時中の使用状況：海上挺進第3戦隊の陣地

主な遺構：坑道、煙道

#### 概要

「国立青年の家」敷地西側にハブ防止壁があり、壁を越えた下方に沢がある。イシッピ川の上流にあたるこの小川をはさんで両側に、大小約15ヶ所の壕が掘られている。川の上流に向かって最奥部西側にある壕は、海上挺進第3戦隊の隊長・赤松嘉次大尉が、1945年8月23日に米軍に投降するまで立てこもった場所であるといわれている。

また、その手前西側の壕には、壕内にカマドが造られ、煙を外へ送り出す「煙道」（図版42）も壁面にそって造られており、煤の跡が残っている。壕口には日本製手榴弾1基を確認することができた。

当時これらの壕は、立って歩けるほどの高さがあったというが、現在は壕内に土砂が堆積しているため、内部へ入る際は多少屈まなければならない。また、約半数の壕は木の根に覆われるなどの理由で壕口が落盤している。壕内に坑木の跡は無いが、灯りを置くために小さく掘り込んだ箇所を確認することができる。

この壕を掘ったのは、1945年2月以降に渡嘉敷島に駐屯した特設水上勤務第104中隊の軍夫と言われているが詳細は不明である。

（参考文献） 防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書沖縄方面陸軍作戦』 朝雲新聞社 1968年

沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年

（調査協力者） 小嶺幸信さん、小嶺隆良さん



壕内撮影状況

図版13 北山（にしやま）の陣地壕群

## b. 渡嘉志久の特攻艇秘匿壕

所在地：渡嘉敷村字渡嘉志久

立地（標高）：平地（約5～6m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：藪の中で現状維持

保存状況：固い岩盤で崩落は少ない

築造者：海上挺進基地第3大隊

築造年月日：1944年9月以降

戦時中の使用状況：特攻艇を格納した

主な遺構：坑道

### 概要

ホテルとかしくマリンビレッジの東側約70mの藪の中に所在する。幅約3m、奥行き約12mを測る。高さは平均して約210cm前後とほぼ一定した構造となっている。

壕口部の床面には一部土砂堆積が見られるが、固い千枚岩質の岩盤を構築しているため天井部からの崩落は比較的少ない。

聞き取り調査によると、壕内から特攻艇を渡嘉志久の浜に移動させるため、壕の前面に2本のレールが敷かれていたが、戦後家屋を建設する際土台にするとして、住民によって利用されたそうである。

しかし、今回の調査で、壕内及び周辺地の表面踏査を実施したが、レール痕を確認することはできなかった。秘匿壕から10m東側（浜より）に復帰後に建てられた家屋があり、表土を造成する際にレール痕を除去した可能性もあるが詳細は不明である。

次頁には昭和38年に渡嘉敷村が発行した1/5,000地形図を掲載した。秘匿壕から浜まで直線距離で約100m、傾斜の緩やかな平地が広がっていたことを示す資料として紹介する。

（参考文献） 防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書沖縄方面陸軍作戦』 朝雲新聞社 1968年

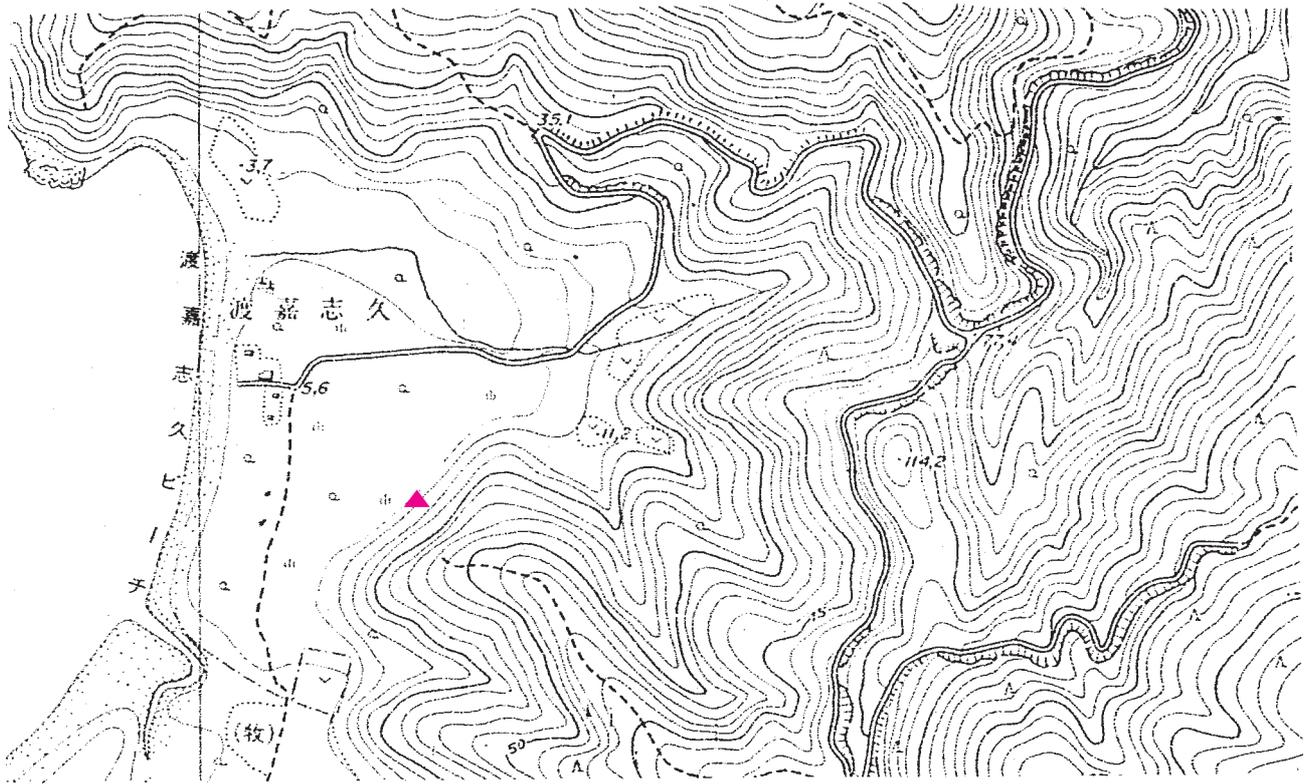
渡嘉敷村史編集委員会 『渡嘉敷村史 通史編』 渡嘉敷村役場 1990年

（調査協力者） 大城政連さん

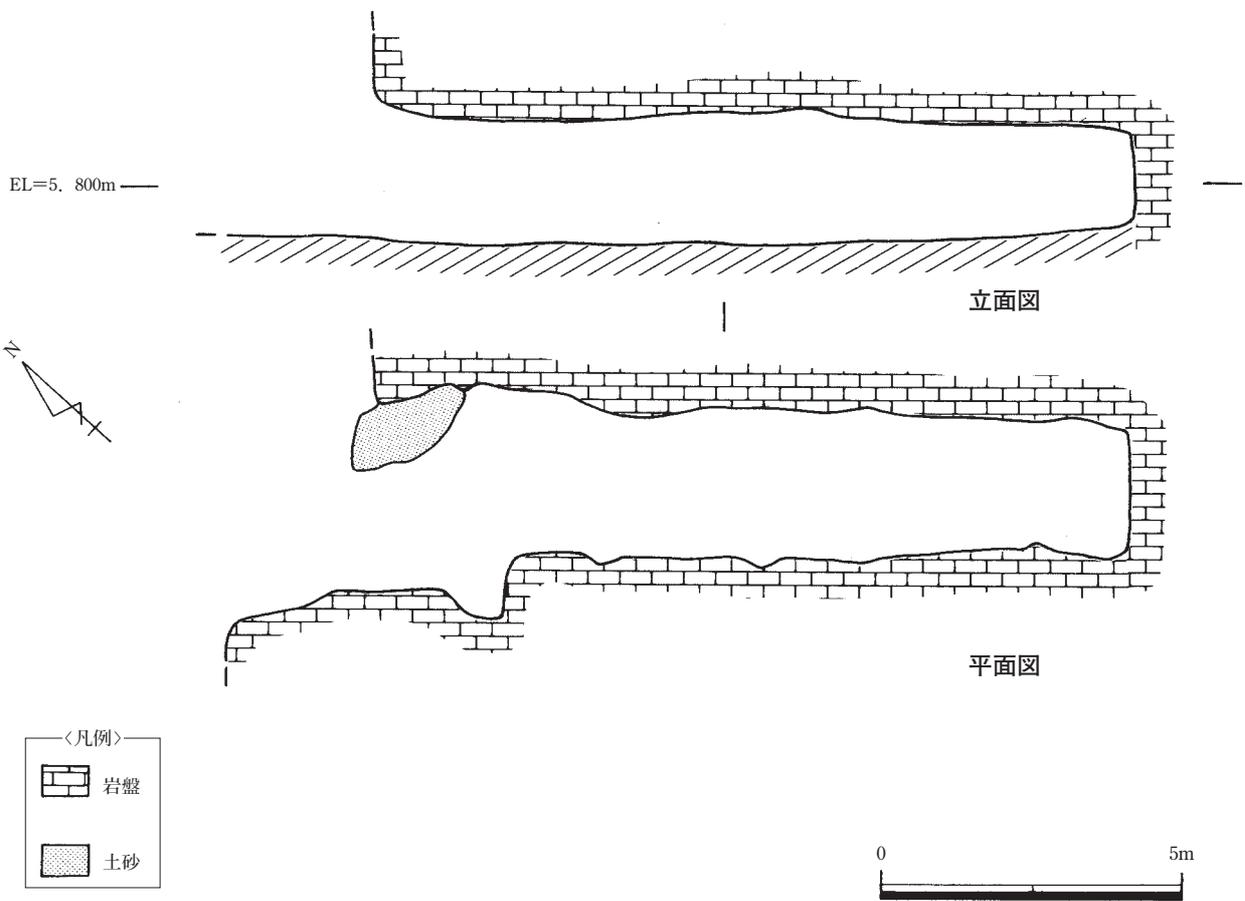


秘匿壕内部（北西側より）

図版14 渡嘉志久の特攻艇秘匿壕



昭和30年代の渡嘉志久



第9図 渡嘉志久の特攻艇秘匿壕遺構図

## 第7節 座間味村

### a. 大和馬の壕と貯水用コンクリート壁

所在地：座間味村阿佐

立地（標高）：谷間（25m）

形態：人工壕

種別：住民避難＋陣地

現状：沢沿いに原形

保存状況：西側完形・東側崩落

築造者：陸軍海上挺進隊

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：軍人、住民避難

主な遺構：倉庫壕とコンクリート貯水壁

#### 概要

座間味村の阿佐に入るところの小川の下流域の左右にひっそりとした状態で現存する。1944年9月暁部隊と呼ばれた陸軍海上挺進隊が座間味地域に駐屯してきた。1945年3月23日から上陸前空襲により島全体が戦場に化した。住民は3月26日米軍の上陸と日本軍の移動による混乱、錯乱の極みに達し、被弾死と玉砕という集団自決に追い込まれた。

大和馬の壕の東側は、海上挺進隊整備中隊の武器庫として構築され、水流をはさみ20m上流に西側の食料倉庫として構築された。現在、武器庫の方は崩落し坑口の位置が分るのみで、黒色の千枚岩の岩肌が見えるだけである。

大和馬の壕（図版43）は、黒色の千枚岩を掘削して構築されている。千枚岩は東から西に下がる傾斜に堆積し、縦に亀裂も多い。開口部は約180cmの幅、高さ180cm、西に向けて坑道が伸び、両側壁に120cmピッチで20cm幅の坑木跡が削まれ、5m進んで右に曲がり7m総長12mの長さを持つ。曲がって奥の坑道には坑木跡はない。奥の部分の床面は湿っている。向って左側壁の坑木跡の下部には約10cm大の葉莢が「くさび石」の状態に入っている。開口部の5m上流は約150cm崖状に高くなり、その先端にコンクリートで150×100cmの貯水壁を作っている。水流が人の手足で汚されない位置で水を得るように作られている。

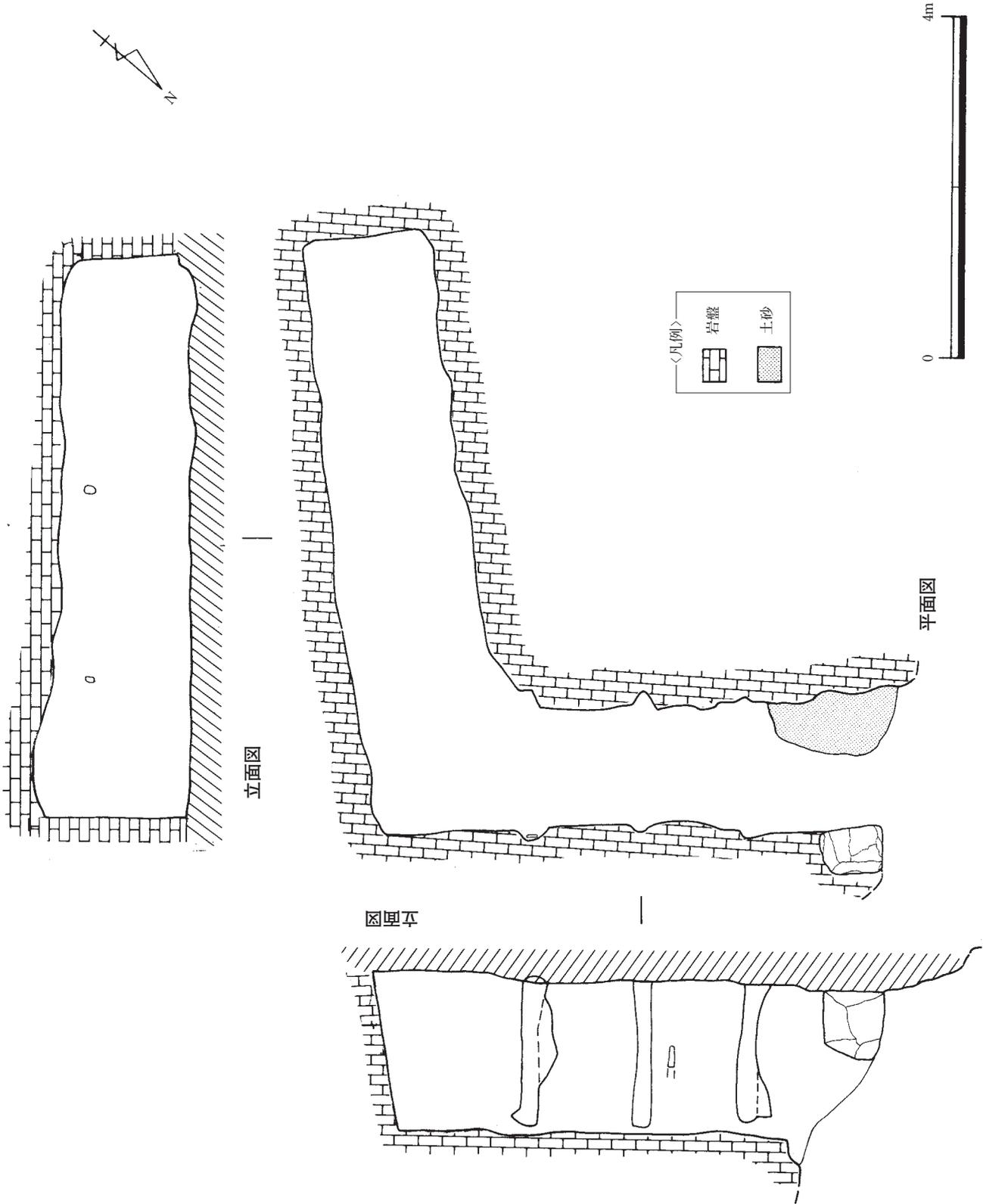
現在のところ遺族と戦場体験者の訪問だけであるのか、枯れた花束が見られる。

- （参考文献） 座間味村編集委員会 『座間味村史（上）』 座間味村役場 1989年  
座間味村編集委員会 『座間味村史（下）』 座間味村役場 1989年  
宮城晴美 『母の遺したもの』 高文研 2000年



大和馬の壕遠景

図版15 大和馬の壕と  
貯水用コンクリート壁



第10図 大和馬の塚遺構図

## b. 恩納ガーラの御真影奉護壕

所在地：座間味村字座間味

立地（標高）：山地（約50m）

形態：構築物

種別：その他

現状：山中の斜面地

保存状況：ほぼ当時の遺構を残す

築造者：座間味国民学校関係者

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：コンクリート製奉護壕

### 概要

座間味村忠魂碑前の道を阿佐集落方面に70～80mほど登り、東側斜面を少し降った山中の斜面地に所在地する。

座間味国民学校に奉安されていた御真影の奉護壕である。掘り込んだ壕に、1 m四方の部屋を厚さ15cmほどのコンクリート壁がはめられている。聞き取り調査によると壕の前面部分は、当時コンクリート部を草木で擬装し、竝を使って天井を覆っていた。

沖縄戦前、この壕の近くに土地を持つ字座間味の住民が、家族用の避難壕を構築をしていた際、座間味国民学校の関係者が「御真影を奉護するために」と、この壕を構築しており、当時の教頭が筒状の入れ物に御真影を入れて持ち歩いている場面を見たとの証言を得られた。

1945年の1月下旬に県当局の通達により、座間味国民学校の御真影は「名護大湿帯の御真影奉護壕」に移動したことになることから、築造年月日はそれ以前であると思われるが、戦時中の使用状況など時期については不明な点が多い。

(参考文献) 座間味村史編集委員会 『座間味村史 上巻』 座間味村史 1989年

座間味村史編集委員会 『座間味村史 下巻』 座間味村史 1989年

(調査協力者) 宮里清五郎さん、梅田昇さん



奉護壕前面

図版16 恩名ガーラの御真影奉護壕

## 第8節. 北大東村

### a. 黄金山の陸軍本部壕

所在地：北大東村字中野

立地（標高）：丘陵（約40m～50m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：ワイトゥイの両壁

保存状況：一部壕内に崩落が見られるが良好

築造者：36連隊第2大隊

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：北大東島守備隊本部とした

主な遺構：坑道、石積み、御真影奉護棚

#### 概要

島内で通称黄金山と呼ばれる丘陵の南西側麓附近に所在する。丘陵を東北東から西南西にかけて掘削したワイトゥイ（掘削道）の両壁に、壕口が6基（掘りかけ1基を含む）見られる。

岩盤は固い粘土質堆積物であるため、壕はダイナマイトで掘り抜いて造られた。壕口①（図版46上）から北北東側に約10m進入すると約20m<sup>2</sup>の部屋に到達する。この部屋の内部の壁面に高さ約100cm、幅約100cm、の棚状に掘削した遺構（図版46下）がある。表面部をセメントでコーティングされており特別な仕様であることが一見してわかる。

『北大東村誌』によると、この棚は御真影を奉安するために造られたものであり、連結された壕内の中央部に位置している。この棚のある壕が北大東島守備隊の本部であり、須永力之助隊長の指揮所であると言われている。

壕口①、②、④及び⑤は入口部に爆風除けと思われる石積みが施され、壕口幅はそれぞれ100cm～80cm程度に狭い。壕口③は一部に落盤があり詳細は不明であるが、通気口の機能を有していたものと思われる。また、壕口⑥は掘りかけの状態が残っている。

（参考文献） 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年

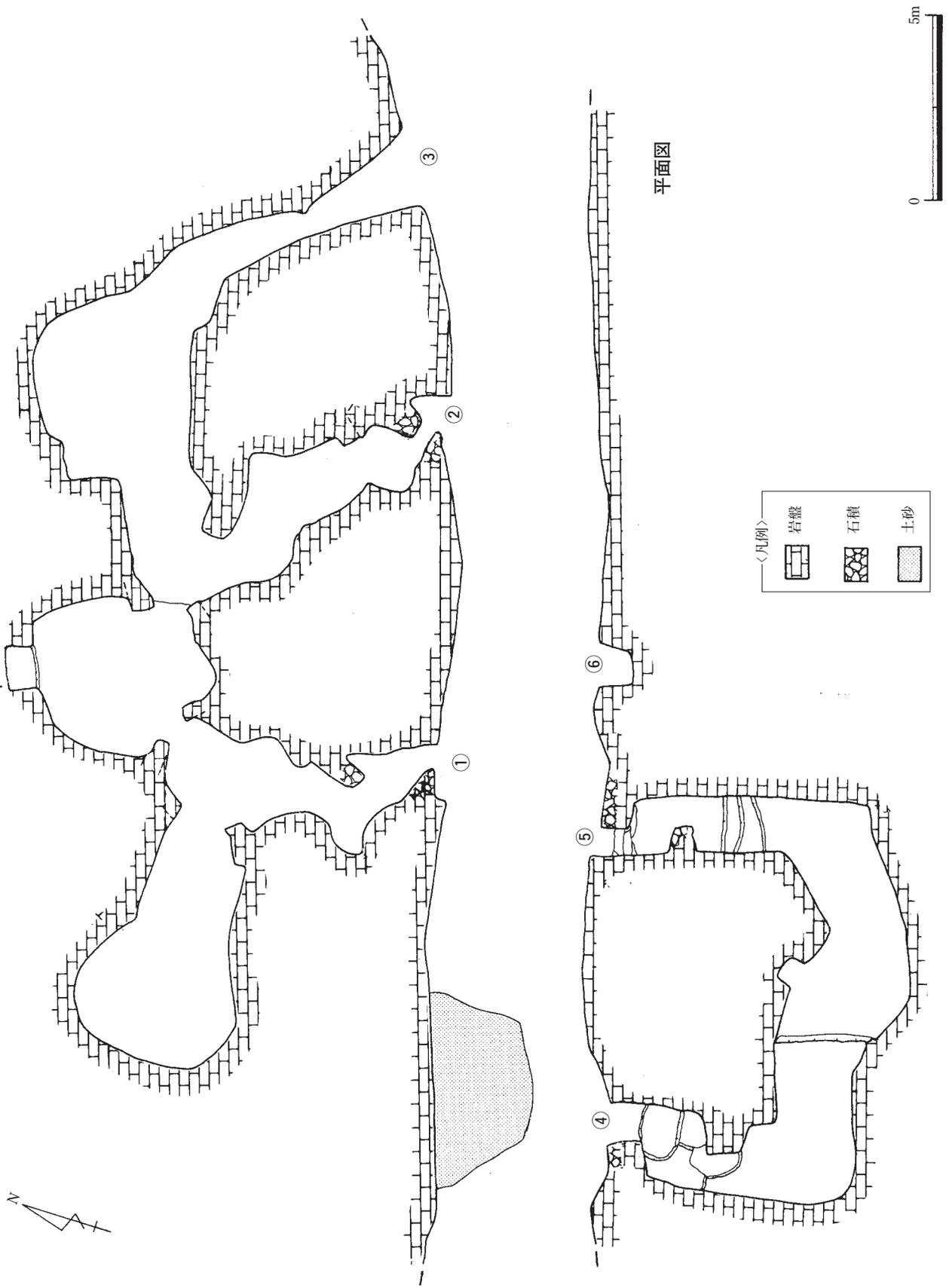
北大東村誌編集委員会 『北大東村誌』 北大東村役場 1986年

（調査協力者） 沖山昇さん



掘削道現況（西側より）

図版17 黄金山陸軍本部壕



第11図 黄金山の陸軍本部壕（平面図）

## b. 掲揚台の監視所跡と待避壕

所在地：北大東村字中野

立地（標高）：丘陵（約70m）

形態：構築物

種別：監視哨・陣地

現状：北大東島灯台の敷地及び周辺

保存状況：良好。待避壕は物置小屋となっている

築造者：36連隊第2大隊

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：防空監視所及び関連施設

主な遺構：コンクリート製待避壕

### 概要

北大東島で最標高である北大東村字中野の通称黄金山（標高74.0m）の山頂部に掲揚台を利用した監視所跡が所在する。

監視所跡に隣接して北大東島灯台があるが、これは1971年に竣工したものである。1961年に複数の貨物船が台風の影響により北大東島周辺で座礁したことから、当時の村長が琉球政府に対して設置の要請を行い実現した。島最標高である黄金山に設置するのが最適であるとの判断であった。

黄金山の山頂部にある掲揚台は、大正時代に東洋製糖株式会社（以下東洋製糖）が設置したものであるが、時期については不明である。当時東洋製糖は、北大東島において大規模な燐鉱採掘を実施しており、黄金山麓にも採掘場があった。黄金山という名称もここに由来する。

北大東島守備隊は1944年、この掲揚台を利用して簡易監視所とした。現在、島の西海岸を中心に眺望に適していることから、防空・敵艦船の監視をしたものと思われる。

また、この監視所跡から東側下約10mの場所にコンクリート構築物が完形で現存している。現地で待避壕と呼ばれるこの施設は、監視所の関連施設と思われるが用途などの詳細は不明である。現在は農機具・雑貨の物置として利用されている。

（参考文献） 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年  
北大東村誌編集委員会 『北大東村誌』 北大東村役場 1986年

（調査協力者） 沖山昇さん



掲揚台の階段

図版18 掲揚台の監視所跡と待避壕①



監視所跡



待避壕内部



第二大隊守備隊記念碑  
(灯台敷地内)

図版19 掲揚台の監視所跡と待避壕②

## 第9節. 南大東村

### a. 電波探知壕

所在地：南大東村字南

立地（標高）：丘陵（約55m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：日の丸山展望台に隣接

保存状況：ほぼ完形

築造者：海軍南大東島派遣隊

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：内部で電波探知機を使用

主な遺構：通気口、監視窓

### 概要

南大東島の南部の小高い丘陵地に所在する。この島には、1944年に陸軍第28師団歩兵第36連隊南大東島守備隊が配備され、海軍からは沖縄方面特別根拠地隊南大東島派遣隊が防備についた。

大東島地方は、サイパン陥落以後、沖縄本島の前線基地として位置づけられ、第32軍の司令部も守備体制の強化を望んでいた。南大東島の海軍は、大神宮山に本部を置き、南地区に電波探知機壕が設営された。

電波探知壕は、L字状のコンクリート構築物で天井部に約80cm四方の通気口が見られ、今調査ではこの口から入壕した。本来、この壕は立体構造を呈しているため下方部に入口があり、通常の進入は丘陵北側の斜面下方部からであったと思われるが、現状では山林に覆われ一部土砂堆積があるため入壕は困難である。

第12図の平面図及び断面図は2階部に相当するものである。2階部には通気口の他に、監視窓と思われる遺構も確認できる。

現在、壕のある丘陵には1980年に造られた日の丸山展望台があり、島を一望できる景勝地となっている。

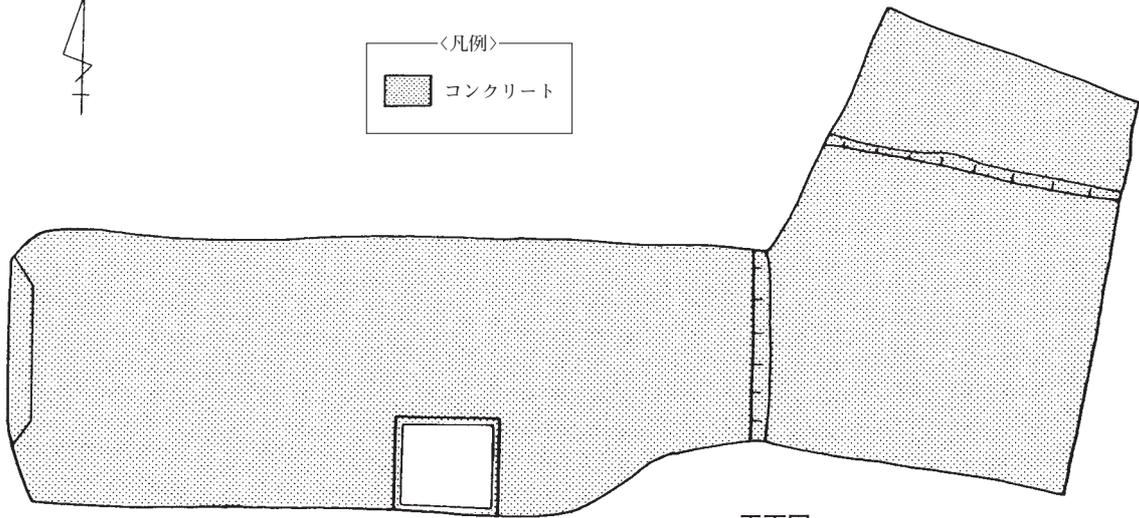
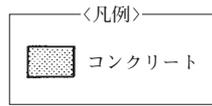
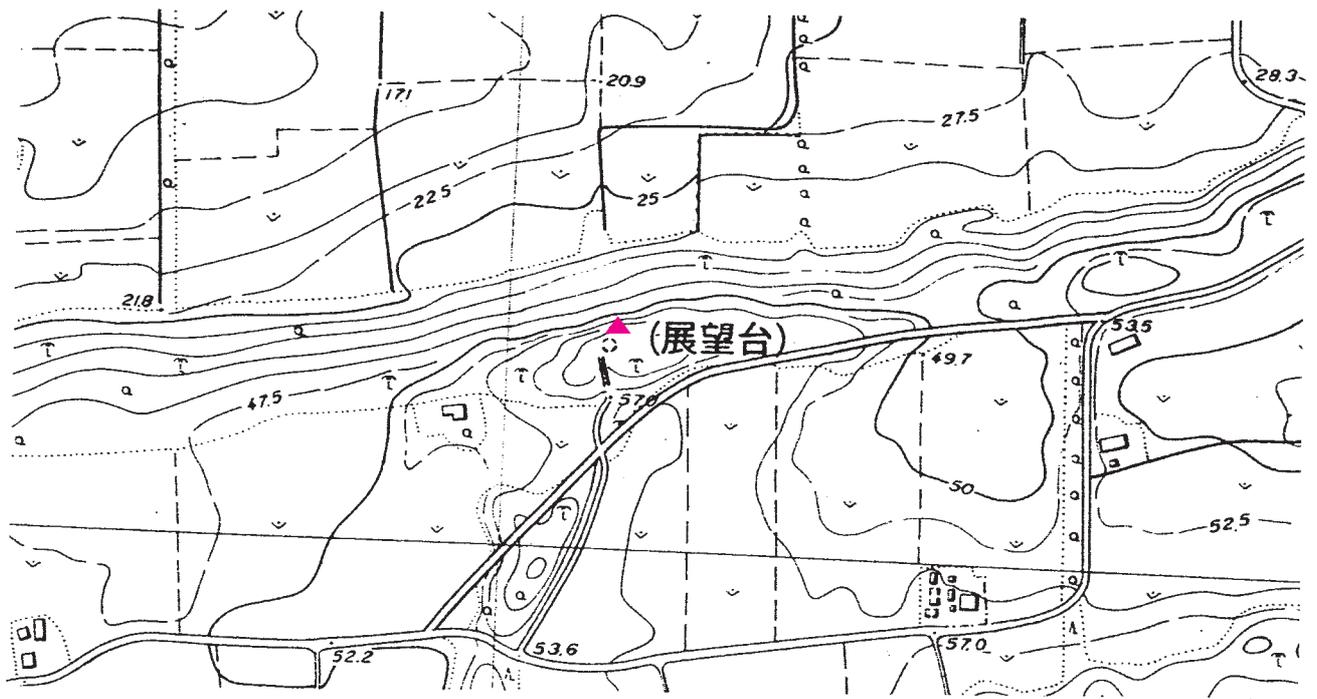
(参考文献) 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年  
南大東村誌編集委員会 『南大東村誌(改訂)』 南大東村役場 1990年

(調査協力者) 西浜良修さん

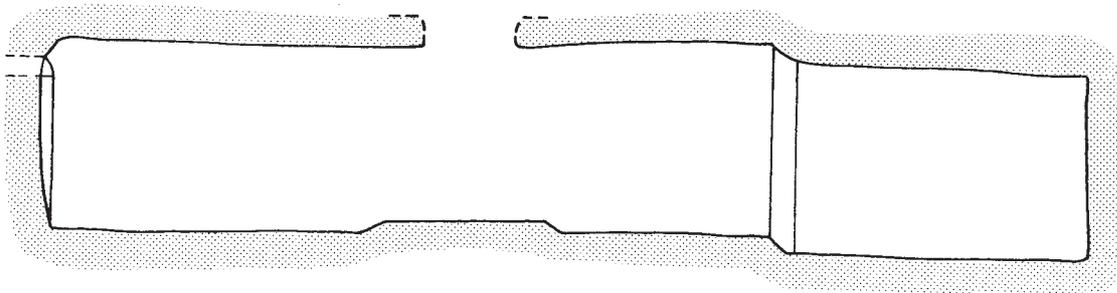


電波探知壕現況

図版20 電波探知壕



平面図



立面図



第12図 電波探知壕遺構図

## b. 監視所（軍）

所在地：南大東村字南

立地（標高）：丘陵（約50～55m）

形態：構築物

種別：陣地

現状：防潮林内の丘陵地

保存状況：ほぼ完形

築造者：不明

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：監視所

主な遺構：監視窓、階段

### 概要

南大東島の中央から南端部にかけて海岸を見下ろす岩場と防潮林の中の丘陵地に所在する。約30cmを測る厚いコンクリート製の構築物である。

1944年に創設された南大東島守備隊の一部陣地と考えられるが、ここから約300m北側に標高もほぼ同じ位置に電波探知壕があり、その部隊が陣を構えているので、その警戒隊の一部か、歩兵第36連隊第一大隊（南大東島守備隊）の南地区の監視所なのか詳細は不明である。

この監視所は一辺を約230cmとする六角形を呈す。石灰岩の岩盤の上にコンクリート基礎を造り、天井部及び床面はコテで仕上げがされており平坦である。監視所に入る口は約70cmと狭く、そこから上方へ5段登ると監視窓のある部屋に到達する。

現状では、琉球石灰岩の岩盤が露出した防潮林の中でツタカズラに覆われている。今回の踏査で確認された遺構である。民間の防空監視哨と区別するため、ここでは監視所（軍）とした。

（参考文献） 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年

南大東村誌編集委員会 『南大東村誌（改訂）』 南大東村役場 1990年

（調査協力者） 西浜良修さん



六角形の監視所

図版21 監視所（軍）

### c. 連隊本部壕（具志堅洞）

所在地：南大東村字池之沢  
立地（標高）：平地（約12～15m）  
形態：自然壕＋人工壕  
種別：陣地  
現状：畑作地にあるドリーネ  
保存状況：農業用水汲み上げポンプ敷設  
築造者：不明  
築造年月日：不明  
戦時中の使用状況：1945年3月まで連隊本部とした  
主な遺構：御真影奉護棚

#### 概要

南大東島は1946年まで、通常の行政自治のない企業私有地であった。この南大東島に軍事施設として、1934年に海軍飛行場が造られ、その後1944年に第322設営隊が来島、飛行場の拡張建設・管理にあたった。

太平洋戦争の激化とともに、南西諸島の防衛強化として第32軍は第28師団歩兵第36連隊を大東島守備隊として配備した。その中で、連隊本部を南大東島に置き、本部壕として具志堅洞と呼ばれる自然洞穴の一部を構築して利用することになった。

洞穴内の壁面には、御真影を奉安したと言われる棚状の窪みが見られる。御真影を奉安した棚は、北大東島の本部壕（図版46下）にも確認することができる。両島の錬成学校（国民学校相当）では、学校に奉安されていた御真影を守備隊本部に委ねていたことを示す事例である。

洞穴は琉球石灰岩を主体とする岩盤で、斜めにドリーネを形成している。洞穴下方部には湧水が見られ、本部でも取水していたものと思われる。

本部壕は、米軍機による空襲の激化にともない、1945年4月8日（3月29日の記述有り）に山下洞に移動した。この山下洞も字新東の畑地と畑地の狭間に現存する。

（参考文献） 沖縄県教育委員会 『沖縄県史10 沖縄戦記録2』 沖縄県教育委員会 1974年  
南大東村誌編集委員会 『南大東村誌（改訂）』 南大東村役場 1990年  
（調査協力者） 西浜良修さん



具志堅洞内部

図版22 連隊本部壕（具志堅洞）

## 第10節 那覇市

### a. 第32軍司令部壕と周辺遺跡

所在地：那覇市首里金城町～当蔵町

立地（標高）：丘陵（標高110m）

形態：構築壕

種別：陣地

現状：壕口及び坑道が一部残る

保存状況：国指定史跡「首里城跡」範囲及び周辺

築造者：第32軍

築造年月日：1944～1945年

戦時中の使用状況：戦闘司令部壕

主な遺構：壕口、他

### 概要

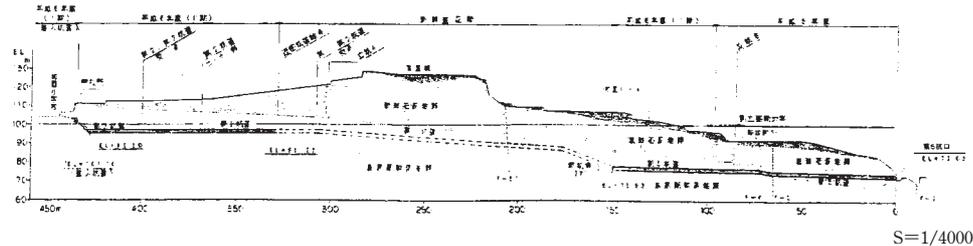
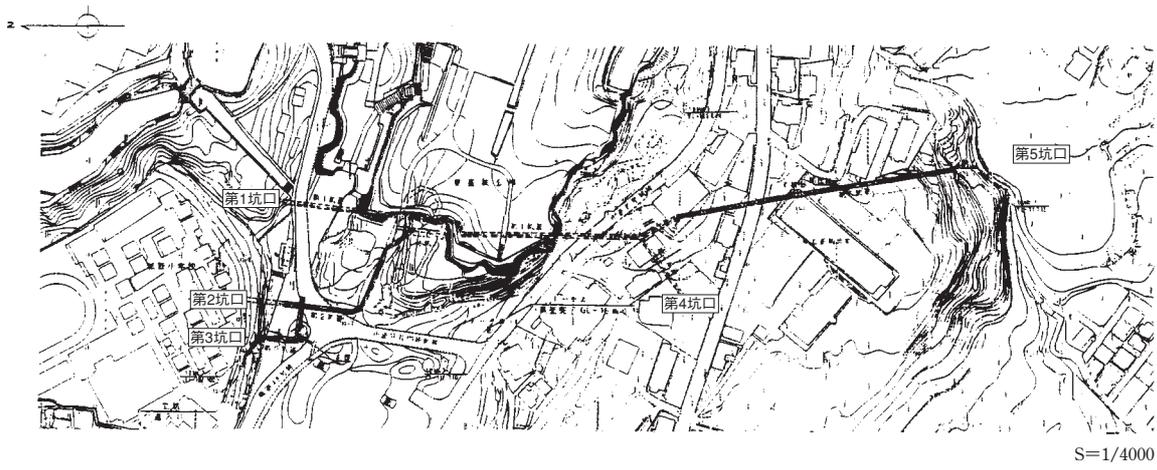
1944年、首里当蔵町の沖縄師範学校（現県立芸大敷地）は、第10方面軍第32軍傘下の第9師団（武部隊）司令部として接収された。武部隊の台湾移動後、1945年1月に旧真和志村松川の国立蚕糸試験場（現松川団地）に駐屯していた第32軍司令部が移ってきた。1944年12月から野戦築城隊が首里城下西側部分を戦闘指令所壕として掘削開始し、1945年の空襲から、米軍上陸後の地上戦5月末まで、沖縄現地軍の中核陣地として機能した。1945年5月末になると、第32軍司令部は急遽、本島南部への撤退を決定。米軍が首里に南下する直前に、司令部壕の爆破を指示した。

現在の県立芸大敷地南東角の南面しているコンクリート堀に弾着痕が残り、校門門柱が再建されているので、旧師範学校、第32軍司令部の跡とわかる。軍司令部戦闘指令所壕は、首里城下の石灰岩岩盤下の第3紀泥岩（クチャ）の層を掘り5ヶ所の入り口を持つというが、現在は第5坑道と呼ぶ1ヶ所だけが残っている。他は公共工事・宅地工事で失われて不明である。第5坑道構築時のクチャの土は南西側古墓地帯の下に捨てた。仲村渠山のガマの背後に堆積している土がそれである。又、真珠道わきにコンクリート製トーチカ構造物が残っている。

首里城内には健児隊、沖縄新報の留魂壕、竹林壕、二階殿南側石垣の下には防空壕（非公開：防火水槽の下部にあるため）があり、城東側の上の毛北崖に石灰崖下のニービの土を掘った壕、北側ハンタン山の中に通信部隊用コンクリートトーチカ群、西側に忠魂碑の残欠がある。南側南のアザナ下の壕群、ジグンジュウスメーの墓と呼ばれる岩影にコンクリート製トーチカと銃眼が残り、崎山馬場に向かう道で左手に見える。これらの遺跡は、世界遺産の首里城跡の観光とともに、ハンタン山のトーチカなどを利用して、沖縄戦の説明に利用されている。

- (参考文献) 大田・外間編 『沖縄健児隊』 日本出版共同 1953年  
沖縄タイムス社 『鉄の暴風』 沖縄タイムス社 1972年  
沖縄史料編集所 『沖縄県史第10巻』 沖縄県教育委員会 1974年  
那覇市史編集室 『那覇市史 第2巻中の6』 那覇市史編集室 1974年  
龍潭同窓会 『傷魂を刻む』 龍潭同窓会 1986年  
濱川昌也 『私の沖縄戦記』 那覇出版社 1990年

(調査協力者) 吉嶺全一さん、内間伸さん、志堅原良明さん、真栄平房敬さん



(出典：旧32軍司令部壕試掘調査業務報告書 平成6年4月)

第13図 第32軍司令部壕位置平面図及び断面図



司令部壕第5坑口



司令部南東堀



ハンタン山のトーチカ



首里城南側城壁下の壕

図版23 第32軍司令部壕と周辺遺跡

## b. 真嘉比川沿いの壕

所在地：那覇市首里汀良町1-51

立地（標高）：川岸（約100m）

形態：人工壕

種別：住民避難+陣地

現状：内部は原形

保存状況：原位置に保存

築造者：真栄平家・他、及び軍

築造年月日：1944～1945年

戦時中の使用状況：真栄平家、他

主な遺構：坑道、棚

### 概要

真嘉比川東岸の第3紀砂岩（ニービ）層に8基の壕口が開いている。1977年河川護岸工事の時埋没するので設計変更をして、川底を下げることにより保存することができた。対岸にあったヤマノカーと呼ぶ井戸は埋没した。工事前は壕の前に1m位の道があり川幅も1m、深さ1.2m位のものであった。

聞き取り調査によると、1944年8月頃2人の墓作り専門の人に依頼し、約1ヶ月で構築したとのことである。作業は1人が小型十字鍬で土を掘り、1人がその土を捨てる作業をした。図中②③の開口部が真栄平家の防空壕で、家族11人が詰め込んで避難した。図中④⑤は尚家の縁者達に土地を提供し、十・十空襲前に構築した。図中⑥は、別家族が十・十空襲後に構築。北側の壕は戦争が始まってから、どこの誰が掘ったか不明である。①の壕は1945年空襲が頻繁になってから所属不明の軍隊が掘り始め、②の壕と繋いでしまった。南側の壕はその軍隊が3月以降に構築したものである。地上戦が始まってからの4月28日、軍に追い出され南部へ避難した。

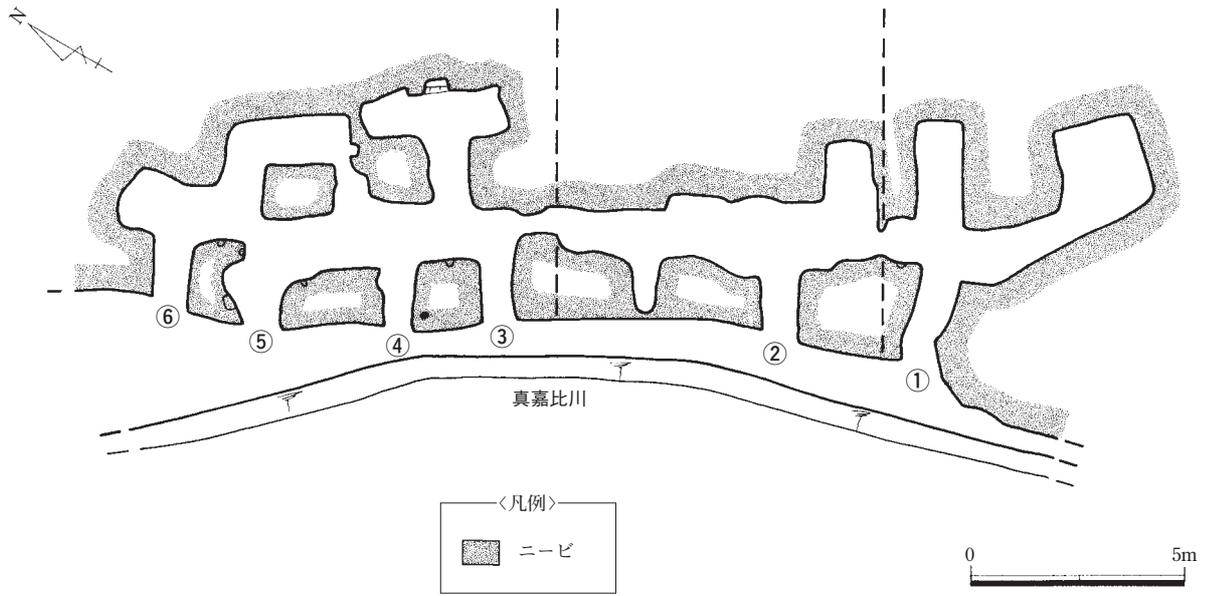
②の壕開口部は幅80cm奥行170cmで、南北7mの幅1.7mの坑道、南東側に1.5mの部屋がある。当時、この部屋に真栄平家の古文書を保管していた。④～⑥の開口部は幅70cm奥行140cm位で南北の坑道約10m、③の坑道と接続する。コ字型、T型の部屋を持ち、坑道の高さ140～150cm。壁に幅10cm、奥行10cm、長さ20～30cmの掘り込みが作られ灯取になっている。壁は全体に石灰分が侵み込んで白い洞穴になっている。王家唐衣装は④の部屋に保管されていた。北は隣接地工事のため崩れて内容不明、南は壕口を入り、幅3m奥行6mの部屋で南側に坑道があるが土砂が流れ込んで奥行不明。

壕に保管していた古文書や唐衣装は1946年8月首里開放後戻ってきた時にはすでに失われていた。壕の上部は庭で建物はないが庭一面に椿があり、まだ2～3mながら市内では珍しい椿林である。

当防空壕は、今年度の調査のなかで築造者、使用時期、使用者のはっきりした唯一の貴重な事例である。

（参考文献） 真栄平房敬 『首里城物語』 ひるぎ社 1989年

（調査協力者） 真栄平房敬さん



第14図 真嘉比川沿いの壕平面略図



真嘉比川護岸



壕開口部



灯り取り跡



壕内部

図版24 真嘉比川沿いの壕

### c. 弁ヶ嶽のトーチカ

所在地：那覇市首里鳥堀町4丁目

立地（標高）：丘陵中腹（約150m）

形態：構築物

種別：陣地

現状：ほぼ原形

保存状況：県指定史跡「弁ヶ嶽」公園内

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：コンクリート構築物

#### 概要

那覇市首里鳥堀町の弁ヶ嶽公園の拝殿の西側に所在する。立地は首里の東端、西原・石嶺・首里城・与那原方面を見渡す小高い山である。

トーチカ周辺の地元住民が徴用され、戦前の气象台近くの浜から砂を運んだこと、2～3日で別の壕掘りに行かされるので、どういう形で誰が使ったかわからないということが、那覇市の実施した聞き取り調査により得られている。

現況は道路から一段下った所にあり、南側入口面の上部が見えるだけで大部分が土砂に埋もれている。入り口正面の外壁に5～10cm大の弾痕と多きなヒビ割れがあり、東側壁に崩れたコンクリートから径1cmの鉄筋がむき出しである。トーチカ内部はほぼ4m四方の部屋で、南側に50cm四方の窓が2ヶ所、西壁も同じ窓が2ヶ開いている。床は湿った土砂が堆積して不明、天井の高さ約2m。入口入って突き当たりの左に奥行2m幅140cmの部屋がある。ここにも窓が1つあるが土砂で塞がれ見通しは不明。内壁には角材を掛けられるような穴がいくつかある。コンクリート壁の厚みは窓で測ると約60cmである。成型の仮枠は長さ1m幅15cm程の板材を使用している。

弁ヶ嶽には陸軍砲部隊の気象班が派遣されており、通信機能があったことから、米軍による激しい攻撃にさらされた。周辺の関連遺跡は現在確認されていない。

(参考文献) 大田・外間編 『沖縄健児隊』 日本出版共同 1953年  
沖縄タイムス社 『鉄の暴風』 沖縄タイムス社 1972年  
高嶺朝光 『新聞五十年』 沖縄タイムス社 1972年  
沖縄史料編集所 『沖縄県史第10巻』 沖縄県教育委員会 1974年  
那覇市史編集室 『那覇市史 史料篇第3巻7』 那覇市史編集室 1981年  
沖縄气象台 『沖縄气象台百年史』 沖縄气象台 1990年



トーチカ前面

図版25 弁ヶ嶽のトーチカ

#### d. 新壕（ミーゴ）

所在地：那覇市繁多川4丁目  
立地（標高）：墓地岩場（約74m）  
形態：自然壕＋人工壕  
種別：政治行政  
現状：ほぼ原形  
保存状況：道路直下に保存  
築造者：真和志村役場と那覇警察署  
築造年月日：1945年2月から  
戦時中の使用状況：地元住民、行政職員と軍  
主な遺構：加工された坑道

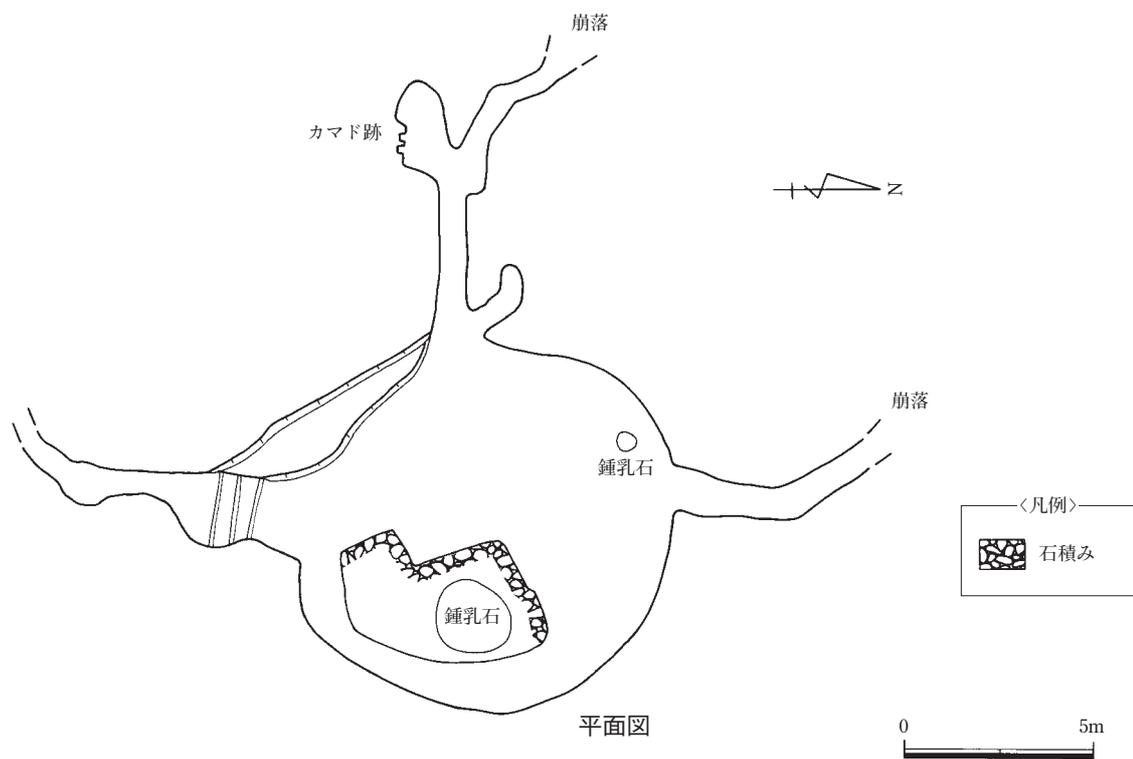
#### 概要

新壕（ミーゴ）は繁多川4丁目5、6と18番地にはさまれた、なごやか通りの道路直下の自然洞穴である。十・十空襲後の1945年2月頃、墓地近くで遊んでいた少年達が偶然によりこの洞穴を発見したので、真和志村役場、那覇警察署で防空壕として利用することになった。武徳殿に貯めてあった建築資材・食料物資を空襲爆撃の危険にさらされながら運び込み、壕の北西に村役場の出入口、南西に那覇警察の出入口を拡張し坑道を開削した。真和志村職員、地元住民など150人くらいが避難していたが、5月10日頃日本軍によって追い出された。

現在、新壕は墓地の岩場の穴からのみ出入できる。内部は、直径1mくらいの鍾乳石のまわりに幅150cm高さ100cmに積上げ座場所として作り、西側にホール状の空間があり床は平坦である。ホールの北西に幅・高さ100cmの坑道が10mくらい伸び、外側からコンクリート壁で塞がれている。南西坑道も同様である。南西側岩壁の下に1m位の大きさに石などでカマドを作り、上部を煙道にしている。岩肌は赤黒い状態である。東側岩場から坑口付近にはガスマスクや空き缶が散乱している。天井は250cmの高さがあり波状の岩肌が露出し、指先ほどの鍾乳石が無数に付いている。県庁壕の北西500m位に位置している。

この新壕は、那覇市域において確認された市町村自治体の防空壕として唯一のものである。旧那覇、首里市、小禄村については確認できていない。

- (参考文献) 山川泰邦 『秘録沖縄戦史』 沖縄グラフ社 1958年  
那覇市史編集室 『那覇市史 資料篇第3巻7』 那覇市史編集室 1981年  
琉球新報 1996年8月25日記事 1996年  
(調査協力者) 知念堅亀さん、具志堅浩文さん、知念勇さん



第15図 新塚（ミーゴ）略図



新塚所在地



開口部



内部



カマド跡

図版26 新塚（ミーゴ）

### e. 識名宮ヌガマ（お宮のガマ）

所在地：那覇市繁多川4-13

立地（標高）：平地ドリーネ（約72m）

形態：自然壕

種別：住民避難

現状：原形

保存状況：施柵・拝所がある

築造者：

築造年月日：

戦時中の使用状況：繁多川住民が避難

主な遺構：

#### 概要

識名宮境内、神殿の背後にあるガマで、隣家の庭先まで続いている。お宮の聖域内であり柵を設置している。1944年の十・十空襲、1945年の空襲、地上戦の時地元住民や兵隊が避難した。昼は洞穴に避難し、夜は各陣地の兵隊の作業の加勢に出た。壕作りで出た石運びや砲兵陣地へ弾運びであった。5月初旬東風平地区の重砲隊から「壕の交換」を要望され、避難民は東風平に移動した。

識名宮神殿の背後にポッカリと口を開けている鍾乳洞で、締縄の張られた階段を2m下りると半円形のホールになっている。北西側にも出入口があり、隣地の庭先につながる。ホールの天井は約2mで床は5m×10mの空間があるが、神域として清掃されているので戦争当時の状況はわからない。洞穴壁際に積まれた石礫に甕や瓦破片が混っていることがわずか物証としてあげられる。

現在の社務所向かいに径50cm、高さ5mの福木にいくつもの穴があり、幹が空洞になっているがこれも戦争当時の傷跡と伝えている。琉球八社と呼ぶ社の1ヶ所である。

（参考文献） 那覇市史編集室 『那覇市史 資料篇第2巻中の6』 那覇市史編集室 1974年  
那覇市史編集室 『那覇市史 資料篇第3巻7』 那覇市史編集室 1981年  
識名誌編集委員会 『識名誌』 識名自治会 2000年



柵のある開口部

図版27 識名宮ヌガマ  
（お宮のガマ）

#### f. シッポウジヌガマ

所在地：那覇市真地 123の西崖上  
立地（標高）：台地（約80m）  
形態：自然壕＋人工壕  
種別：政治行政  
現状：壕内にゴミ、一部開口部崩落  
保存状況：墓地地帯の地下に現状維持  
築造者：県庁職員 警察部  
築造年月日：1945年  
戦時中の使用状況：県庁職員、県知事の避難壕  
主な遺構：ガマと拡張された坑道

#### 概要

識名墓地帯の石灰岩台地の東側縁（へり）にあるガマのことである。東側開口部から2 mほど斜面を降りるとホール状の空間になり北東に「四方地の神」の石碑が建っている。このガマをシッポウジヌガマと呼んでいる。

1945年新任の県知事は、前任知事が十・十空襲の時、普天間に疎開したのに対し、空襲で焼野原の那覇の隣接地真和志村に防空壕を求めた。「県庁壕・警察部壕」として著名な防空壕である。戦前の最後の市町村首長会議がここで行われた。5月末首里に第32軍軍司令部が摩文仁撤退することに従い県庁壕の人々も摩文仁に向けて退陣していった。

このガマは嵩下グスクと呼ばれる岩山の下、嵩下原遺跡の上辺にあたる。東側の開口部から西に向けて約10 m、下に2 m下ると200～300m<sup>2</sup>の空間になり北側は1 m更に一段下る。壁際は岩が散らばり奥行不明。南側を拡張したが、幅150cm、高さ180cm位の坑道が数十m伸びる。岩壁に5 cm径の丸い穴がありダイナマイト使用痕をうかがわせる。坑道は西に向きを変え、突当りが井戸になるが、水は坑道ではなく地下に流れているらしい。井戸の手前で東向きの坑道が続き約15mで落石、土砂とゴミが堆積している。東側崖の中腹にガマが開口しているのが外からは見える。現在は墓地地帯一画の拝所として機能している。

(参考文献) 山川泰邦 『秘録沖縄戦史』 沖縄グラフ社 1958年  
荒井紀雄 『戦世の県庁』 荒井紀雄 1992年  
1 フィート運動の会 『十周年記念誌』 1 フィート運動の会 1993年  
隈崎俊武 『手記沖縄戦と島田知事』 内之浦幸子 1998年



壕内部  
(新しく設置された石碑)

図版28 シッポウジヌガマ

### g. てんぷら坂の壕

所在地：那覇市牧志3-6

立地（標高）：丘陵麓（約4m）

形態：人工壕

種別：住民避難

現状：ほぼ完形

保存状況：建造物の背後、ゴミ捨場

築造者：壺屋住民

築造年月日：1944年9～10月

戦時中の使用状況：壺屋住民

主な遺構：壕、坑道、棚

#### 概要

国際通りの南側、壺屋と牧志の町境の古墓地帯に所在する。戦後この壕群の前の道にてんぷら屋が建並んでいたことによる「てんぷら坂」の通称がある。

1944年9月から10月にかけて壺屋町内会で共同防空壕を掘った。ちょうど10月9日に掘り終り完成祝をした翌日に十・十空襲になり前の道に爆弾が落ち住民3人が犠牲になったが、1000余人が避難し助かった。その後の空襲のたびに非難した。

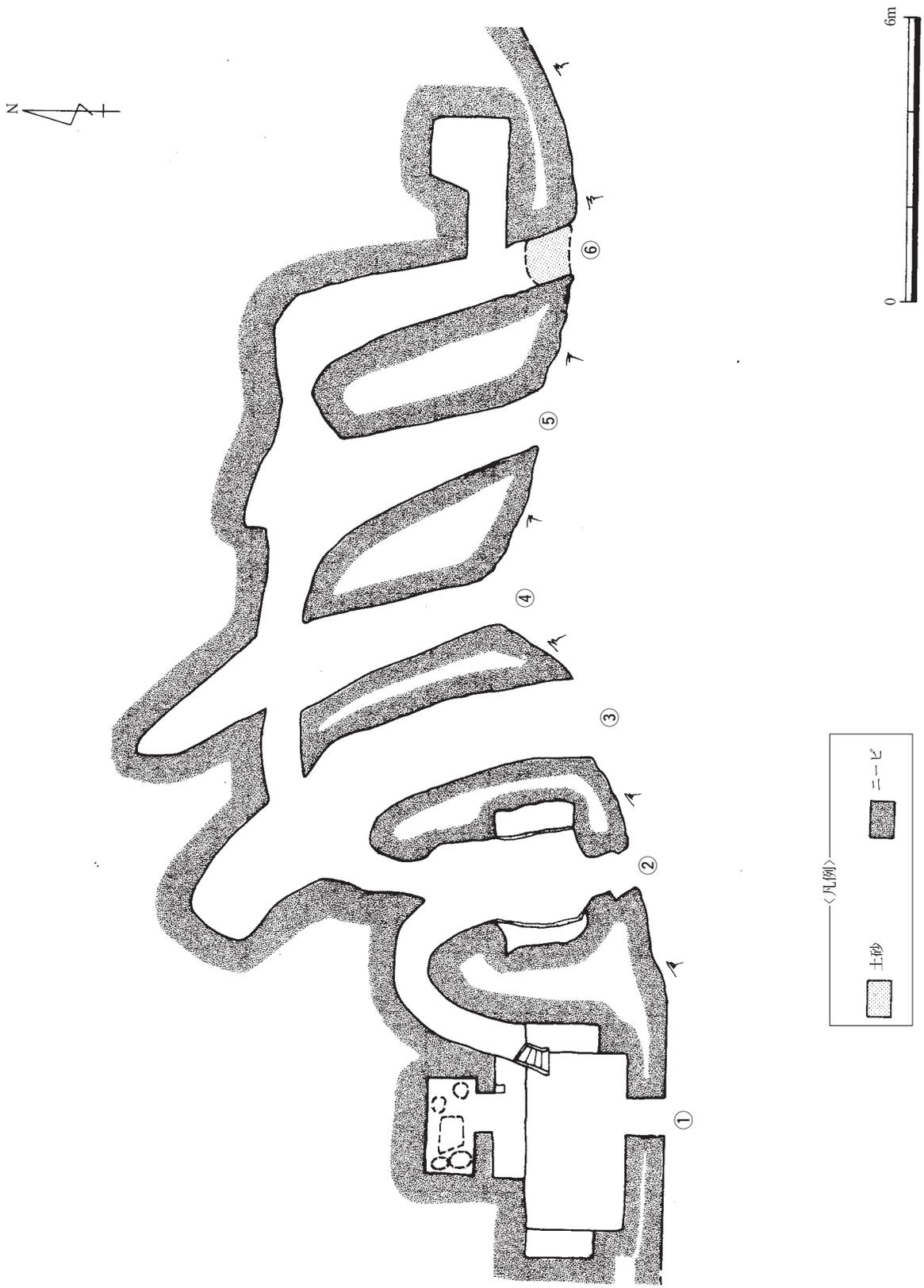
現在、道沿いの第3紀砂岩（ニービ）の崖に6基の口が南面して開いているのを見ることができる。西側①の口は、建物の影の崖中腹にポッカリ口を開けている。この壕は四角い部屋で本来の墓の形を残しているが、墓室の北東角から坑道を掘り②の壕につないでいる。②の壕は開口部で門、墓室の名残があり部屋の奥東側で③と接している。③～⑥の壕開口部はゴミが奥まで投げ込まれ外からの観察はできない。③の壕は北西に曲る円を描くように掘られ奥行9m、4mの所で120cmの坑道④に継ぐ。④は③よりやや小型で⑤と連結する。⑤は直線的に⑥とつながり、⑥は現入口から1m位で東へ1m掘り1m四方の小部屋を作っている。開口部はセメントブロックで塞がれている。

（参考文献） 那覇市史編集室 『那覇市史 資料篇第3巻7』 那覇市史編集室 1981年  
1フィート運動の会 『十周年記念誌』 1フィート運動の会 1993年



開口部②

図版29 てんぷら坂の壕



第16図 てんぷら坂の塚 (平面略図)

#### h. 楚辺1丁目の壕（城岳の壕）

所在地：那覇市楚辺1-4

立地（標高）：丘陵（約30m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：開口部以外はほぼ原形

保存状況：城岳公園の地下に保存。周辺は城岳貝塚遺跡

築造者：軍

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：陣地として使用

主な遺構：複層に構築された坑道

#### 概要

楚辺1丁目の城岳は県庁、旧県立二中（現・那覇高校）の間近にあり真地の「県庁壕」ができるまでの間、空襲下のもと防空壕が作られていた。食料保管、通信機能があり山部隊那覇守備隊が陣を構え4～5月と長期間戦火にさらされた。

県土木部都市内防空壕調査資料昭和54年度版では「入口3ヶ所幅2m高さ1.5m延長50m素掘」と聞取ながら報告している。1フィート運動の会では、1993年8月調査で全長500m、三重構造と現地踏査記録している。那覇市の戦跡（H11年度）で入口数13ヶ所現在の公園区域をぐるりと取り込んだ状態になっている。

2003年2月那覇市の発掘調査において東南区域の一部ながら古墓におびただしい弾着痕を検出している。この弾痕は空爆破壊をまぬがれたあとの地上戦を物語り、弾は水平より下の角度から射撃されている。

丘の周囲をぐるりと墓が取り巻き、外から壕の開口部は墓と判別できない。東南に施柵された鉄扉を開けて内部に入るとめまぐるしい坑道が構築され、開口部はもとの墓室を利用している。坑道は赤土混じりの礫質石灰岩で、一部自然風化の跡も観察できる。床面はいたる所掘り返され靴片、空缶瓶、機械片、弾片などが坑床に置かれている。南西側開口部近くでは、1mぐらい堆積土が掘り出されコンクリートの溝が見える。坑道部において機器整備等を実施したものと思われる。

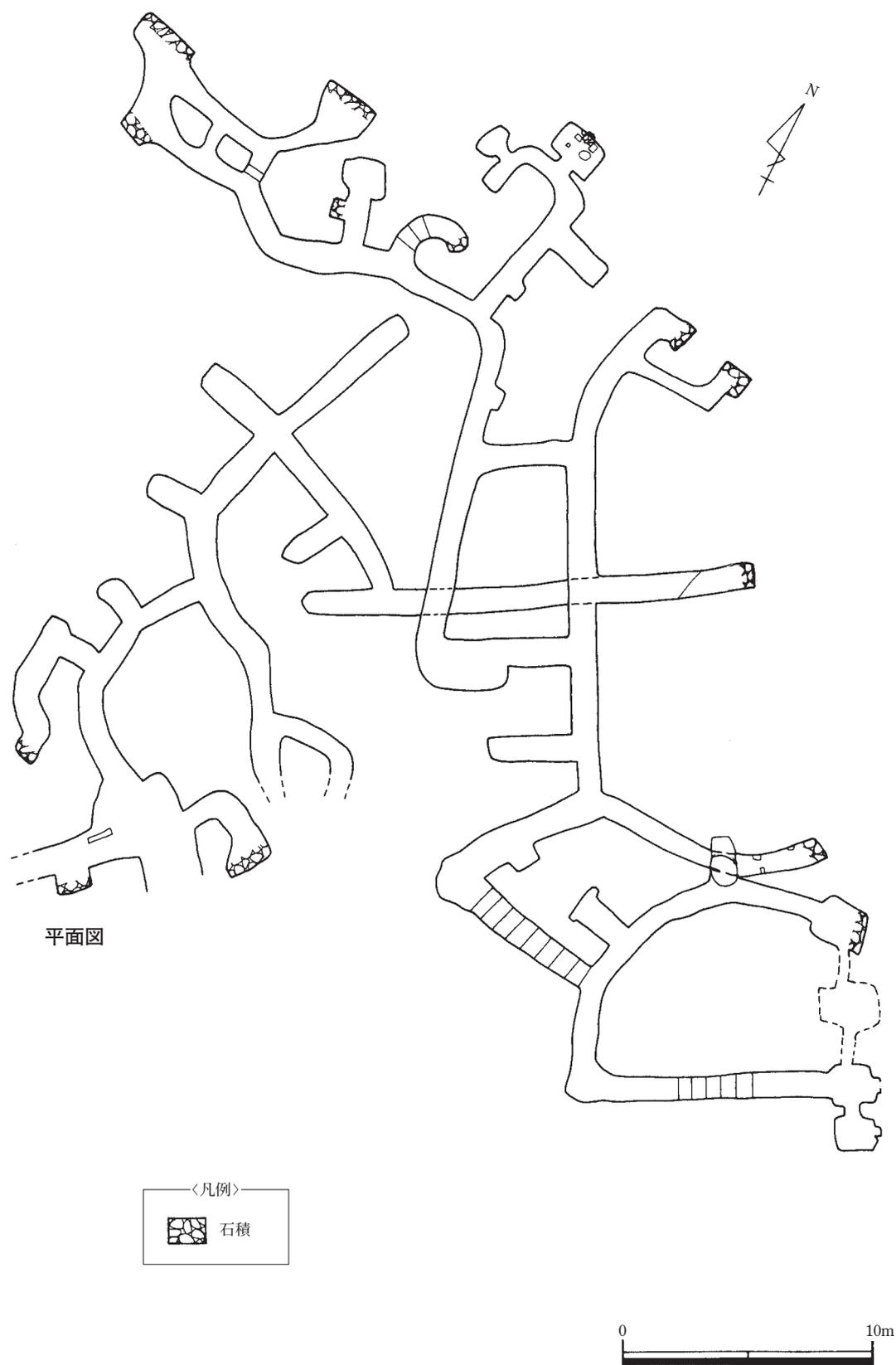
城岳は西にガジャンピラのある垣花台地、北のセイコウジヤマ（旭丘公園）、北東の泊・天久・内久保（緑丘公園）牧志のフチサ（希望丘公園）、南東に国場、南に真玉橋を見渡す位置にある。頂部は削平されて拝所と遊歩道ができ公園になっている。

（参考文献） 那覇市史編集室 『那覇市史 資料篇第3巻7』 那覇市史編集室 1981年  
1フィート運動の会 『十周年記念誌』 1フィート運動の会 1993年



複雑に交差する坑道部

図版30 楚辺1丁目の壕  
（城岳の壕）



第17図 楚辺1丁目の壕（城岳の壕）概略図

### i. ことぶき山壕

所在地：那覇市田原3-4

立地（標高）：丘陵（約40m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：内部はほぼ原形

保存状況：出入口施錠

築造者：海軍

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：海軍那覇飛行場守備隊が使用

主な遺構：坑道

#### 概要

現在の小禄市営住宅南側鉄塔のある小山が地元でカテーラムイと呼ばれる位置に所在する。ことぶき山の名称は、この小山を高い所から見ると寿の字に似ていることから呼ばれた軍隊呼称である。

沖縄方面海軍根拠地隊巖部隊の本部壕として1944年8月から部隊と地元住民を動員して構築された。米軍上陸以後1945年5月頃から陸戦隊として地上戦に参加、6月初旬小禄半島上陸米軍と交戦、日本兵、米兵、民間人合せて数千人の犠牲者を出したという。

現地は、第3紀泥岩（クチャ）と第3紀砂岩（ニービ）の相互の地盤層を手掘りで掘り、壕の中央部はコンクリートで柱や天井、壁を作りコンクリートの壁の厚みは約30cmある。坑道は前後左右に展開する形で開口部（壕口）は1ヶ所位だがほとんど崩落して、今は団地側からが出入りできる。遺物は1ヶ所かたづけられる形でまとめて置かれ、陶磁器や金属製食器、ビール瓶、缶、靴片、機械部品残片が観察できる。

ことぶき山壕は1972年まで米軍基地内にあり現状変更のなかったことと奇跡的に生存し得た戦争体験者の証言や協力により保存することができた。6月23日慰霊の日の前後に参観の行事を持ち、田原公園として壕入口には説明板を設置している。

（参考文献） 1 フィート運動の会 『十周年記念誌』 1 フィート運動の会 1993年



コンクリート製坑道及び階段

図版31 ことぶき山壕

## j. 「らくだ山」の海軍陣地壕①

所在地：那覇市字鏡水

立地（標高）：丘陵中腹～麓（約10～20m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：壕口部に一部土砂流入がみられるが比較的良好

保存状況：陸上自衛隊那覇駐屯地内

築造者：不明

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：カマド跡、階段、石積み、小部屋

### 概要

陸上自衛隊那覇駐屯地内の通称「らくだ山」と呼ばれる丘陵の中腹から麓にかけて所在する。第3紀砂岩質（ニービ）の岩盤を削り抜いて構築した人工壕である。

今回の調査で確認できた壕口と思われる箇所は少なくとも4つであるが、坑道の延長部が落盤により陥没口を形成したり、逆に元は壕口であった箇所が塞がれている状況も見られるため、壕口の詳細な位置を特定することは出来なかった。

内部から壕口へと向かう坑道は、概ね上方に傾斜しており、通気口の役割も果たしていたものと思われる。今回の調査で入口として使用した壕口は、高さ約70cm、幅約100cmを測る。この口には爆風除けと思われる石積みが見られ、入壕するには石積みを除けて屈んだ状態で降らなければならない。

主な遺構としてカマド跡があり、周辺の壁には煤が付着している。また、部屋と思われる遺構は6ヶ所であった。坑木跡はこの部屋や坑道の交差部などに集中して見られるのも特徴の一つであろう。

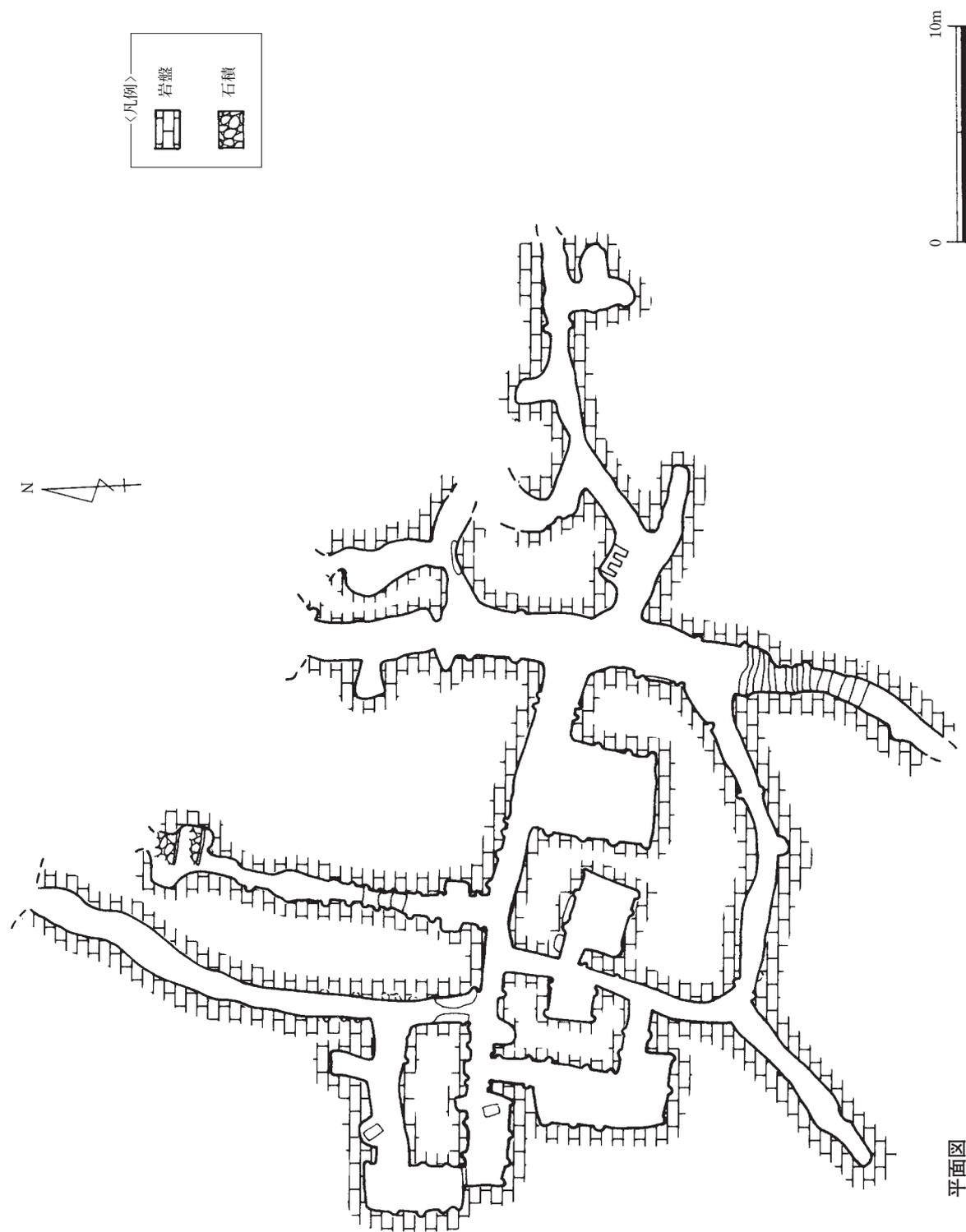
「らくだ山」は海軍那覇飛行場（現那覇空港）の東側に所在する丘陵で、沖縄戦時には巖部隊（南西諸島海軍航空隊）の守備地区であったが、この壕の築造者及び使用状況については不明である。

（参考文献） 防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』 朝雲新聞社 1968年  
防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』 朝雲新聞社 1970年



開口部遠景

図版32 「らくだ山」の  
海軍陣地壕①



第18図 「らくだ山」の海軍陣地壕①の遺構図



第19図 「らくだ山」の海軍陣地壕①の位置



カマド跡



実測状況

図版33 「らくだ山」の海軍陣地壕②

## k. 海軍砲台跡

所在地：那覇市字当間

立地（標高）：丘陵（約47m）

形態：構築物

種別：陣地

現状：砲台に砲身も付帯する

保存状況：航空自衛隊那覇基地内

築造者：海軍第226設営隊（山根部隊）

築造年月日：1943年

戦時中の使用状況：1945年6月初頭まで

主な遺構：砲台

### 概要

航空自衛隊那覇基地内の慶良間諸島が見下ろせる丘陵頂上部に所在する。大型のトーチカのように見える砲台は幅約7m奥行き約8mを測る。砲身が置かれる砲座部は幅約450cm、奥行き約680cmを測り、砲台に覆い囲まれたように配置されている。

砲身の開く砲台正面の立面部は高さ450cm、幅900cmを測る。正面向かって左側の壁面部は一部コンクリートの剥離が見られ、鉄筋が剥き出しになった状態である。

現存する砲身は12糎（センチ）水上砲台と呼ばれ、海軍那覇飛行場の守備に配置されたものである。1945年6月4日、海軍那覇飛行場北部に米軍が上陸すると、小禄地区の守備軍は後退し、6月6日に海軍那覇飛行場周辺陣地から豊見城74高地（旧海軍司令部壕）へと移っていった。この海軍砲台は1945年5月末頃に一度発射したとの証言があることから、6月初頭までは、海軍の管轄下にあったものと思われる。

（参考文献） 防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』 朝雲新聞社 1968年

防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 沖縄・臺灣・硫黄島方面陸軍航空作戦』 朝雲新聞社 1970年



砲身の残る砲台跡

図版34 海軍砲台跡

## 1. 高射砲部隊の壕

所在地：那覇市住吉町3丁目

立地（標高）：平地（約5～10m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：舗装された道路の下

保存状況：陸上自衛隊那覇駐屯地内

築造者：不明

築造年月日：1944年

戦時中の使用状況：

主な遺構：貯水槽、排水溝

### 概要

陸上自衛隊那覇駐屯地内、管理用道路及び芝生地の下に所在する。那覇駐屯地の第1ゲートから北北西に約300mの位置にあり、地番は住吉町3丁目である。

駐屯地は陸上自衛隊第101後方支援隊が管理しているが、基地内の警備や安全上の観点から壕口のコンクリート部には施錠がされている。

入壕直ぐの階段を下りると、高さ約190cm、幅180cmの坑道が等間隔に構築されている。全体的に坑木の跡はないが、掘削作業の途中だったと思われる壕の西側先端部には残っている。坑道の脇に排水溝が設けられている部分が見られる。また、幅90cm、奥行き220cmのコンクリート製の貯水槽があり、湧き水があふれている。

全長約300m近い大規模な壕で、北西から南東にはしる中央坑道を軸に、ほぼ直角な坑道が4本見られる。壕の北西先端部に垂直坑道があるが、上部は管理用道路の真下に位置し、マンホールで蓋がされている。

沖縄戦時に、陸上自衛隊那覇駐屯地付近は、海軍那覇飛行場を守備するため陸海軍ともに配備されていた。聞き取り調査等により高射砲部隊の壕である可能性が高いため、ここでは「高射砲部隊の壕」として報告する。

（参考文献） 防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 沖縄方面海軍作戦』 朝雲新聞社 1968年

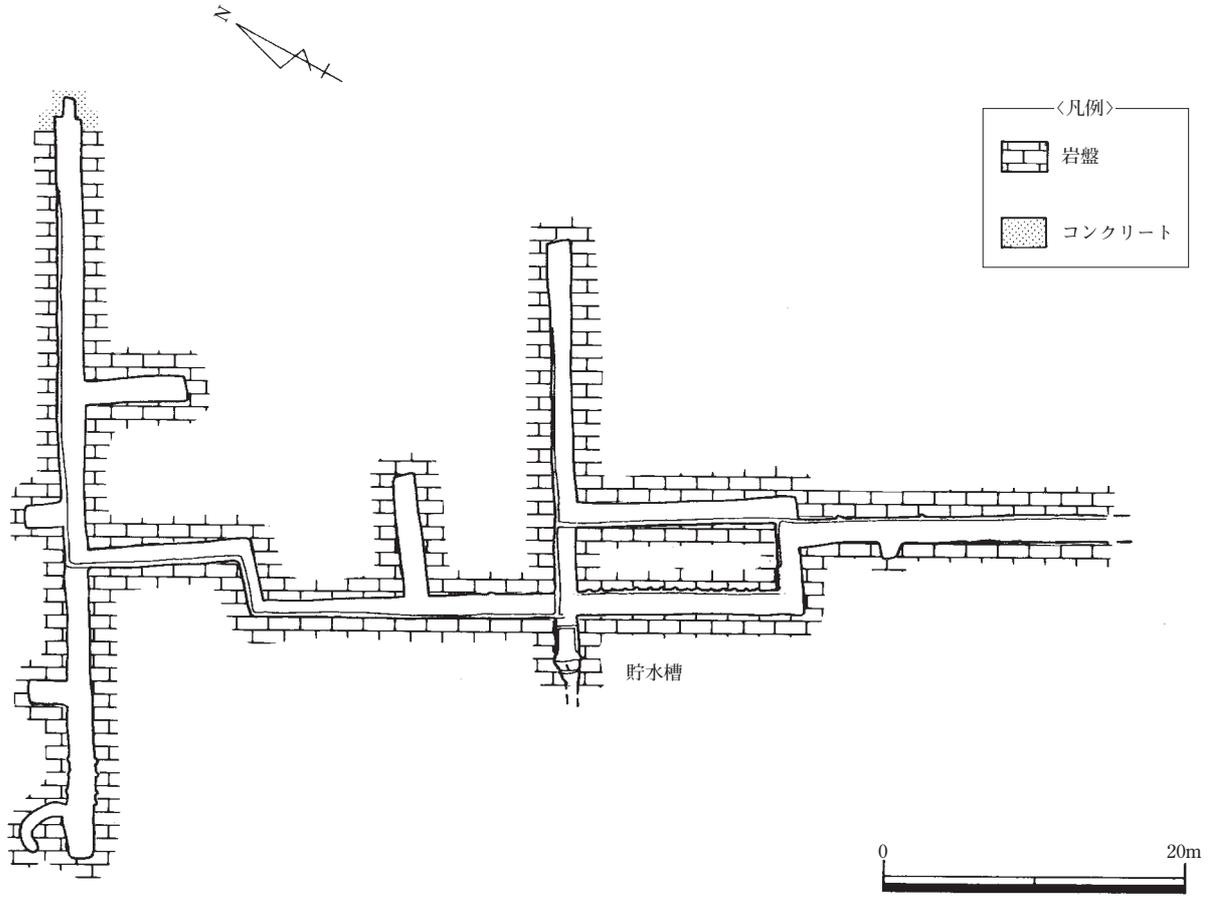
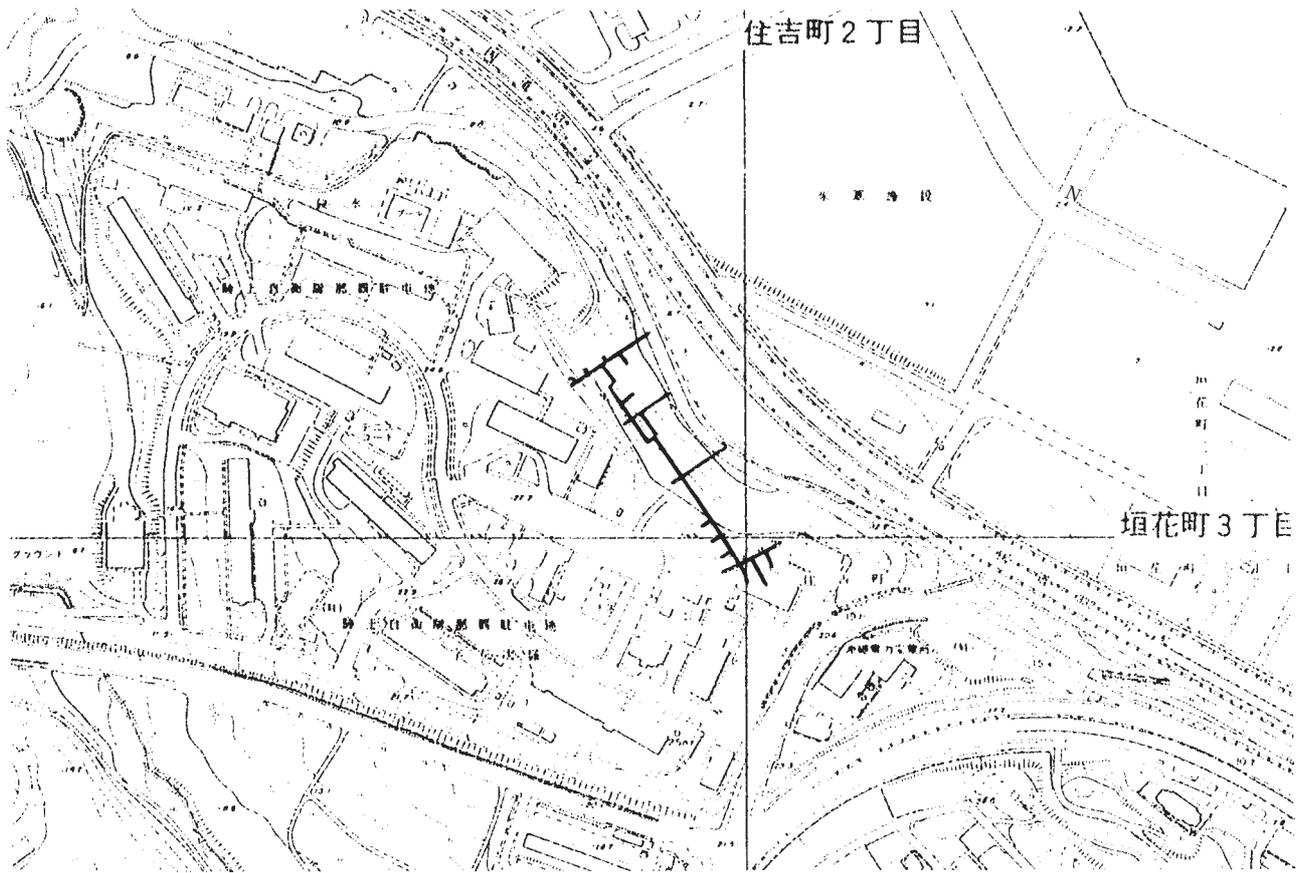
防衛庁防衛研修所戦史室 『戦史叢書 沖縄・台湾・硫黄島方面陸軍航空作戦』 朝雲新聞社 1970年

（調査協力者） 西川ウメさん



坑木跡及び朽ちた坑木

図版35 高射砲部隊の壕①



第20図 高射砲部隊の壕遺構図

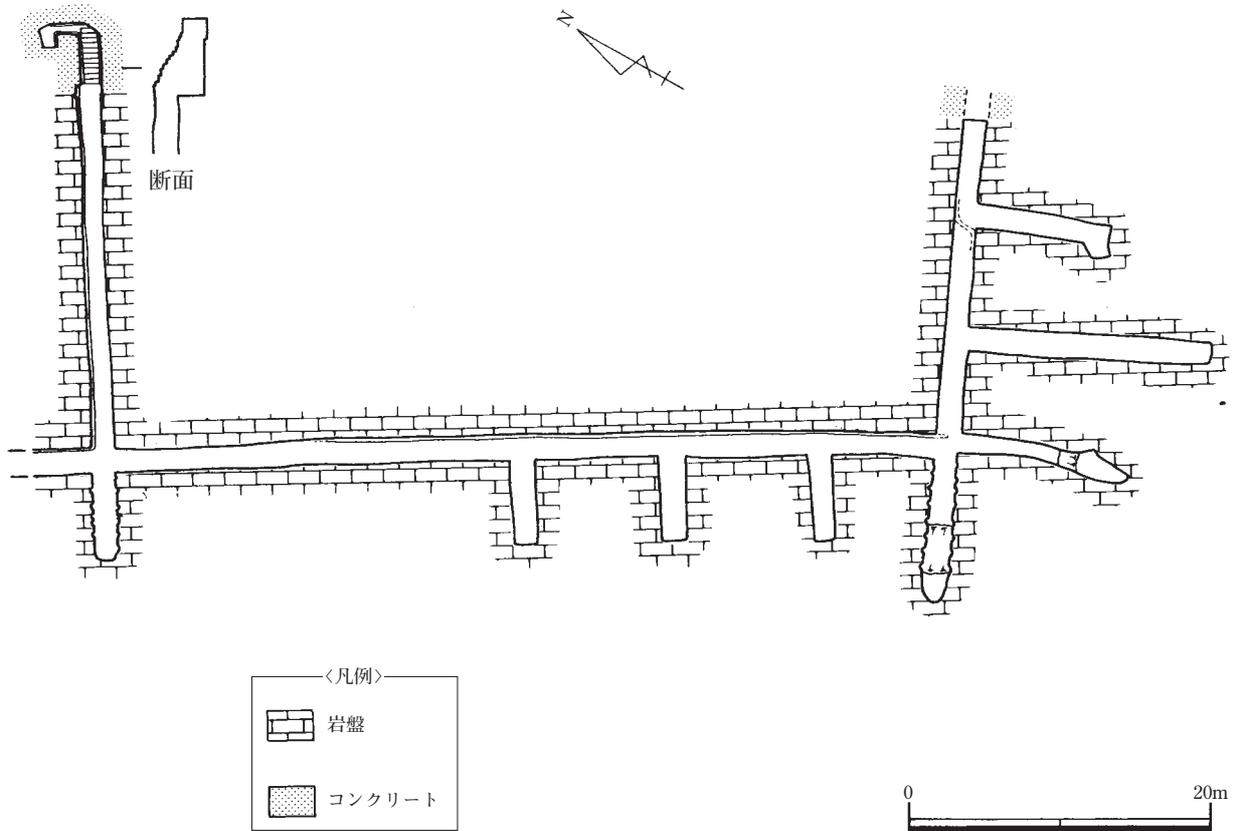


壕入口



貯水槽

図版36 高射砲部隊の壕②



## 第4章 結語

平成14～15年度にかけて実施した、沖縄本島周辺離島地区の戦争遺跡詳細分布調査において所在を確認した戦争遺跡は、78ヶ所であった。また、平成12～14年度にかけて随時調査を実施した那覇市における戦争遺跡数は、63ヶ所であった。ただし、この遺跡数には戦争に関連すると思われる戦前期の記念碑等も戦争遺跡としてとりあげた。遺跡の市町村内訳を以下に記す。

市町村	遺跡数	市町村	遺跡数	市町村	遺跡数
伊平屋村	3ヶ所	伊是名村	2ヶ所	粟国村	9ヶ所
渡名喜村	8ヶ所	久米島町	17ヶ所	渡嘉敷村	4ヶ所
座間味村	11ヶ所	北大東村	9ヶ所	南大東村	15ヶ所
那覇市	63ヶ所				

当調査地区である島尻郡に属する9町村は、古来より海上交通の要衝であり、船舶活動とともに発展を遂げてきた。例外的に南北大東村については近代において歴史活動を始めるが、太平洋戦争時において、本土防衛の前線ということは、他の諸島と変わらなかった。

一方、那覇地区は太平洋戦争時に、県都防衛の強化などにより陸海軍の司令部が置かれることになった。首里城の地下に第32軍司令部壕、海軍那覇飛行場を見下ろす丘陵地に海軍司令部壕（現豊見城市）が所在した。米軍との攻防戦は烈火を極め、市街地から周辺地区にいたるまで焦土と化す状況となった。

このように、沖縄戦時における状況は様々であるが、その被害・加害に関わる遺構を調査し、現状を把握することによって、沖縄の歴史を解明していく基礎資料を作成するように努めた。

現地調査した戦争遺跡の中で、分布状況の要旨を市町村別に述べることにする。

伊平屋村では、県指定天然記念物「くまや洞窟」で米軍の陣地活動による痕跡、コンクリート壁の状況を調査した。本報告書で、米軍による遺構は唯一の事例である。同村「田名神社の交通壕」や粟国村「真鼻木の擬装砲台跡」は、在郷軍人会、青年会を中心に民間人が構築したもので、当時の島民がいかにして戦争と関わったかを示すものである。

渡名喜村では、艦砲射撃こそなかったものの集落に所在する弾痕は、米軍機の機銃掃射が民家を狙っていた事実を示している。久米島町真謝の被弾痕は、1944年4月29日に守備隊の駐屯していない集落に艦砲が行われた際によるもので、当時の儀間郵便局から本省に打電された電文資料を伴う貴重な事例である。

渡嘉敷・座間味両村にはそれぞれ「特攻艇秘匿壕」が残されており、海上挺身隊の基地が置かれていたことを示した。海浜沿いに所在し、一周道路や堤防などの建設により破壊されたものが多く、現存する遺構の周辺まで造成されており、レール痕など関連遺構を確認することは出来なかった。両村において、島民が避難した跡地や避難壕を詳細に確認できなかったことは残念であるが、「集団自決」で親族が亡くなっていくのを目の当たりした方がご健在であり、調査員が躊躇せざる得なかったのも事実である。これも沖縄戦の一諸相であり、ここでは特に記すことにした。

北大東・南大東両村では、本島で繰り広げられたような地上戦は展開されずに済んだが、米軍による空襲や艦砲射撃は盛んに行われた。両島の私立錬成学校（国民学校相当）に奉安されていた御真影は、米軍の攻撃の激化に伴い、島守備隊の本部壕にそれぞれ匿われた。学校の御真影を軍隊の壕に奉護することは、その他の地域では確認されておらず、貴重な事例であると言える。

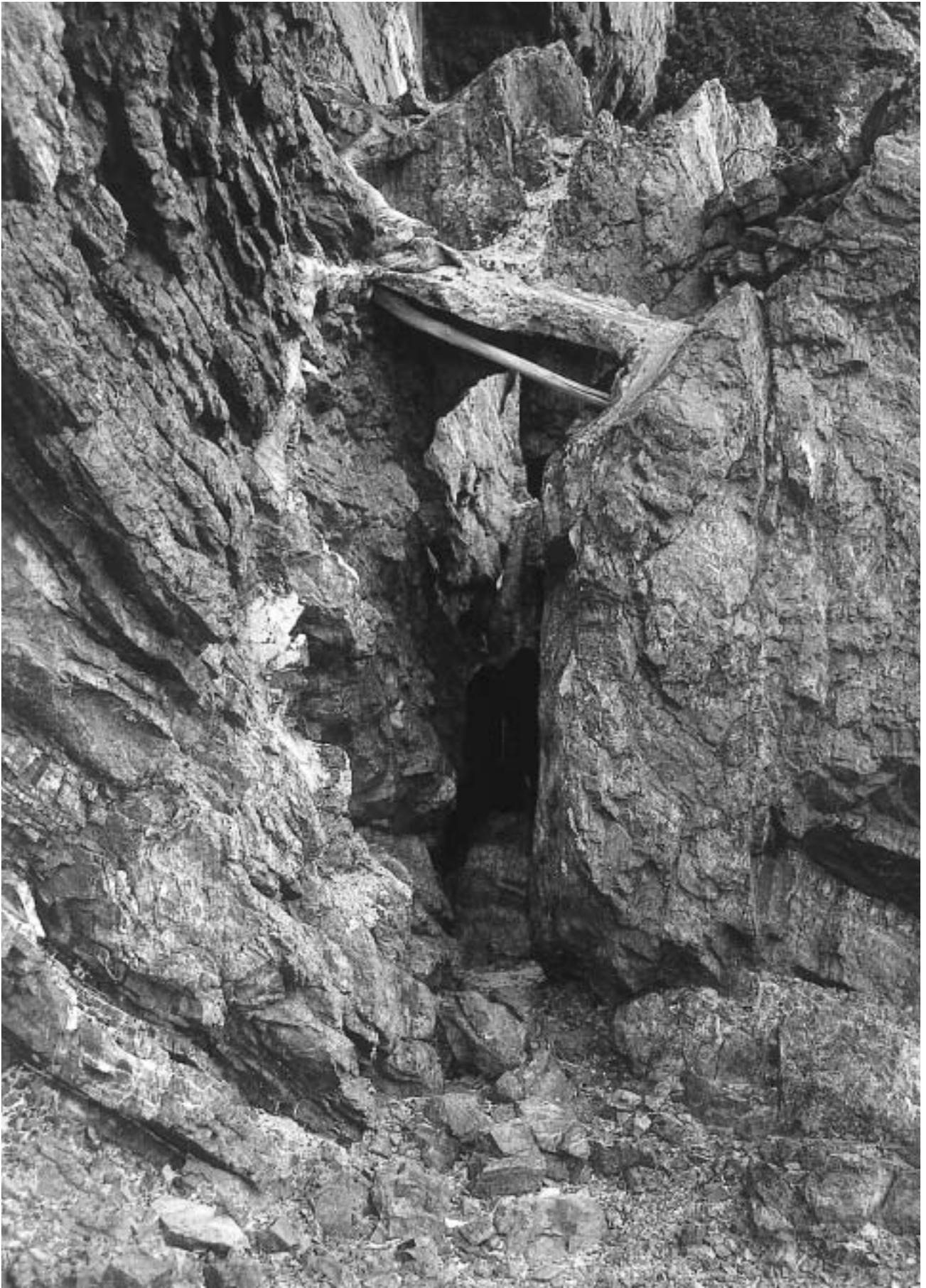
沖縄戦後、焦土と化した那覇地区では、終戦直後の採土・採石で地形ごと変化した地区が多く、公共工事や、宅地造成で、陣地や住民避難に関わる遺構が失われていった。現存する戦争遺跡の多くは、崖地や個人所有地であり、一部大規模な遺構が自衛隊基地内に所在する。いずれも都市計画など開発行為から免れた場所であることがわかる。那覇市（自衛隊基地内を除く）の戦争遺跡を形態で分類すると、コンクリートを主体とする「構築物」が2ヶ所であり、全体の4%以下と極めて低いことも特徴の一つとして挙げられる。

# 圖 版





図版37 伊平屋村 田名神社の交通壕 上：全景 下：壁面部



図版38 伊平屋村 くまや洞窟入口全景



図版39 栗国村 上：真鼻毛の擬装砲台跡 下：内嶺家の防空壕



図版40 渡名喜村 上：弾痕のある建造物群 下：アマンザキの住民避難壕



図版41 久米島町 上：大田の住民避難壕 下：ヤジャーガマ



図版42 渡嘉敷村 北山（にしやま）の陣地壕群 上：壁面に残る煙道 下：煙道近景



図版43 座間味村 大和馬の壕と貯水用コンクリート壁 上：前面 下：坑木跡



図版44 座間味村 上：恩納ガーラの御真影奉護塚 下：シンジュの塚



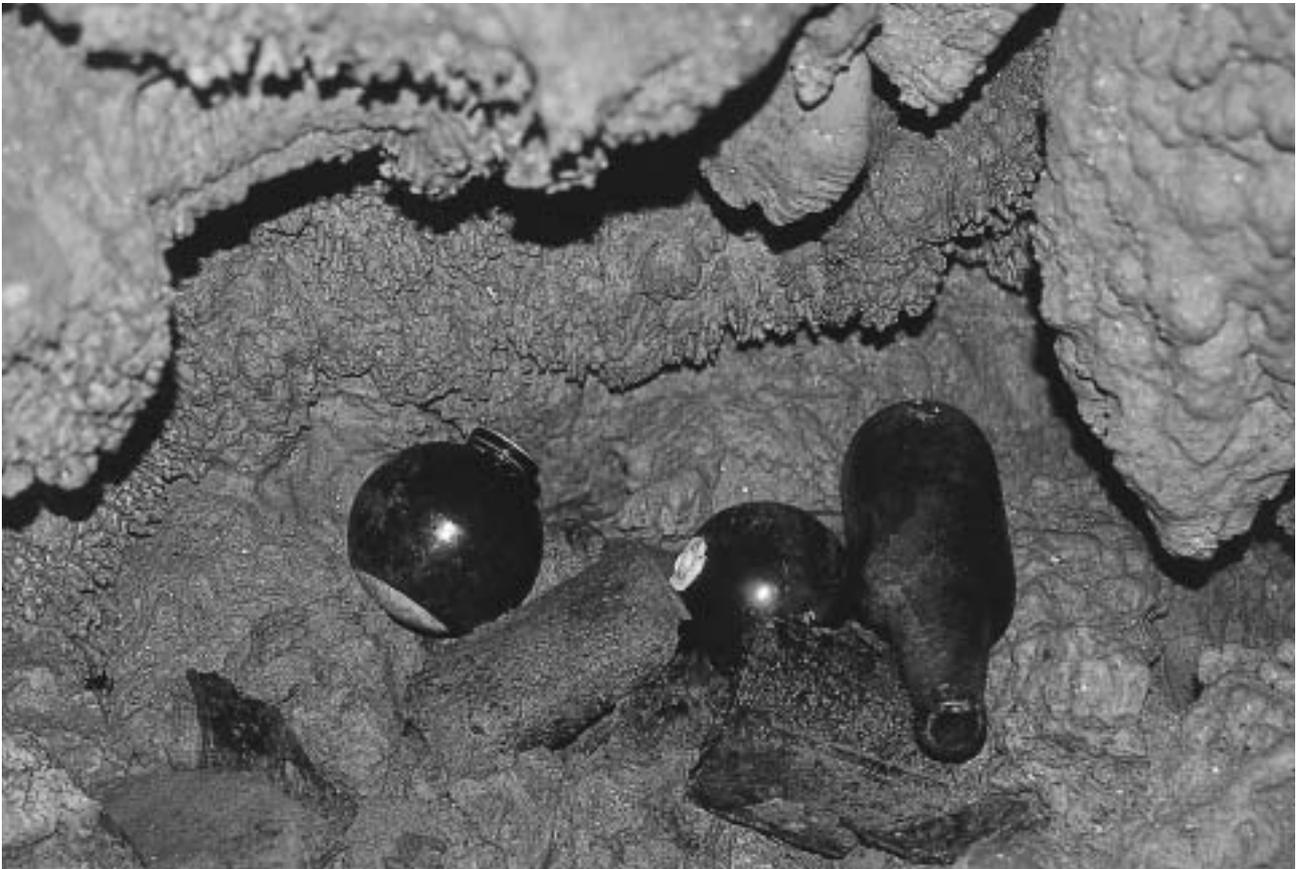
図版45 座間味村 上：特攻艇秘匿壕（阿嘉島） 下：特攻艇秘匿壕（慶留間島）



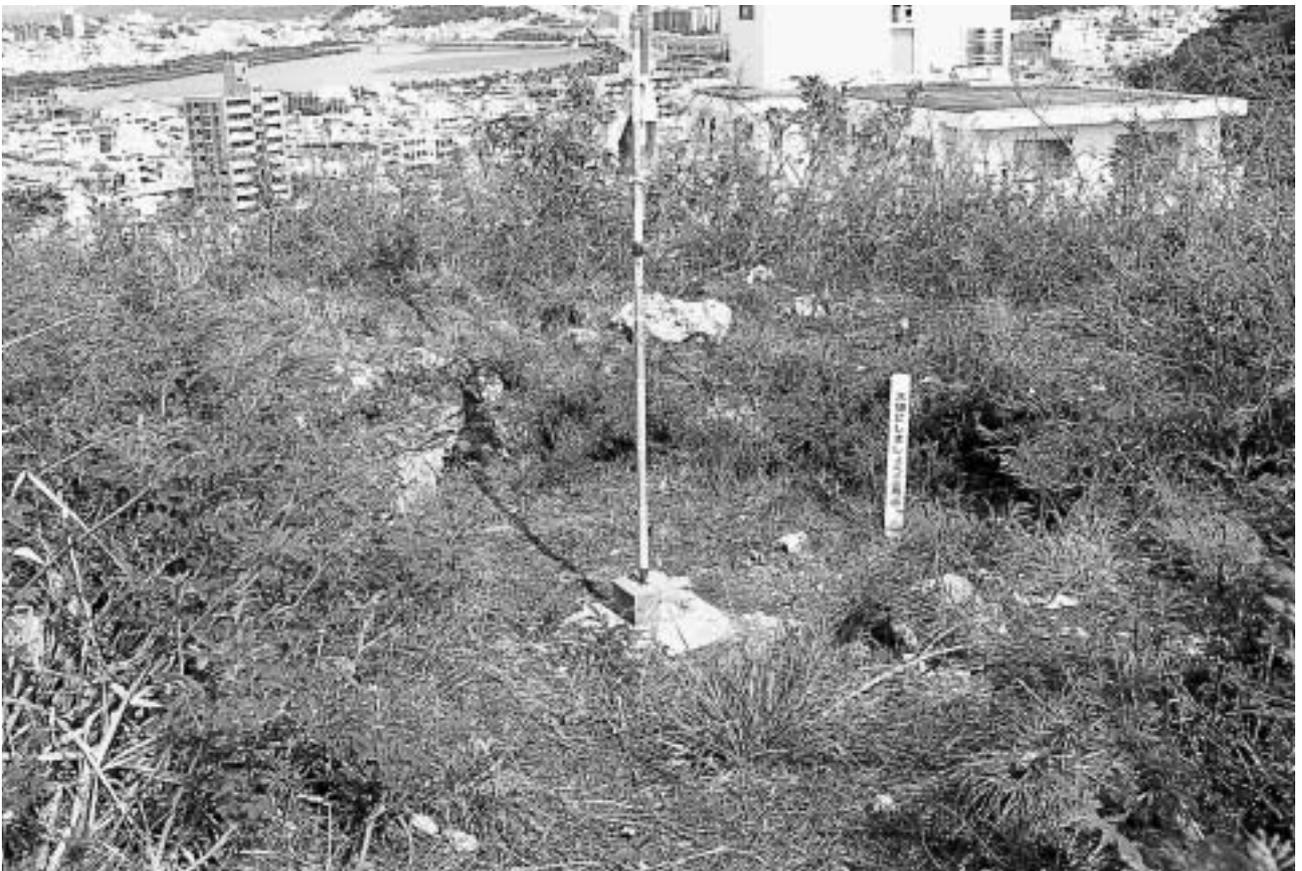
図版46 北大東村 黄金山の陸軍本部壕 上：爆風除けのある壕口 下：御真影奉護棚



図版47 南大東村 上：電波探知壕内部 下：弾薬庫



図版48 那覇市 上：首里末吉の山陣地 下：ムラグウヌガマ



図版49 那覇市 上：旭ヶ丘公園の陣地跡 下：垣花台地の陣地跡



図版50 那覇市 上：希望丘公園陣地跡 下：緑丘公園陣地跡

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第25集

**沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)**

一本島周辺離島及び那覇市編一

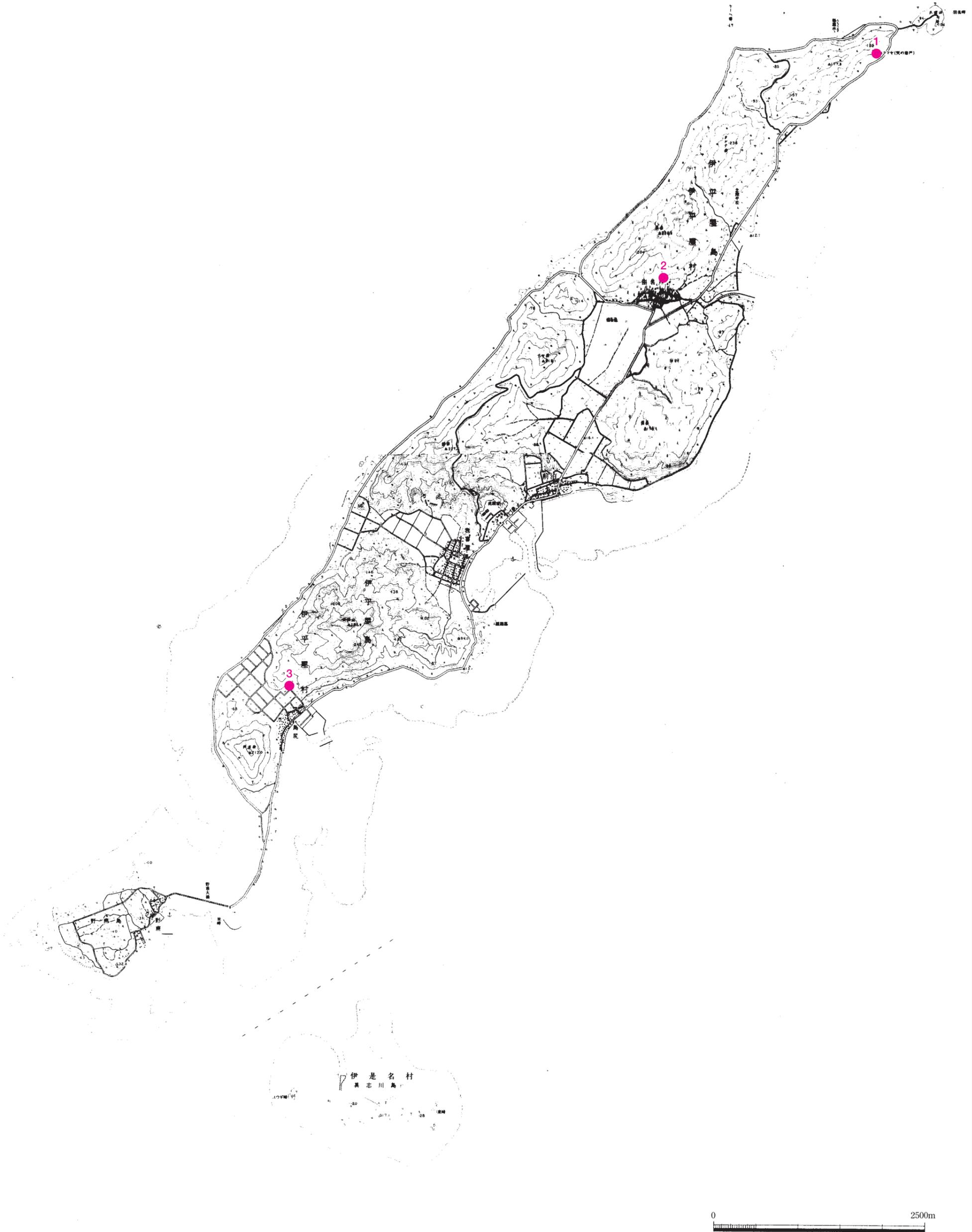
2004年(平成16)3月26日

発行 沖縄県立埋蔵文化財センター  
編集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒903-0125 中頭郡西原町字上原193-7  
TEL 098(835)8751・8752

印刷 有限会社 松本印刷  
〒900-0036 那覇市西1-3-2  
TEL 098(861)0101

# ①伊平屋村

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	くまや洞窟の弾薬倉庫跡	伊平屋村	田名	陣地	自然壕
2	田名神社の交通壕	伊平屋村	田名	住民避難	人工壕
3	島尻の防空監視所跡	伊平屋村	島尻	監視哨	不明



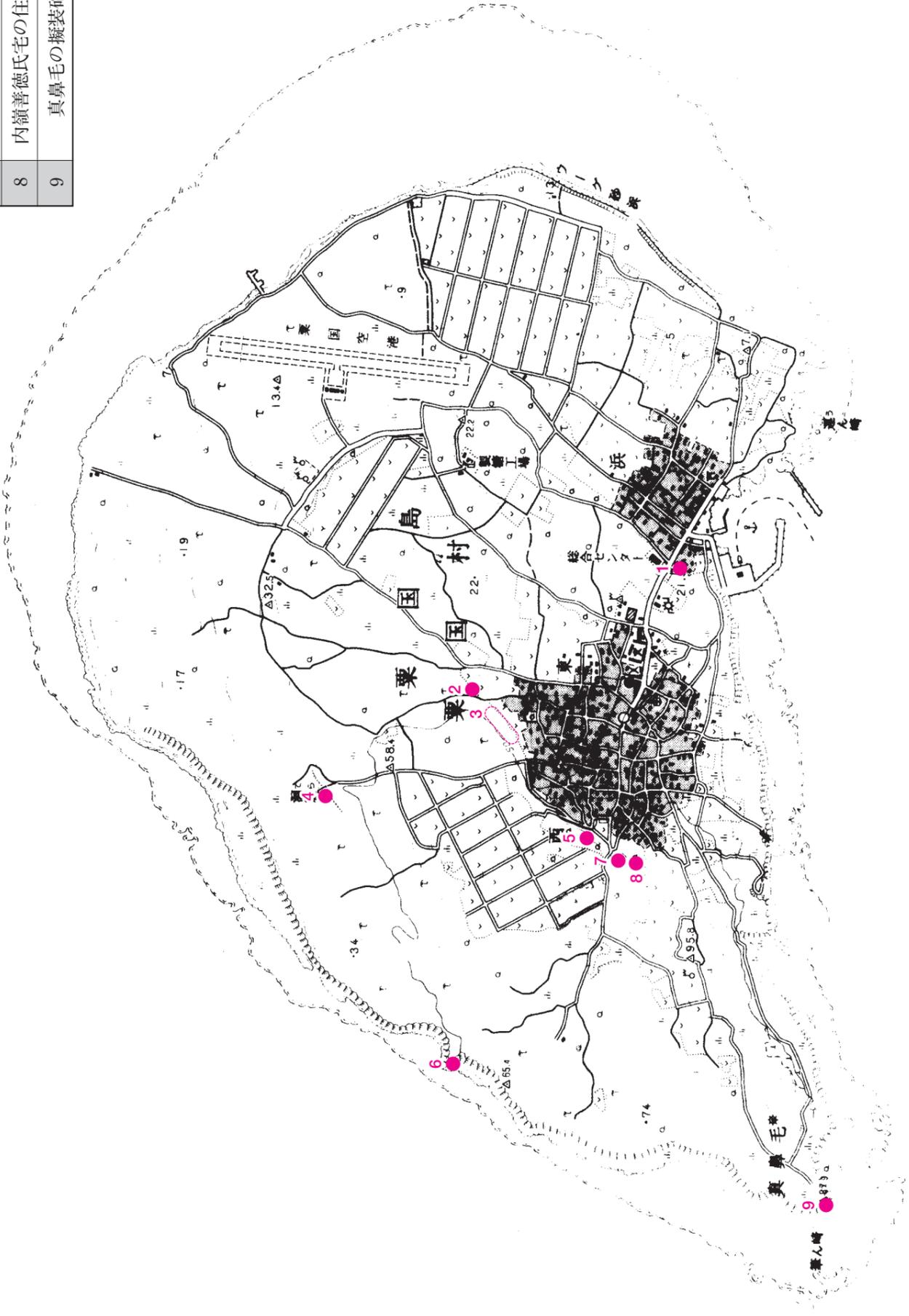
## ②伊是名村

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	山中学校跡付近の壕	伊是名村	伊是名	住民避難	人工壕
2	諸見サキ原避難壕地帯	伊是名村	諸見	住民避難	



### ③栗国村

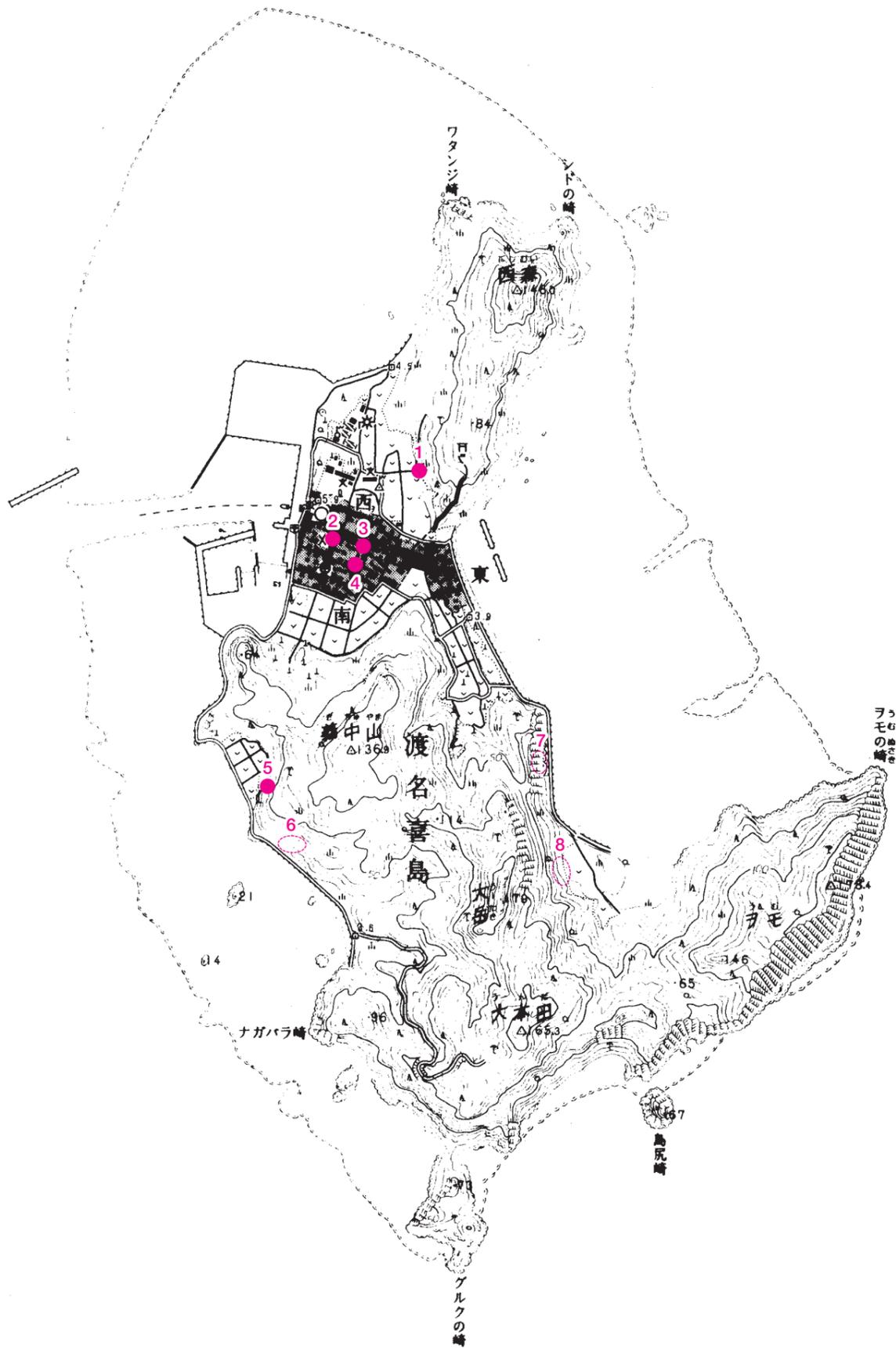
番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	栗国の忠魂碑	栗国村	東	記念碑等	建造物
2	テカーのガマ	栗国村	東	住民避難	自然壕
3	ウヘージの住民避難壕群	栗国村	東	住民避難	自然壕
4	テラ	栗国村	西	住民避難	自然壕
5	ヤエガーのガマ	栗国村	西	住民避難	自然壕
6	ウカハのガマとその周辺	栗国村	西	住民避難	自然壕
7	南屋敷原の住民避難壕	栗国村	西	住民避難	人工壕
8	内嶺善徳氏宅の住民避難壕	栗国村	西	住民避難	人工壕
9	真鼻毛の擬装砲台跡	栗国村	西	陣地	構築物



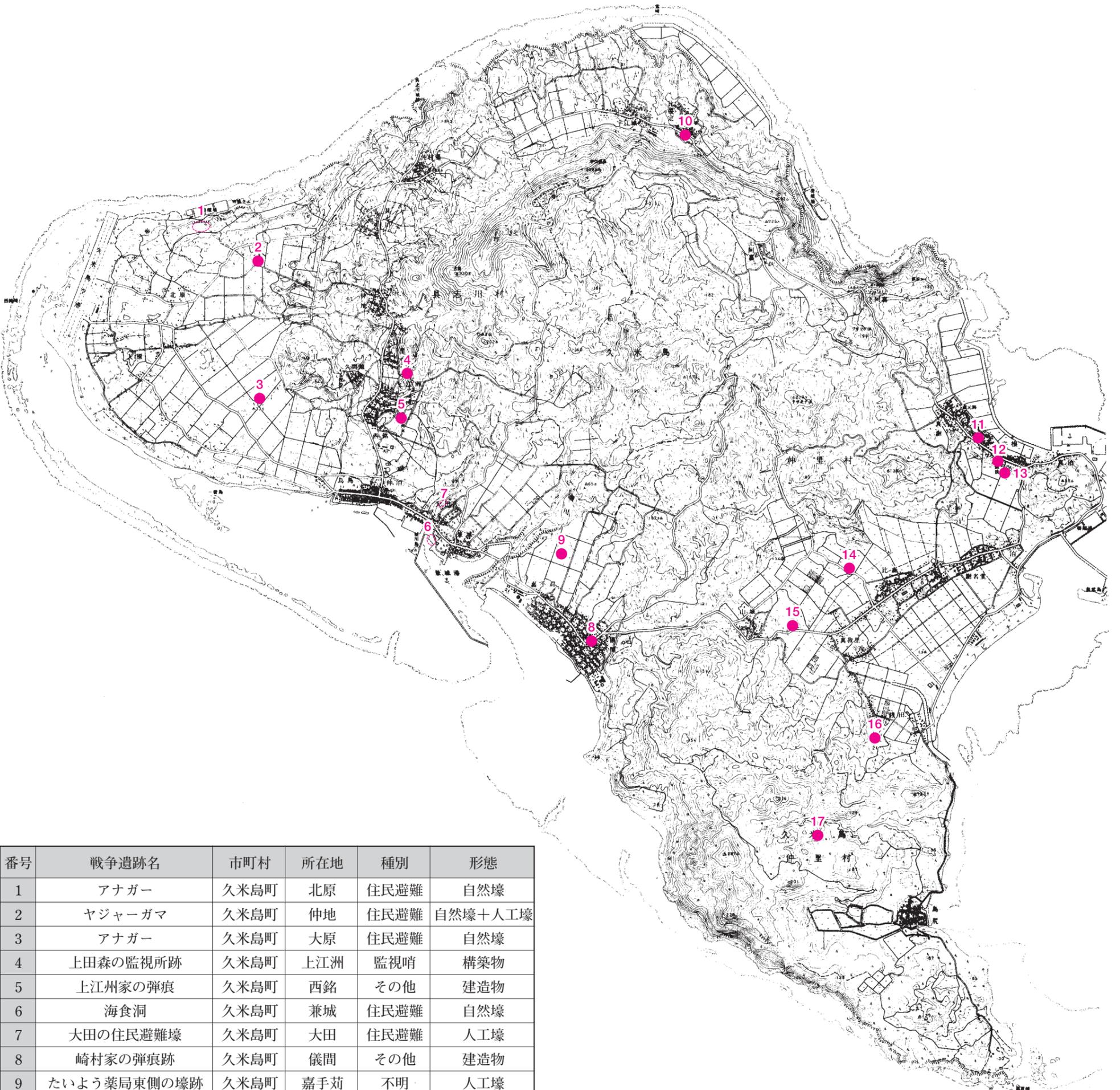
# ④ 渡名喜村

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	桃原家の住民避難壕	渡名喜村	渡名喜	住民避難	人工壕
2	桃原善一家の弾痕の残るヒンプン	渡名喜村	渡名喜	その他	建造物
3	比嘉敏夫家の弾痕の残る家	渡名喜村	渡名喜	その他	建造物
4	南風原稔家の弾痕の残るヒンプンと付属舎	渡名喜村	渡名喜	その他	建造物
5	ヘーワダヌガマ	渡名喜村	渡名喜	住民避難	自然壕
6	ユブクの住民避難地域	渡名喜村	渡名喜	住民避難	人工壕
7	アマンザキの住民避難壕	渡名喜村	渡名喜	住民避難	自然壕
8	アンジェーラの住民避難地域	渡名喜村	渡名喜	住民避難	自然壕

渡 名 喜 村



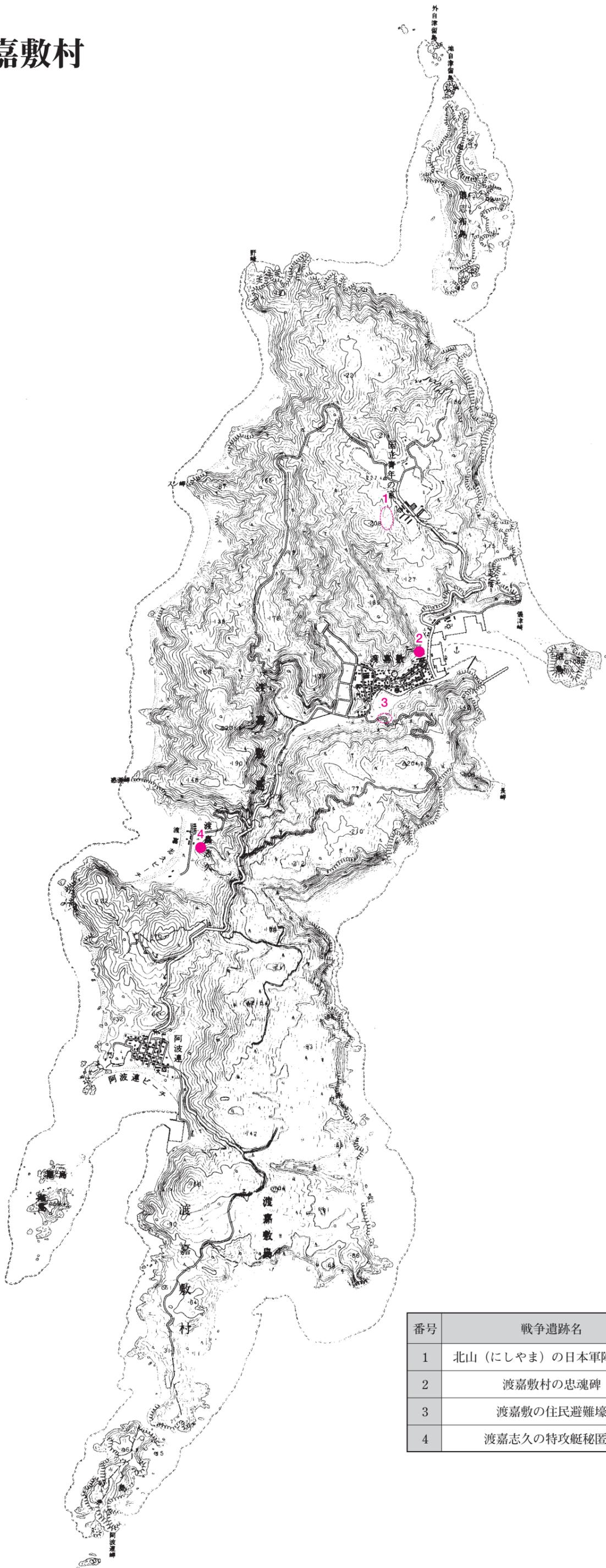
# ⑤久米島町



番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	アナガー	久米島町	北原	住民避難	自然壕
2	ヤジャーガマ	久米島町	仲地	住民避難	自然壕+人工壕
3	アナガー	久米島町	大原	住民避難	自然壕
4	上田森の監視所跡	久米島町	上江洲	監視哨	構築物
5	上江洲家の弾痕	久米島町	西銘	その他	建造物
6	海食洞	久米島町	兼城	住民避難	自然壕
7	大田の住民避難壕	久米島町	大田	住民避難	人工壕
8	崎村家の弾痕跡	久米島町	儀間	その他	建造物
9	たいよう薬局東側の壕跡	久米島町	嘉手苅	不明	人工壕
10	御大典記念井泉	久米島町	比屋定	記念碑等	建造物
11	清田家の弾痕跡	久米島町	真謝	その他	建造物
12	喜久村家の防空壕	久米島町	宇根	住民避難	人工壕
13	宇根ワイトゥイの防空壕	久米島町	宇根	住民避難	人工壕
14	比嘉一本松の住民避難壕	久米島町	比嘉	住民避難	人工壕
15	防空壕跡	久米島町	山城	住民避難	人工壕
16	カニガー	久米島町	銭田	住民避難	人工壕
17	ウシータンメーの壕	久米島町	銭田	住民避難	人工壕



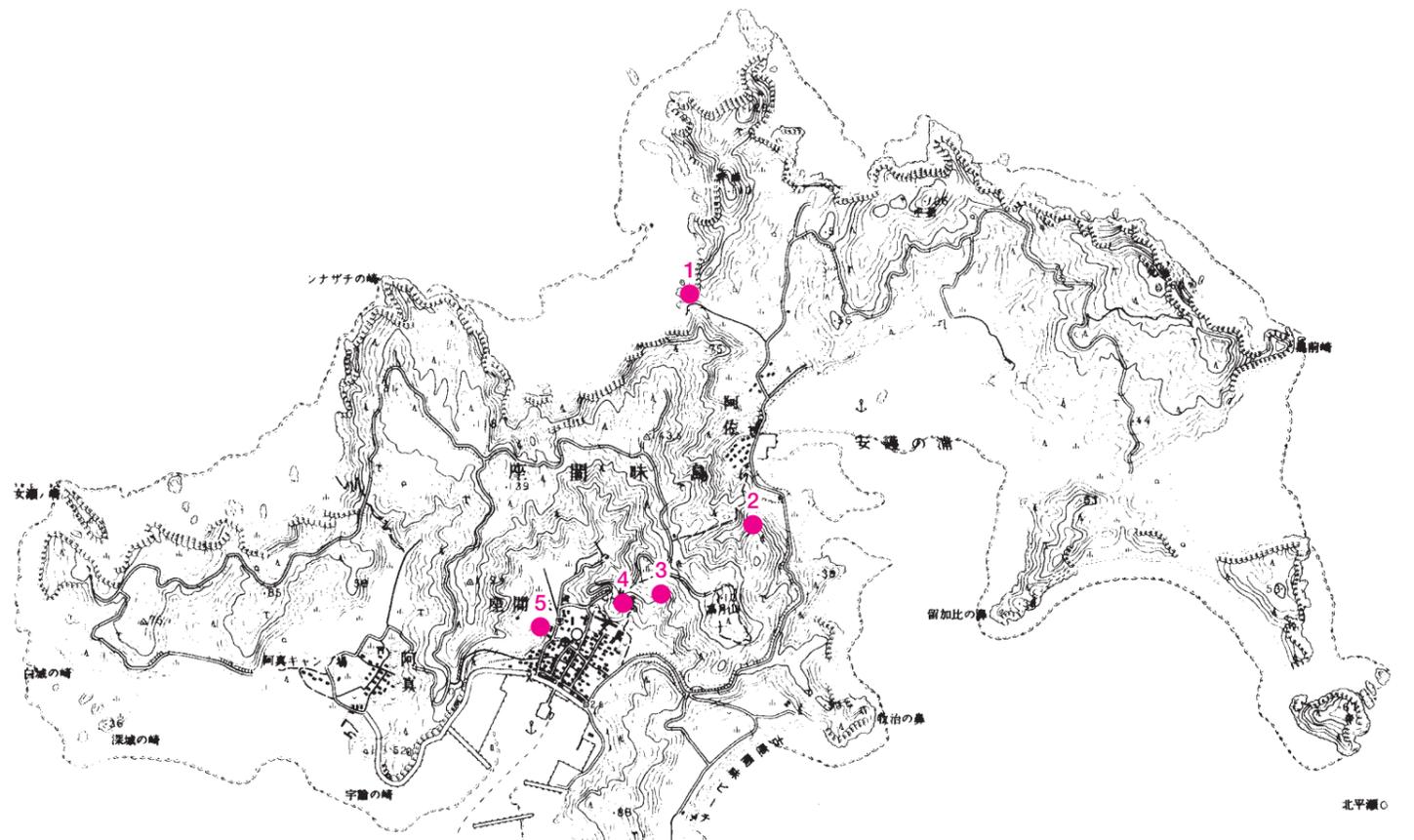
# ⑥ 渡嘉敷村



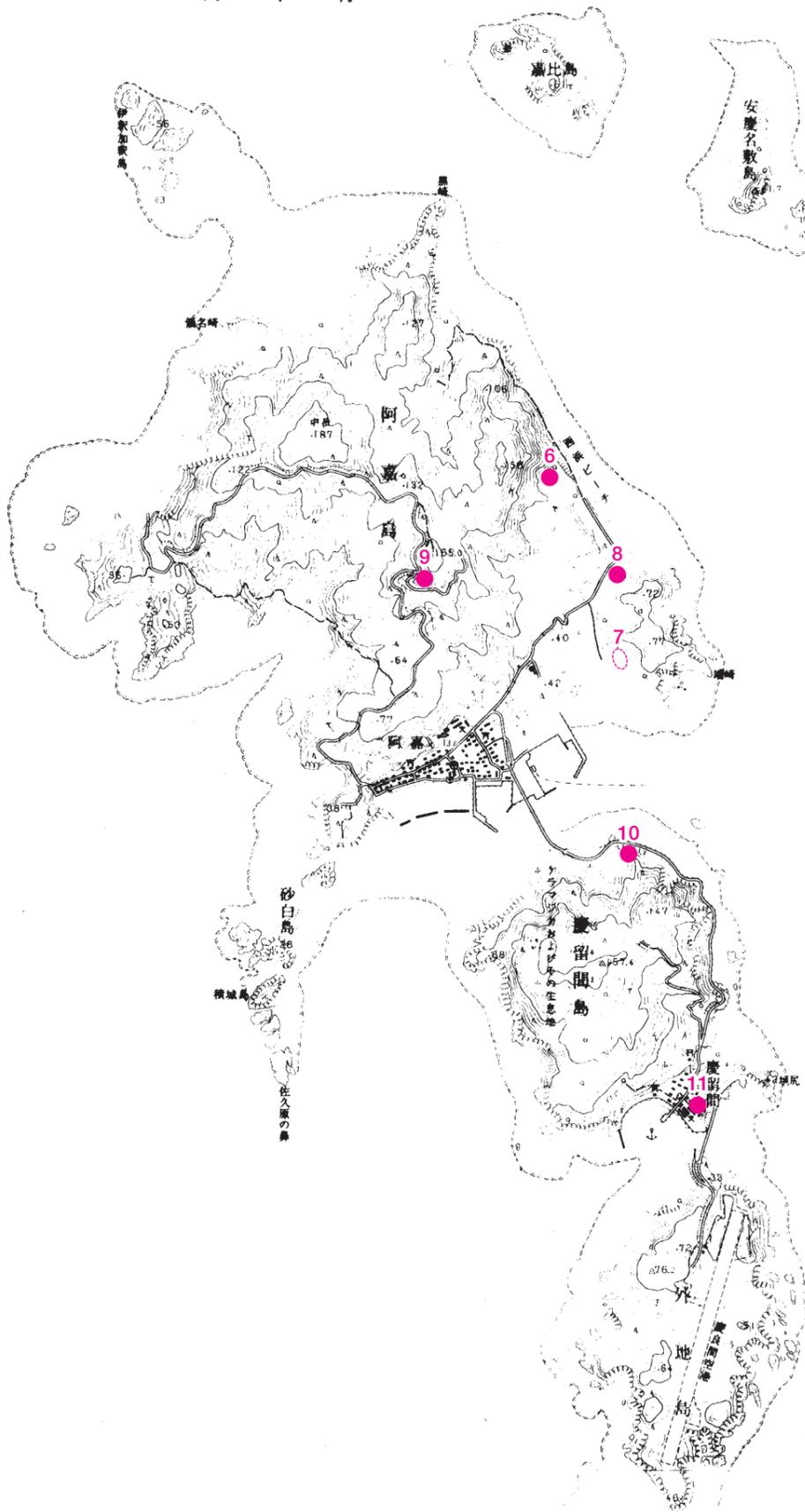
番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	北山（にしやま）の日本軍陣地壕群	渡嘉敷村	渡嘉敷	陣地	人工壕
2	渡嘉敷村の忠魂碑	渡嘉敷村	渡嘉敷	記念碑等	建造物
3	渡嘉敷の住民避難壕	渡嘉敷村	渡嘉敷	住民避難	人工壕
4	渡嘉志久の特攻艇秘匿壕	渡嘉敷村	渡嘉志久	陣地	人工壕



# ⑦座間味村



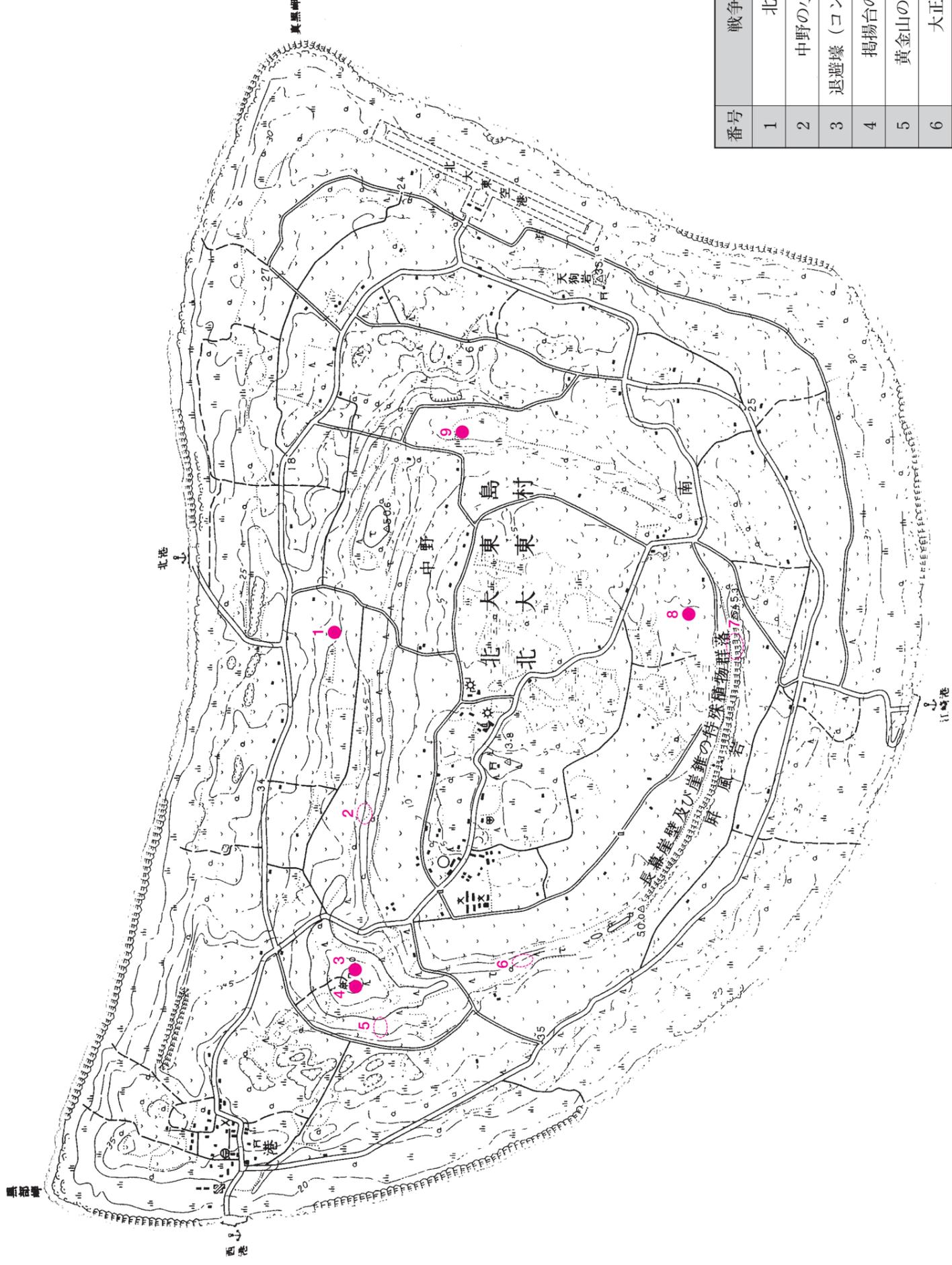
座間味村



番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	阿佐のトゥルーガマ	座間味村	阿佐	住民避難	自然壕
2	大和馬の壕と貯水用のコンクリート壁	座間味村	阿佐	住民避難+陣地	人工壕
3	恩名ガーラの御真影奉護壕	座間味村	座間味	その他	構築物
4	座間味村の忠魂碑	座間味村	座間味	記念碑等	建造物
5	シンジュの壕	座間味村	座間味	住民避難	人工壕
6	海上挺進第2戦隊第3中隊秘匿壕	座間味村	阿嘉	陣地	人工壕
7	海上挺進第2戦隊第2中隊秘匿壕	座間味村	阿嘉	陣地	人工壕
8	クリーンセンター北側の防空壕	座間味村	阿嘉	不明	人工壕
9	中岳南側たこ壺群	座間味村	阿嘉	陣地	構築物
10	海上挺進第2戦隊第1中隊秘匿壕	座間味村	慶留間	陣地	人工壕
11	高良家の弾痕	座間味村	慶留間	その他	建造物



# ⑧北大東村



番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	北泉洞	北大東村	中野	陣地+住民避難	自然壕
2	中野の小銃保管壕	北大東村	中野	陣地	人工壕
3	退避壕 (コンクリート造り)	北大東村	中野	陣地	人工壕
4	掲揚台の監視所跡	北大東村	中野	監視哨	構築物
5	黄金山の陸軍本部壕	北大東村	中野	陣地	人工壕
6	大正村の壕	北大東村	中野	住民避難	人工壕
7	山上隊の壕	北大東村	南	陣地	人工壕
8	井上隊の井戸 (井上隊ガー)	北大東村	南	その他	建造物
9	玉城第2洞	北大東村	南	住民避難	自然壕



# ⑨南大東村

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	バリバリ岩 (陣地跡)	南大東村	北	陣地	自然壕
2	星野洞	南大東村	北	住民避難	自然壕
3	小沢洞 (陣地壕)	南大東村	新東	陣地	自然壕
4	新連隊本部壕 (山下洞)	南大東村	新東	陣地	自然壕
5	海軍忠魂碑	南大東村	新東	記念碑等	建造物
6	秋葉神社鳥居の弾痕跡	南大東村	新東	その他	建造物
7	弾薬庫跡	南大東村	旧東	陣地	人工壕
8	今村軍三の穴	南大東村	旧東	住民避難	自然壕

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
9	大東神社周辺の陣地壕群	南大東村	池之沢	陣地	人工壕
10	金毘羅宮の陣地とガマ	南大東村	池之沢	住民避難+陣地	自然壕+人工壕
11	交通壕・タコ壺群	南大東村	池之沢	陣地	構築物
12	塩屋の銃眼	南大東村	池之沢	陣地	構築物
13	連隊本部壕 (具志堅洞)	南大東村	池之沢	陣地	自然壕
14	監視所 (軍)	南大東村	南	監視哨	構築物
15	電波探知壕	南大東村	南	陣地	人工壕



# ⑩那覇市

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
1	第32軍司令部壕と周辺遺跡	那覇市	首里当蔵町	陣地+その他	人工壕+構築物
2	首里城の忠魂碑	那覇市	首里当蔵町	記念碑	建造物
3	安谷川御嶽のガマ	那覇市	首里当蔵町	住民避難	自然壕
4	首里末吉の山陣地と周辺遺跡	那覇市	首里末吉町	陣地+住民避難	自然壕+人工壕
5	宝口樋川対岸の壕	那覇市	首里桃原町	陣地	人工壕
6	首里桃原町2丁目の壕(亥の方の壕)	那覇市	首里桃原町	陣地+住民避難	自然壕+人工壕
7	首里桃原町2丁目の壕(戌の方の壕)	那覇市	首里桃原町	住民避難	自然壕+人工壕
8	中城御殿の弾痕のある石垣とガマ	那覇市	首里大中町	その他	自然壕+建造物
9	池端町民の防空壕群	那覇市	首里大中町	住民避難	人工壕
10	真嘉比川沿いの壕	那覇市	首里汀良町	住民避難	人工壕
11	虎瀬山公園の陣地跡	那覇市	首里赤平町	陣地	人工壕
12	弁ヶ嶽のトーチカ	那覇市	首里島堀町	陣地	構築物
13	首里崎山町1丁目弾痕の残る壁	那覇市	首里崎山町	その他	建造物
14	雨乞御嶽西崖の壕群	那覇市	首里崎山町	住民避難	自然壕+人工壕
15	ハンナダー古墓地壕群	那覇市	首里崎山町	住民避難	自然壕
16	ヒジガーピラ東側の陣地跡	那覇市	首里崎山町	陣地	人工壕
17	崎山御嶽南側の壕群	那覇市	首里崎山町	不明	人工壕
18	仲村渠山の壕	那覇市	首里金城町	住民避難	自然壕
19	金城町大アカギ北側の壕	那覇市	首里金城町	住民避難	人工壕
20	玉陵南側の壕群	那覇市	首里金城町	不明	自然壕+人工壕
21	首里観音堂南下の陣地跡	那覇市	松川	陣地	不明
22	真嘉比壕跡	那覇市	真嘉比	陣地	人工壕
23	繁多川公園内の壕群	那覇市	繁多川	不明	自然壕+人工壕
24	シガイヌカーの壕群	那覇市	繁多川	不明	自然壕+人工壕
25	新壕(ミーゴ)	那覇市	繁多川	政治行政	自然壕+人工壕
26	識名宮ヌガマ(お宮のガマ)	那覇市	繁多川	住民避難	自然壕
27	イシダのガマ	那覇市	繁多川	住民避難	自然壕
28	ムラグヌガマ	那覇市	繁多川	住民避難	自然壕
29	シッポウヌガマ(県庁壕)	那覇市	真地	住民避難+政治行政	自然壕+人工壕
30	嵩下原の壕群	那覇市	真地	陣地	人工壕
31	識名園勧耕台下の壕	那覇市	真地	陣地	人工壕
32	鳥袋の壕	那覇市	識名	不明	人工壕
33	アガリバンタの壕群	那覇市	識名	陣地	人工壕
34	識名4丁目の壕(識名のガマ)	那覇市	識名	陣地+住民避難	自然壕

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
35	石部隊野戦病院分院の壕(ウフガマ)	那覇市	識名	陣地+住民避難	自然壕
36	楚辺1丁目の壕(城岳の壕)	那覇市	楚辺	陣地	人工壕
37	楚辺フサチ山の壕	那覇市	楚辺・壺川	陣地	人工壕
38	新垣家の弾痕	那覇市	壺屋	その他	建造物
39	てんぶら坂の壕	那覇市	牧志	住民避難	人工壕
40	希望丘公園陣地跡	那覇市	牧志	陣地+住民避難	自然壕
41	宮里家の塀の弾痕	那覇市	牧志	その他	建造物
42	緑丘公園陣地跡	那覇市	牧志	陣地	人工壕
43	旭ヶ丘公園の陣地跡	那覇市	若狹	陣地	人工壕
44	千人ガマ跡	那覇市	辻	住民避難	自然壕
45	辻原墓地避難地	那覇市	辻	住民避難	人工壕
46	垣花台地の陣地跡	那覇市	山下町	陣地	構築物+人工壕
47	山下町大通りの壕	那覇市	山下町	住民避難	自然壕
48	田原2丁目の壕	那覇市	田原	陣地	人工壕
49	ことぶき山壕	那覇市	田原	陣地	人工壕

番号	戦争遺跡名	市町村	所在地	種別	形態
50	赤嶺配水池の壕群	那覇市	赤嶺・安次嶺	陣地	人工壕
51	小祿の共同防空壕群	那覇市	小祿	住民避難	人工壕
52	宇栄原2丁目の壕	那覇市	宇栄原	陣地	人工壕
53	宇栄原3丁目の壕	那覇市	宇栄原	住民避難	自然壕+人工壕
54	崎原灯台跡の壕	那覇市	鏡水	住民避難	人工壕
55	「らくだ山」の海軍陣地壕①	那覇市	鏡水	陣地	人工壕
56	「らくだ山」の海軍陣地壕②	那覇市	鏡水	陣地	人工壕
57	「らくだ山」の砲台跡	那覇市	鏡水	陣地	構築物
58	掩体壕	那覇市	鏡水	陣地	構築物
59	戦闘指揮所壕	那覇市	鏡水	陣地	構築物
60	正木隊の壕	那覇市	鏡水	陣地	人工壕
61	高射砲部隊の壕	那覇市	住吉町	陣地	人工壕
62	海軍砲台跡	那覇市	当間	陣地	構築物
63	掩体壕群	那覇市	高良	陣地	構築物

